

後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

具 同 中 山 遺 跡 群

第2分冊 1991年度

1992・3

高 知 県 教 育 委 員 会
財高知県文化財局埋蔵文化財センター

後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

具 同 中 山 遺 跡 群

第 2 分冊 1991年度

1 9 9 2 ・ 3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



古代・中世検出遺構



SK 2 遺物出土状況

序

高知県教育委員会では、建設省四国地方建設局の委託を受けて昭和61年度から継続して中筋川の河川改修に伴う緊急発掘調査を実施してきておりますが、平成3年度より(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの開設に伴い、高知県文化財団が高知県教育委員会より再委託を受け実施しました。

本書は、平成元年度から3年度にかけて調査を実施しました具同中山遺跡群の調査のうち、平成3年度分の成果をまとめたものです。縄文時代から近世までの複合遺跡として、県内でも貴重な資料を得ることができました。特に古墳時代の祭祀跡や、中世の集落及び土壙墓等が検出され、古墳時代の祭祀遺物や土壙墓からの中国産の青磁碗等、遺跡の性格を窺わせる資料も出土しています。この報告書が埋蔵文化財の保護・保全、更には今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、建設省四国地方建設局の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、関係各位から寄せられました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

所長 小橋 一民

例 言

1. 本書は、中筋川の河川改修工事に伴う埋蔵文化財 ― 具同中山遺跡群の平成3年度発掘調査報告書である。
2. 調査は、建設省四国地方建設局より、高知県教育委員会が委託を受け、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。発掘調査期間は、平成3年5月9日から平成3年10月24日まで、出土遺物整理作業及び報告書作成は平成3年度に実施した。
3. 調査体制は次のとおりである。

調査員	江戸秀輝 (高知県文化財団埋蔵文化財センター調査員)
ク	前田光雄 (ク)
ク	松田直則 (ク)
調査補助員	藤方正治 (高知県文化財団埋蔵文化財センター調査補助員)
庶務	山崎浩 (高知県文化財団埋蔵文化財センター事業課長)
ク	三浦康寛 (高知県文化財団埋蔵文化財センター主事)
4. 本報告書の作成及び編集は高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが行った。編集実務については藤方が行い、本文執筆は江戸・藤方・前田がそれぞれ分担し、文末に執筆者名を記した。
5. 出土遺物の写真図版中の番号については、実測図の番号と一致している。
6. 遺構については、祭祀跡と考えられる集中地点をSF、土壌をSK、掘立柱建物跡をSB、溝状遺構をSDで表示した。
7. 報告書に掲載の縮尺率は、それぞれに示した。高度値は海拔高であり、方位は磁北である。
8. 出土遺物、その他の関係資料は、高知県文化財団埋蔵文化財センターにおいて保管している。
9. 現場作業員並びに整理作業員は以下に記したとおりである。

現場作業員

大久保友春・岡上悦美・岡上孝子・岡上瑞枝・岡上定美・岡本末広
岡本寿美子・岡本弘美・岡本光子・沖和子・尾崎幸美・柿葉常男
桑原照美・瀬尾操・地引博司・長崎桂子・中山米尾・中山末子
布ツルキ・布陽子・野並櫛・橋田逸於・浜田昌一・浜田穰
林延子・前田啓子・正木信邦・松本俊彦

整理作業員

井上博恵・臼木由里・大原喜子・小松経子・竹村延子・中西純子
浜田雅代・松本富子・矢野雅・山中美代子・山本利恵・山本典代
山本裕美子・吉本睦子・西内宏美

10. 調査にあたっては、建設省四国地方建設局中村工事事務所及び第一出張所、中村市教育委員会の御協力をいただいた。また、以下の諸氏から御協力・御助言をいただいた。記して感謝したい。

岡本健児・木村剛朗・曾我貴之・出原恵三・廣田佳久・森田尚宏

報 告 書 要 約

1. 遺 跡 名 具同中山(ぐどうなかやま)遺跡群
遺跡番号 070052 遺跡地図 No. 22-46
2. 所 在 地 高知県中村市具同中山 1254-6
3. 立 地 中筋川下流域左岸 沖積地 標高 1~5 m
4. 種 類 縄文時代(遺物包蔵地)。弥生~古墳時代(祭祀跡)。奈良~平安時代(遺物包蔵地, 集落跡)。鎌倉~室町時代(遺物包蔵地, 集落跡)。
5. 調査主体 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター・高知県教育委員会
6. 調査契機 中筋川河川改修
7. 調査期間 1991年5月9日~同年10月24日
8. 調査面積 2,600 m²
9. 検出遺構 (弥生時代)焼土・炭化物集積地点を中心とする祭祀跡数基。(古墳時代)祭祀跡3基。(中世)SB8棟, SD2条, 土壙墓2基, 柱穴200個。(近世)集石遺構1基, 石列遺構1基。
10. 出土遺物 (縄文時代)晩期深鉢・打製石斧。(弥生時代)前期高杯・壺・甕・甑。(古墳時代)土師器の甕・壺・高杯, 須恵器の甕・甗・杯・高杯, 手捏ね土器, 土製の勾玉・鏡, 滑石製の白玉, 石器など。(古代・中世)土師器の皿・杯・椀・鍋・羽釜, 青磁碗, 白磁碗, 石鍋, 常滑焼の甕など。
11. 内容要約 今回の調査は1989年度から実施されて来た調査の最終年度に当り, 縄文時代から中世に亘る良好な資料を得た。縄文時代の遺物は, 打製石斧・台石・晩期の深鉢であり, 標高1.5m付近からの出土である。弥生時代の遺物では, 前期の綾杉紋を持つ高杯が出土しており, 古いものは単独で, 又, 新しいものについては焼土や炭化物と共に出土する傾向にある。古墳時代の祭祀跡はSF19~21の3ヶ所が存在する。SF19は, 須恵器を中心とした祭祀跡であるが遺物は散在しており, 祭祀の縁辺部であると考えられる。SF20・21は, 土師器を中心とする祭祀跡であり, 標高3.5m付近で検出された。古代・中世の遺物の多くは標高4.5m付近の遺物包含層2層からの出土であり, 遺構は調査区の北西部分で200個に及ぶ柱穴群等を検出した。柱穴群に南接する土壙墓は火葬墓と考えられ, 竊蓮弁紋を持つ青磁碗が4個体, 他に土師器鍋, 白磁碗などが出土している。

本文目次

序

例言

報告書要約

本文目次

挿図目次

第1章 調査の方法と経過	1
1) 調査の方法	1
2) 調査の経過	1
第2章 基本層序	3
第3章 遺構と遺物	5
第1節 縄文時代	5
1) 出土状況	5
2) 出土遺物	5
第2節 弥生時代	5
1) 出土状況	5
2) 出土遺物	5
第3節 古墳時代	15
1) 出土状況	15
2) 出土遺物	16
第4節 中・近世	39
1) 検出遺構	39
2) 出土遺物	48
第4章 総括	56

写真図版

挿 図 目 次

- | | | | |
|--------|----------------------------|--------|------------------|
| 第 1 図 | 調査区グリッド設定図 | 第 14 図 | SF 21 出土遺物実測図(2) |
| 第 2 図 | 北壁セクション | 第 15 図 | SF 21 出土遺物実測図(3) |
| 第 3 図 | 弥生時代遺物出土位置図(上)
垂直分布図(下) | 第 16 図 | SF 21 出土遺物実測図(4) |
| 第 4 図 | 縄文時代遺物実測図 | 第 17 図 | 中・近世遺構全体配置図 |
| 第 5 図 | 弥生時代遺物実測図(1) | 第 18 図 | SB 1～4 実測図 |
| 第 6 図 | 弥生時代遺物実測図(2) | 第 19 図 | SB 5～8 実測図 |
| 第 7 図 | 弥生時代遺物実測図(3) | 第 20 図 | SD 2 実測図 |
| 第 8 図 | SF 19 遺物出土状況図 | 第 21 図 | SK 2 実測図 |
| 第 9 図 | SF 21 遺物出土状況図 | 第 22 図 | 集石平面実測図 |
| 第 10 図 | SF 19 出土遺物実測図 | 第 23 図 | 炉跡Ⅰ実測図 |
| 第 11 図 | SF 20 出土遺物実測図(1) | 第 24 図 | 炉跡Ⅱ実測図 |
| 第 12 図 | SF 20 出土遺物実測図(2) | 第 25 図 | 中・近世遺物実測図(1) |
| 第 13 図 | SF 21 出土遺物実測図(1) | 第 26 図 | 中・近世遺物実測図(2) |
| | | 第 27 図 | 中・近世遺物実測図(3) |

第1章 調査の方法と経過

1) 調査の方法

平成元年2年度調査に引き続き、平成3年度の具同中山遺跡群発掘調査を実施した。本年度調査においては、本年度調査対象区の西端、上流側より仮称1区、2区(1区、2区は隣接する)、平成元年・2年度の調査区の北部分を3区として発掘区を設定し、発掘調査を行う。

本年度調査区1・2・3区の遺物取り上げや遺構の実測は、昭和61年度に実施した具同中山遺跡群発掘調査の際に設けたトラバースポイントを基準に、新たにトラバースポイントを設定し、まず20×20m方眼を組み、南北をアルファベット、東西を数字で表し、さらに4×4m方眼に分けて行った(第1図)。

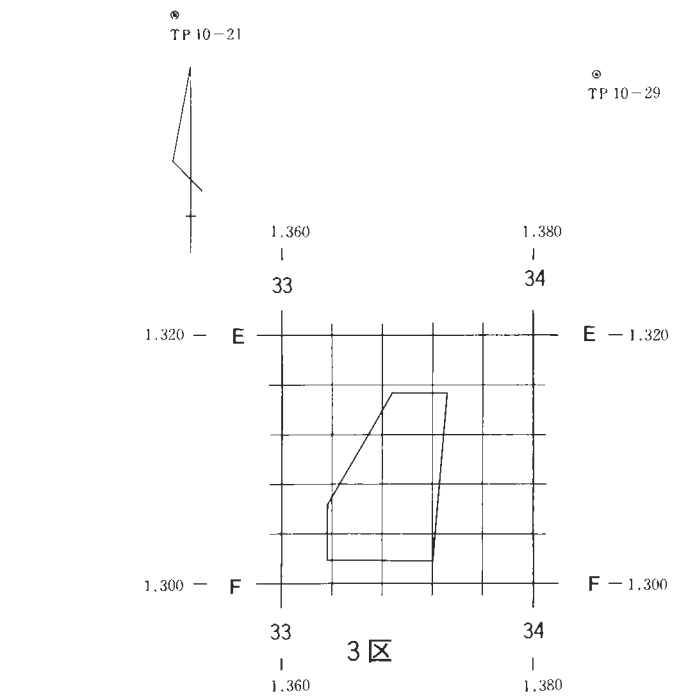
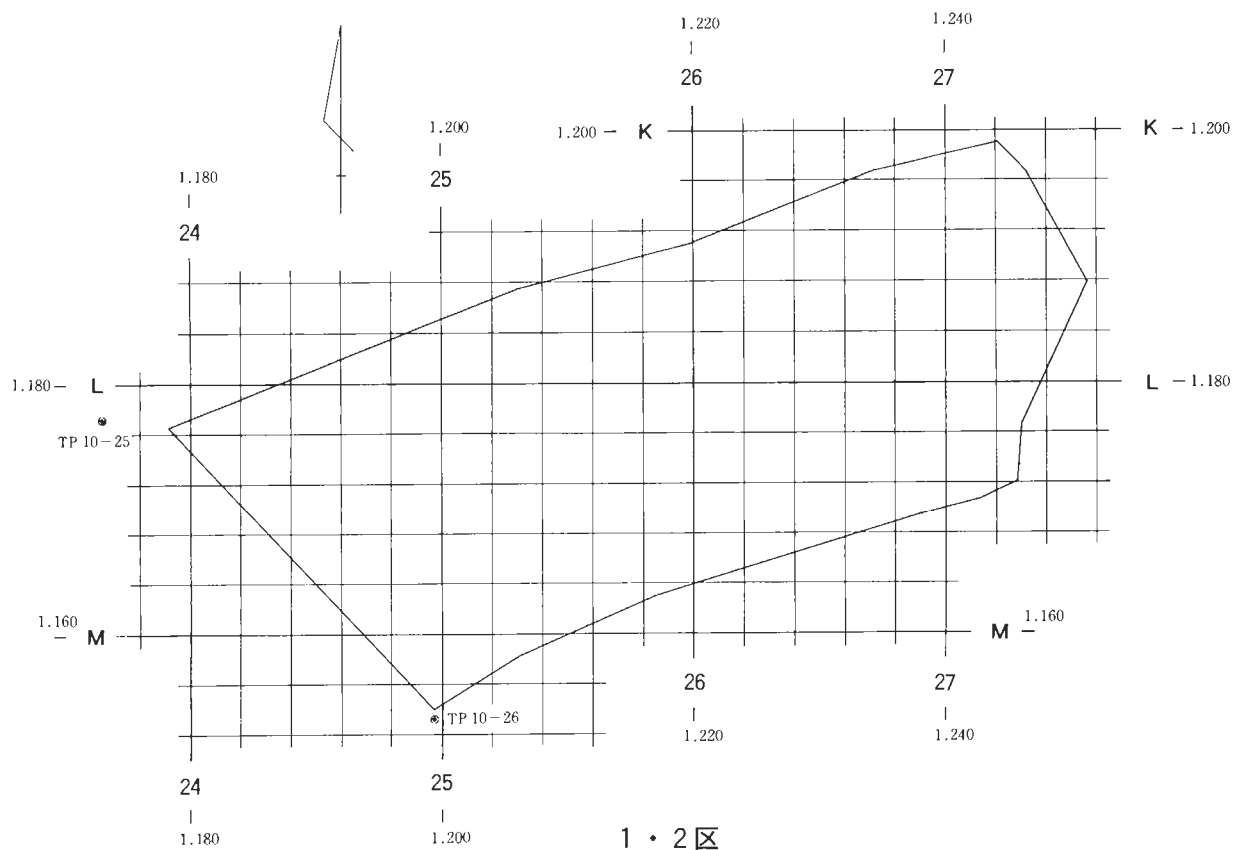
発掘調査は表土を重機により除去し、中世の遺物包含層面まで掘り下げを行い、遺物包含層確認後は人力による掘り下げを行う。遺物は出土地点とレベルの測量を行い、図化及び写真撮影を行う。遺構は検出後、柱穴跡は半截し、土層堆積状況を観察した後、完掘し平面図を作成し写真撮影を行った。溝状遺構等については数カ所ずつ土層堆積状況を測量、図化し、写真撮影を行った。各調査区、遺構検出面において、それぞれの遺構完掘後に全景写真を撮影した。

2) 調査の経過

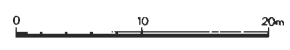
発掘調査は1・2区については、中世の遺物包含層面及び遺構は柱穴・土壙墓・溝跡を検出した。測量、写真撮影等諸調査完了後、中世の検出面の下層で、古代の遺物包含層面を確認し、中世同様調査後、さらに下層の確認作業を行った。掘り下げの結果、古墳時代全般の遺物包含層面を確認し、その出土遺物には祭祀に用いられたと思われるものが多く、それより祭祀跡2カ所を確認した。遺物出土状況を測量、図化し、祭祀跡を明確にし、写真撮影後遺物を取り上げた。さらに下層より、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物包含層面を確認した。他の時期同様調査後、下層に掘り進んだところ、1区より、縄文時代晩期の土器片と石斧が出土した。以上の結果、検出遺構面については4面が確認されたこととなる。

3区については、1・2区同様、まず、表土を重機により除去し、中世の遺物包含層面及び遺構の検出作業を行うが、同時期の遺物及び遺構は検出されず、古代についても同様であった。さらに下層より、古墳時代の遺物包含層面を確認し祭祀跡1カ所を検出した。測量、写真撮影、遺物取り上げ後、古墳時代の検出面の下層を調査したが、遺物・遺構共に検出されなかった。

発掘調査面積は2,600m²である。調査完了区については埋め戻しを行い、随時整理作業を行い本書の作成にあたった。(江戸)



- TP 10-21
- X, Y = 1345.896, 1351.538
- TP 10-25
- X, Y = 1177.009, 1173.341
- TP 10-26
- X, Y = 1153.446, 1199.590
- TP 10-29
- X, Y = 1340.941, 1385.008



第1図 調査区グリッド設定図

第2章 基本層序

1991年度の中筋川の発掘調査区における、基本層序は大きくⅠ層からⅨ層迄分けることができる(第2図)。この内遺物を包含していた層は、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸの各層であり、明確な遺構が確認できたのは、Ⅴ層とⅦ層であった。以下それぞれに付いて少し詳しく見ていく。

Ⅰ層・Ⅱ層 近・現代の耕作に関わるものである。

Ⅲ層 調査区の北側では層序図に見る様に明らかな堆積をみるものの、南へ行くに従い近・現代耕作に伴う削平によって極く薄い状態で検出された。遺構等は確認されず、出土遺物より中世遺物の包含層と思われる。明褐色土層である。

Ⅳ層 この直下のⅤ層を基盤とする遺構の埋土はこの層を基本とする。中世の遺物を多く含む。暗褐色土層である。

Ⅴ層 この層の上部で柱穴を中心とした遺構群を検出した。段階的に幾度か生活面が存したものと考えられるが、断面では観察できなかった。中世の遺物を多く含む。黄褐色土層であり、締りがあり粘性がなく、茶褐色の斑点を多く含む。

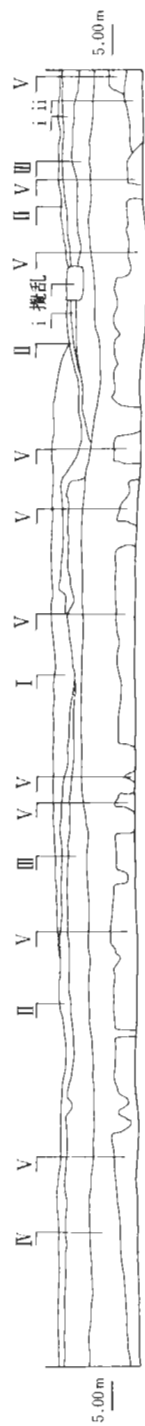
Ⅵ層 この層と下のⅦ層の境は明確でなく、色調も場所によって若干違いが認められた。灰褐色土層であり、締りがあり粘性もあり、鉄分を多く含む。

Ⅶ層 古墳時代祭祀跡、弥生時代祭祀跡を検出したのはこの層である。前者は標高3.50mにおいて、後者は標高3.00mで検出した。青灰色粘質土層であり、締りがあり粘性も強い。

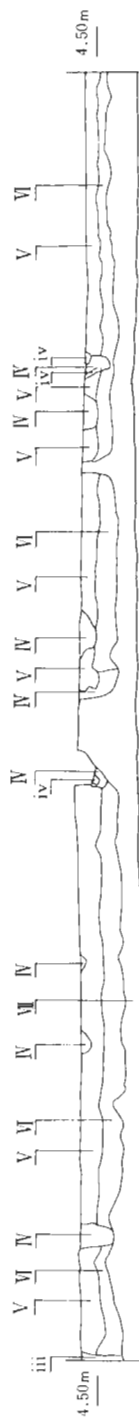
Ⅷ層 遺物等は確認されなかった。色調はⅦ層に較べてやや黒色を帯び、粘性も強い。厚さは調査区中央部で約50cmを測る。

Ⅸ層 縄文晩期土器破片や打製石斧、台石を検出したのは標高1.50m附近であった。緑色を帯びた青灰色シルト層である。

調査区の西側は中筋川の旧河道内に当たるためか、上に示す様な層の堆積状況は確認できなかった。(藤方)



北壁セクション (上層)



北壁セクション (下層)

- I : 耕作土
- II : 床土
- III : 明褐色土層
- IV : 暗褐色土層
- V : 黄褐色土層
- VI : 灰褐色土層
- VII : 青灰色粘質土層
- i : 黄褐色土
- ii : 褐色土
- iii : 暗灰褐色土
- iv : 淡灰褐色土



第2図 北壁セクション

第3章 遺構と遺物

第1節 縄文時代

1) 出土状況 (第3図)

今回の調査で検出した遺構及び遺物で最も標高が低い部分からのものは、焼土跡と縄文晩期土器片であり、標高 1.46 m からの出土であった。直径 0.5~1 m のほぼ円形を呈して検出される焼土と炭化物の集積地もⅨ層の標高 1.50 m 周りに存在した。調査区の北端におけるⅨ層内から台石として使用されたと考えられる 40 cm 大の平らな石も検出されている。(藤方)

2) 出土遺物 (第4図 1, 2)

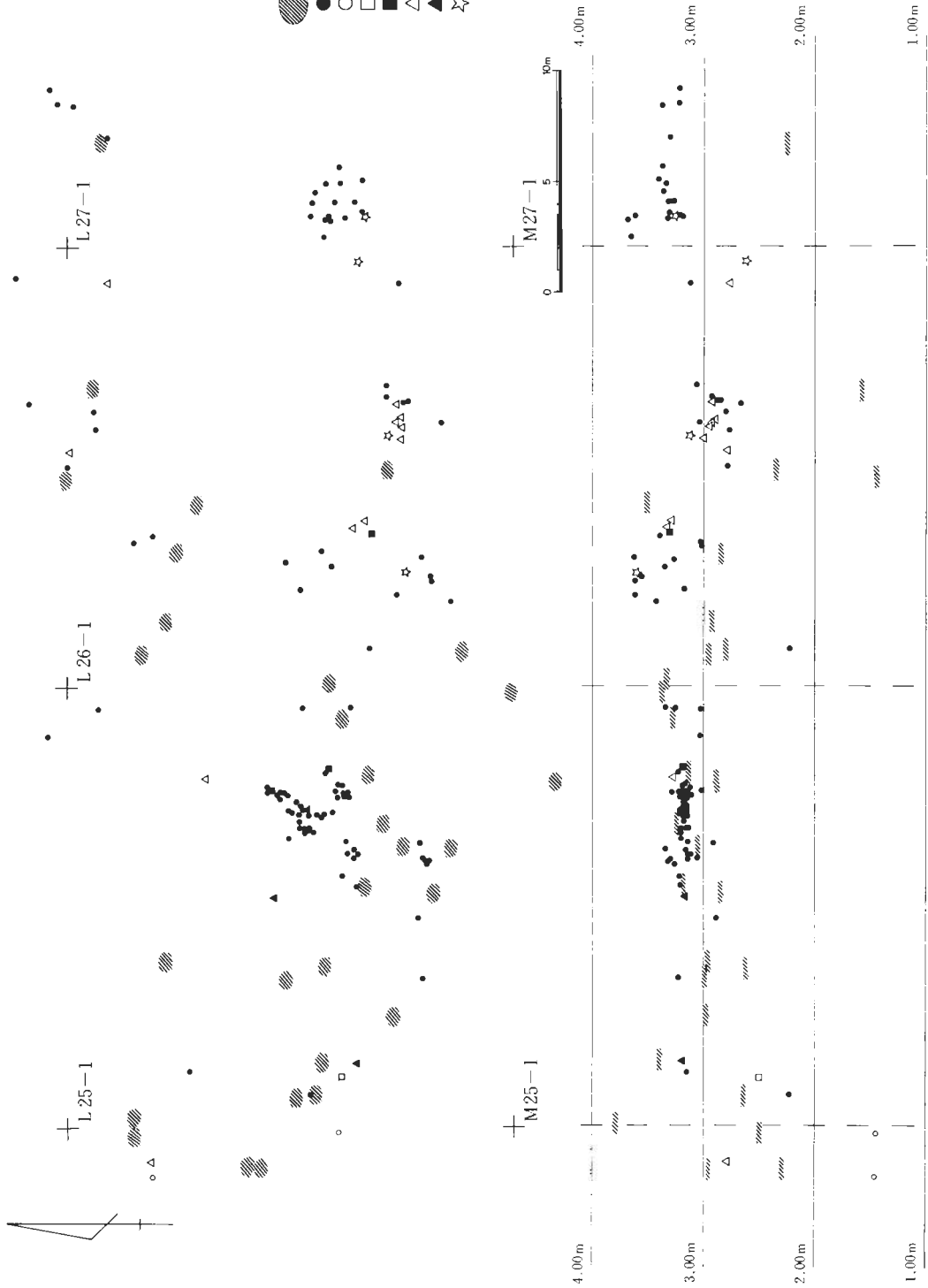
1 は縄文時代晩期の刻目突帯文土器である。胴部の曲折部に突帯を施し、突帯上に刻目を入れる。外面にはやや粗い条痕がみられ、内面はナデる。中村市中村貝塚を標式とする晩期後半の中村Ⅱ式に相当するものと思われる。

2 は撥型を呈する打製石斧である。全長 14.2 cm、最大幅 7.8 cm、最大厚 2.6 cm を測る。裏面は大きく打ち欠き、平坦面を利用し、表面は右側縁を数度に亘り敲打し、左側縁は大きく敲打した後、僅かに調整するのみである。刃部は広く中央部を大きく敲打し、左右を数回敲打調整刃部を作出している。石質は頁岩製か。(前田)

第2節 弥生時代

1) 出土状況 (第3図)

古墳時代の祭祀跡に匹敵する規模を持つ祭祀跡はⅥ層下部以下では確認できなかったが、祭祀の痕跡は多くの資料を得る事ができた。先ず、焼土及び炭化物は直径 50 cm 程のほぼ円形を呈して、標高 1.50 m 周りから検出されている。弥生時代の出土遺物で最も深いものは標高 2.24 m で出土した弥生中期の甕である。炭化物等の集積で時期が確定できるのは、標高 2.51 m から弥生土器の高杯を伴って検出されたものである。以降、標高 3 m 付近迄炭化物のみ、焼土のみ、焼土と炭化物それぞれの集積地点が数多くみられ、標高 3.20 m で 2ヶ所の弥生土器



を伴う祭祀跡を確認する。

一つはL25-14, L25-19グリッドを中心に出土した弥生土器の甕と20cm大の河原石,そして,それらに隣接して直径1mのほぼ円形を呈した焼土と炭化物の集積が4ヶ所ある。炭化物の中に土器を含むものも存在した。

もう一ヶ所はL26-18, 19グリッドで検出された弥生土器を伴う集石である。石は河原石で最大でも10cm大である。直径1mのほぼ円形の範囲内に石を敷き詰めた状態で検出され,周辺に弥生土器の甕, 甌等を出土している。(藤方)

2) 出土遺物 (第5~7図3~43)

3は高杯の脚部である。調査区西部のL25-16グリッドの標高2.515mからの出土である。脚部から杯部への変換点に,刷毛状工具による綾杉紋を施した断面三角形の小突帯を廻らす。また,脚部内面には半截竹管による押圧痕を留める。

4~12は甕である。4はL26-20グリッドの第Ⅶ層からの一括出土である。直線的に外上方に向う口縁部と外面に施された細かな刷毛目を持つ。5はL25-15グリッドの標高3.205mからの出土である。頸部から大きく外反し短い口縁部が付く。6はL25-12グリッドからの出土である。粘土帯を貼付し肥厚した口縁部を持つ。7~9はL25-14グリッドからの出土であり,標高はそれぞれ3.177m, 3.21m, 3.178mであった。7・8は緩やかに外反する口縁部を持つ。9は直線的に外上方に向う口縁部を持つ。10・11は共にL26-12グリッドからの出土であり,標高は10が3.354m, 11が3.19mであった。両者共,口縁部は外面に粘土帯を貼付し肥厚する。12は調査区西部の第Ⅶ層から出土した。頸部からやや外反する口縁部を持つ。

13~16は甕か壺の底部である。13はL26-17グリッドの標高3.324mから出土した。粗い原体による刷毛目を持つ。14はL25-14グリッドの標高3.172mから,15はL26-4グリッドの標高2.818mからの出土である。16はL25-15グリッドの第Ⅶ層から一括出土であり,体部下端に篋状工具による圧痕を残す。

17~19は壺である。17は口縁部の破片である。L25-14グリッドの標高3.207mからの出土である。口縁端部は外側に粘土帯を貼付し肥厚する。18はL25-14グリッドの標高3.175mからの出土である。明褐灰色を呈し,体部中位外面に煤が付着する。19はK25-20グリッドの標高3.052mからの出土である。大きく開く口縁部を持ち,口縁端部には粘土帯を貼付し上下に肥厚する。この粘土帯の外面には刷毛目,内面には刻み目が施される。

20は小型の甕である。L25-19グリッドの標高3.168mからの出土である。口縁部直下に頸部を有する。内外面に撫で調整を施し,端整な仕上がりを示す。21は鉢と考えられる。底部が欠損している。L26-4グリッドの標高2.815mからの出土である。体部は内湾ぎみに立ち上がり,口縁端部は丸く収める。

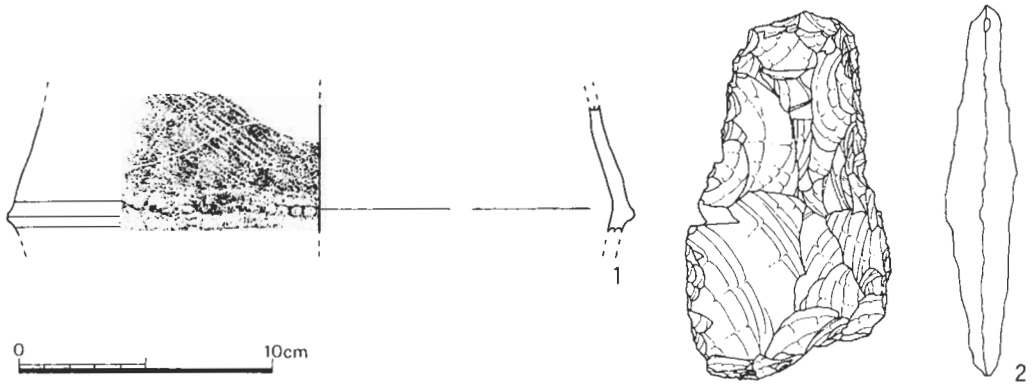
22～24 は甕か壺の底部である。何れも調査区中央部南で検出された祭祀遺構と思われる小石の集中部分からの出土である。22・23 は共にL26-19 グリッドから、24 はL26-18 グリッドからの出土である。標高は23が3.057 mであり、24が3.019 mを測る。22～24の内外面には煤の付着を見る。

25～35 は甕である。25・28・33 は粗い刷毛原体による調整を、外面では縦方向に、内面では横方向に施したものである。25 はL24-10 グリッドの第Ⅶ層の一括出土である。28 はL26-19 グリッドの標高2.953 mから、33 はL26-18 グリッドの標高3.019 mからの出土である。26 はL25-14 グリッドの標高3.195 mからの出土である。これは体部上位で丸く内湾し頸部で大きく外反して口縁部で開くものである。27 はL25-9 グリッドの標高3.295 mからの出土である。体部は内湾ぎみに立ち上がり、内面には篋状工具による撫でを施す。29 はL26-10 グリッドの標高3.257 mからの出土である。底部は中央でやや下方に膨らんだ平坦面を呈し、内外面はほぼ全域に刷毛目を施す。30 はL25-9 グリッドの標高3.198 mからの出土である。内面に成形時の粘土帯接合痕と指頭圧痕を留める。31 はL26-17 グリッドの標高3.302 mからの出土である。外面に粗い刷毛目を施し、体部下位より口縁部に至るまで煤の付着部を見る。32 はL26-17 グリッドの標高3.337 mからの出土である。最大径を口縁部に持ち、体部外面中位以上に煤が付着する。34 は調査区東部からの一括出土である。灰白色を呈し、体部外面中位以上に煤の付着部分を見る。35 はL26-18 グリッドの標高2.964 mからの出土である。口縁部を欠損している。内面に成形時の粘土帯接合痕と指頭圧痕を留め、体部外面の下位から頸部にかけて煤が付着する。

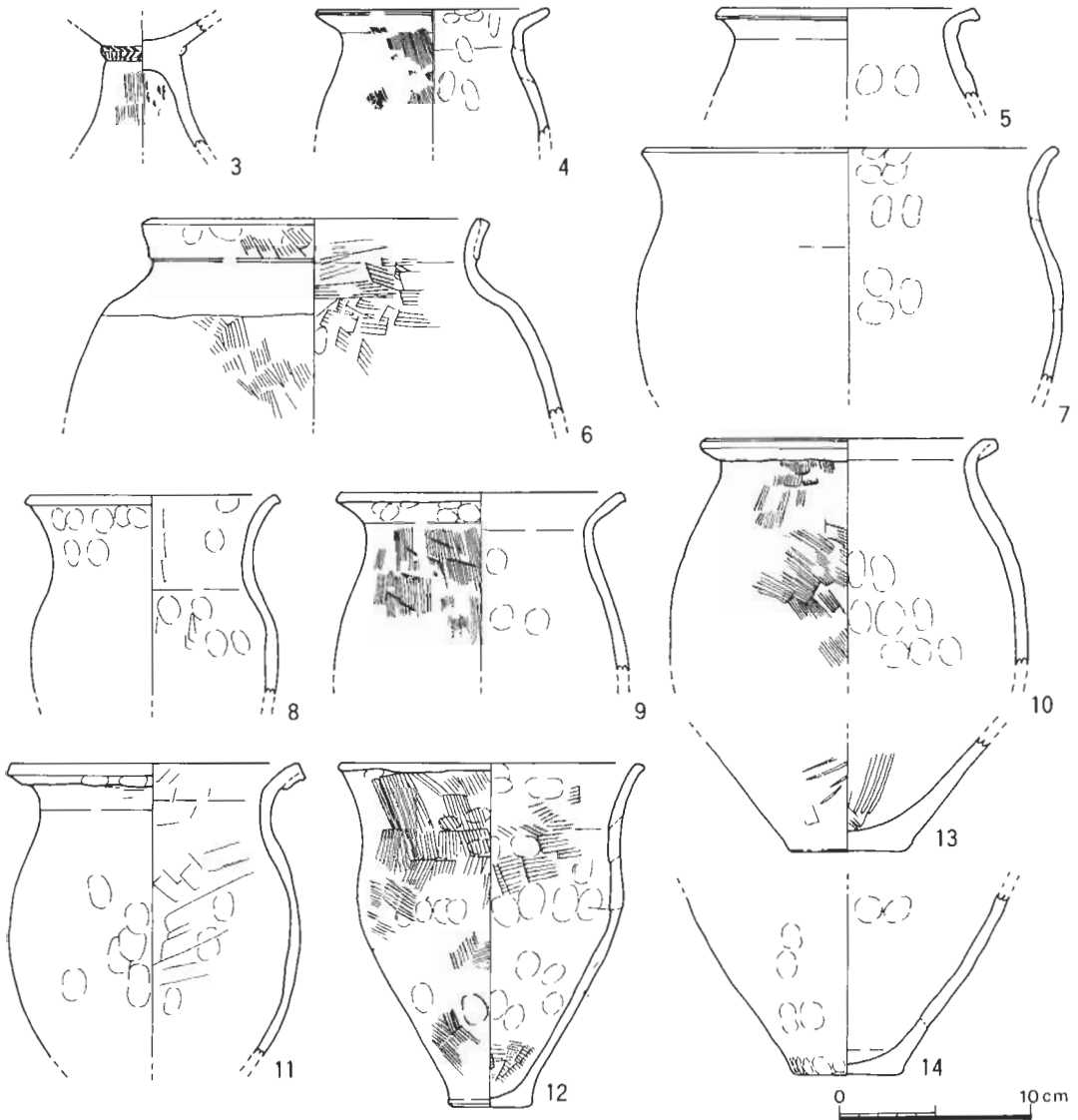
36 は甕である。L26-19 グリッドの標高2.919 mからの出土である。形態は同時期の甕と同じであるが、底部に直径5 mmの穴が穿たれている。甕として形成されたものではなく、本来甕として形作られたものに穿孔を施したものである。体部外面には下位から煤の付着が見られ上位にまで達する。

37～39 は甕か壺の底部である。37 はL26-19 グリッドの標高2.91 mからの出土である。体部下位で外上方に大きく開く、外面には下位から煤が付着する。38 はL26-18 グリッドの標高3.019 mからの出土である。平坦な底部は中央部分で下方にやや膨む。体部外面下位に煤の付着を見る。39 はL25-10 グリッドの標高3.23 mからの出土である。底部の平坦面は小さく、体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。

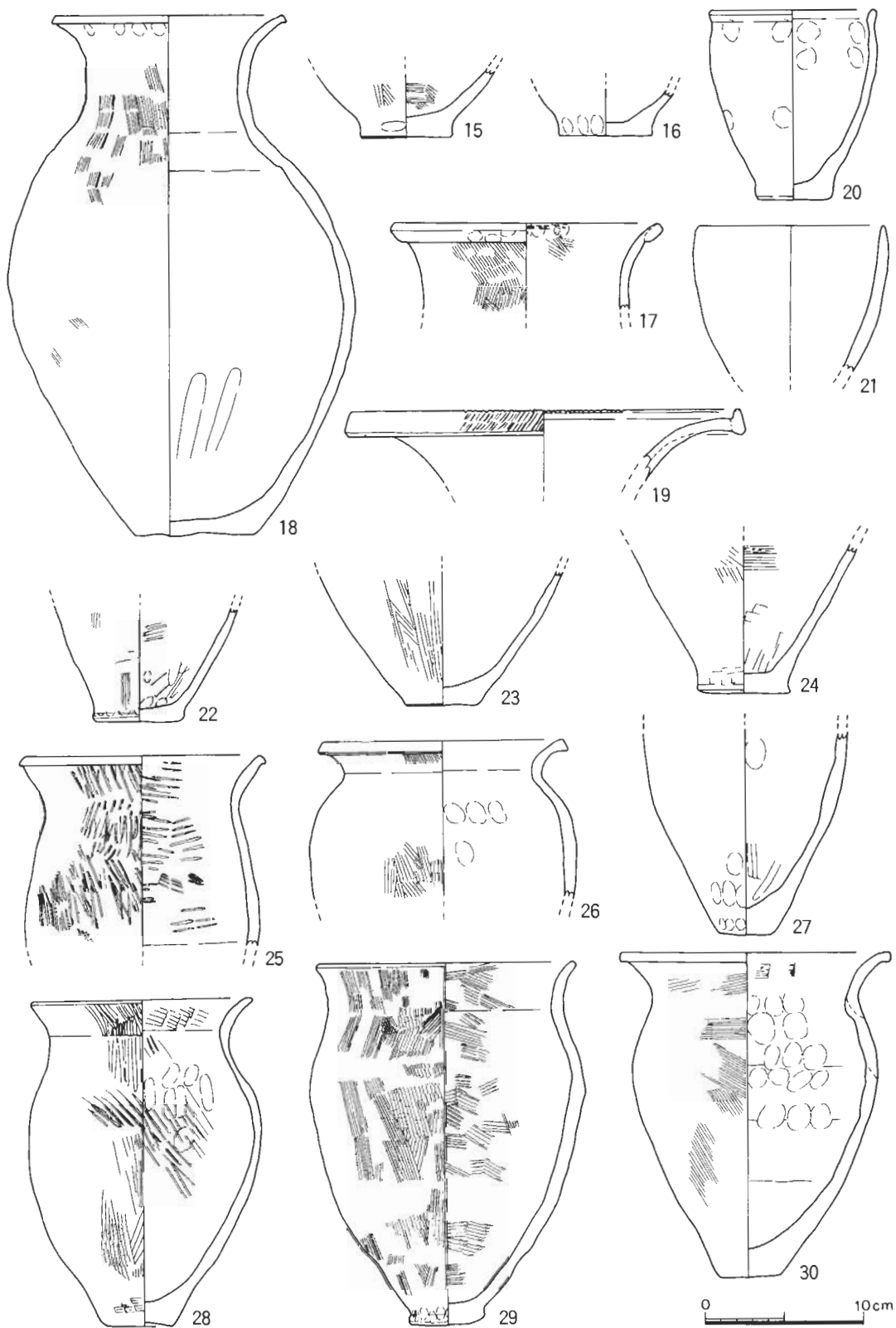
40 は壺の頸部である。L25-9 グリッドの標高3.213 mからの出土である。頸部外面に斜格子の刻み目を施した突帯が付く。41 は甕である。L26-12 グリッドの標高3.045 mからの出土である。内外面に粗い刷毛原体による調整を施し、頸部内面には篋削り痕を留める。42 は鉢である。平坦な底部の端は丸味を帯び内湾する体部へと続く。体部外面に叩き目を施す。43 は体部下位が底部端から大きく外上方に開くことから壺の底部と考えられる。L25-13 グリッドの標高3.184 mからの出土である。体部下位に煤の付着部分や赤変部分が見られる。(藤方)



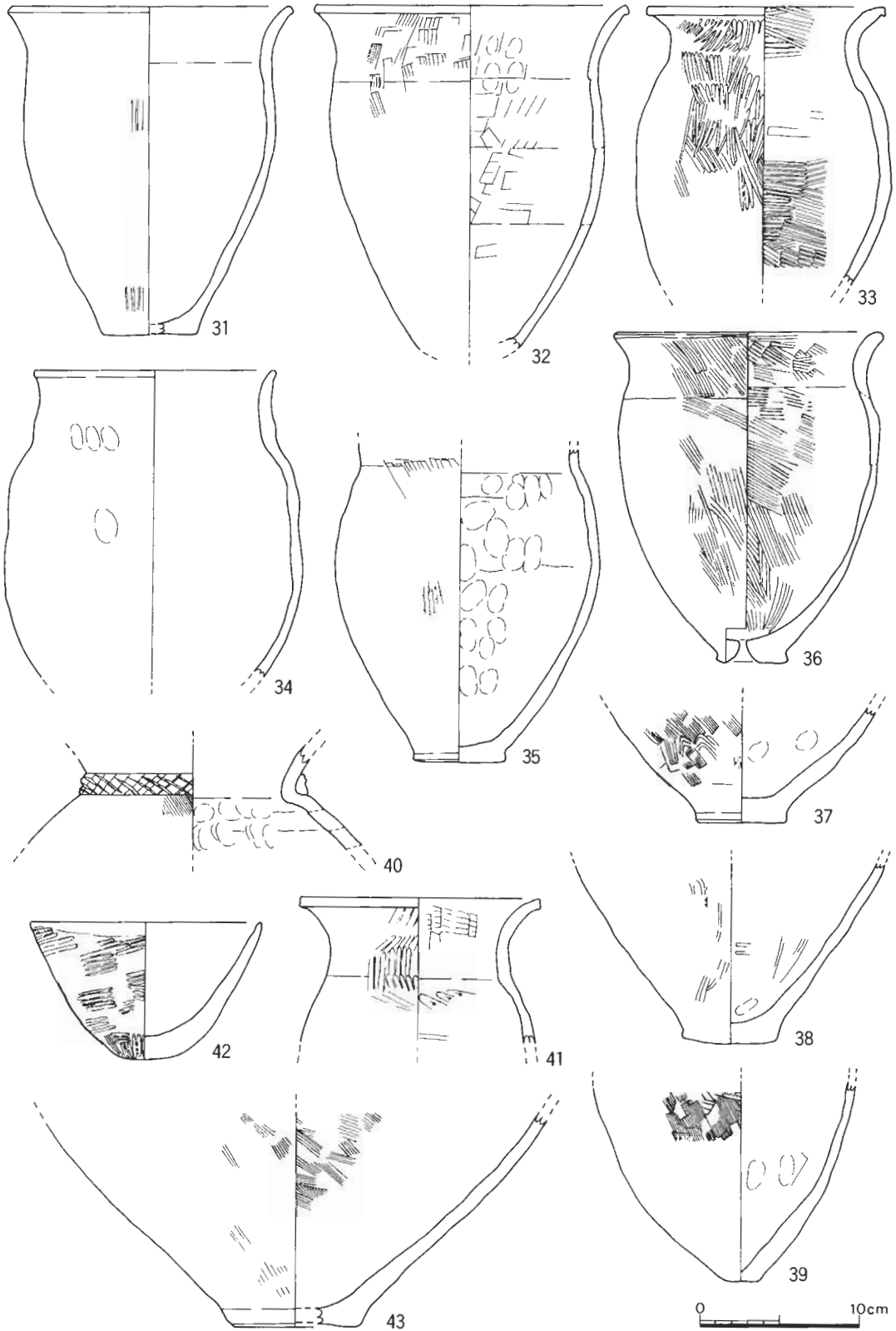
第4図 縄文時代遺物実測図



第5図 弥生時代遺物実測図(1)



第6図 弥生時代遺物実測図(2)



第7図 弥生時代遺物実測図(3)

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
5 - 3	L25-16	高杯	— (6.8) — —	脚部から杯部への変換点に断面三角形の小突帯を廻らす。	杯部内面、脚部外面に刷毛調整、脚部内面に半載竹管の押し痕を残す。小突帯に刷毛状工具による綾杉紋を施す。	
〃 - 4	L26-20	堿	12.2 (7.2) — —	緩かに外反する頸部から口縁部は直線的に外上方に向う。口縁端部は丸くおさめる。	外面は刷毛調整、内面には指頭圧痕が残る。体部上位外面に煤が付着する。	
〃 - 5	L25-15	〃	13.4 (4.8) — —	頸部から大きく外反して口縁部に至る。口縁端部は肥厚し、外傾する面をなす。	口縁部内外面に撫で調整を施し、体部内面には指頭圧痕を残す。	
〃 - 6	L25-12	〃	17.3 (10.5) — —	体部上位に弱い屈曲部を持ち、頸部からやや外反して口縁部に至る。口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚する。	外面は刷毛調整のち頸部以上で撫で調整。内面は刷毛調整のち口唇部で撫で調整。体部上位と口縁部の外面に煤が付着する。	
〃 - 7		〃	21.6 (12.5) 22.6 —	頸部から緩かに外反して口縁部に至る。口縁端部は外傾する面をなす。	内外面に撫で調整。口縁部外面に撫で調整を施す。内面に指頭圧痕を残し、頸部に煤が付着する。	
〃 - 8		〃	13.0 (10.5) — —	頸部は緩かに外反して口縁部に至る。口縁端部は下方にやや肥厚し、外傾する面をなす。	外面は撫で調整を施し、指頭圧痕を残す。内面は刷毛調整のち撫で調整を施し、刷毛原体圧痕指頭圧痕を残す。	
〃 - 9	L25-14	〃	15.0 (9.5) — —	緩かに外反する頸部から口縁部は外上方に向う。口縁端部は下方に肥厚し、外傾する面をなす。	外面は頸部以下刷毛調整を施し、口縁部で指頭圧痕を残す。体部内面に指頭圧痕を残す。	
〃 - 10	K26-16	〃	15.4 (12.0) 19.0 —	頸部で「く」の字状に外反する。口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚する。口縁端部は外傾する面をなす。	体部外面は刷毛調整、頸部から口縁端部にかけて撫で調整を施す。体部中位外面に煤が付着する。	神西系
〃 - 11	L26-12	〃	15.4 (15.6) 15.6 —	頸部は緩かに外反して口縁部に至る。口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚する。口縁端部は外傾する面をなす。	体部外面に刷毛調整のち撫で調整を施し、指頭圧痕が残る。体部外面中位に煤が付着する。	
〃 - 12		〃	15.2 18.5 — 4.0	平坦な底部を持つ。頸部はやや外反して口縁部に至る。口唇部は外側にやや肥厚する。	内外面に刷毛調整を施し、指頭圧痕を残す。	
〃 - 13	L26-17	底部	— (6.0) — 6.0	平坦な底部を持つ。体部は底部端から直線的に外上方に立ち上がる。	内外面に粗い原体による刷毛調整を施す。	
〃 - 14		〃	— (9.6) — 5.8	平坦な底部を持つ。	内外面に指頭圧痕を残す。体部中位に煤が付着する。	
6 - 15	L26-4	〃	— (4.1) — 5.6	平坦な底部を持つ。	体部外面に刷毛調整を施し、端部に指頭圧痕を残す。内面は刷毛調整を施す。	
〃 - 16	L25-15	〃	— (2.9) — 5.8	平坦な底部を持つ。	体部端に指頭圧痕及び撻状工具による圧痕を残す。	
〃 - 17		堿	17.0 (5.5) — —	頸部から緩かに外反し口縁部に至る。口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚する。	内外面に刷毛調整を施し、口縁部に指頭圧痕を残す。	
〃 - 18	L25-14	〃	14.6 33.5 — 8.0	平坦な底部を持つ。頸部はやや外反し、口縁部で開く。口縁端部で下方にやや肥厚し外傾する面をなす。	外面は刷毛調整を施し、口縁部に指頭圧痕が残る。内面に指頭による撫で調整を施す。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
6-19	L.25-20	壺	24.4 (4.6) — —	頸部から大きく外反して口縁部に至る。口縁端部は粘土帯を貼付し上下に肥厚させ、外傾する面をなす。	口縁部外面は刷毛調整を施す。口縁端部の上面に刻み目、外面には刷毛目を施す。	
◇-20		甕	10.4 12.4 — 4.4	平坦な底部を持つ。口縁部は僅かに認められる頸部から外上方にやや外反する。	内外面に撫で調整を施し、指頭圧痕が残る。体部中位外面に煤が付着する。	
◇-21	L.26-4	鉢	11.6 (9.3) — —	体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	体部中位外面に煤が付着する。	神西系
◇-22	L.26-19	底部	— (7.3) — 5.1	平坦な底部を持つ。	内外面に刷毛調整を施す。体部下位内面に指頭圧痕を残す。体部中位外面と底部内面に煤が付着する。	
◇-23	◇	◇	— (8.6) — 4.7	平坦な底部を持つ。体部は底部端から直線的に外上方に立ち上がる。	粗い原体による刷毛調整を外面に施す。内面と体部中位外面に煤が付着する。	
◇-24	L.26-18	◇	— (9.5) — 6.0	平坦な底部を持つ。	外面は刷毛調整を施し、体部下位で鈍削りのち撫で調整を施す。内面は刷毛調整のち撫で調整を施す。内外面に煤が付着する。	
◇-25	L.24-10	甕	15.2 (12.2) — —	頸部はやや外反し、口縁部は直線的に外上方に向う。口縁端部は外側にやや肥厚し外傾する面をなす。	粗い原体による刷毛調整を内外面に施す。体部中位外面に煤が付着する。	
◇-26		◇	15.2 (10.0) 17.2 —	頸部から大きく外反して口縁部に至る。口縁端部は下方にやや肥厚し外傾する面をなす。	外面は刷毛調整のち撫で調整を施す。内面に指頭圧痕を残す。	
◇-27		◇	— (13.1) — 3.5	底部は狭小な平坦面をなす。	体部下位外面に指頭圧痕を残す。内面は鈍削り工具による撫で調整、指頭圧痕を残す。外面に赤変部、煤の付着をみる。	
◇-28		◇	14.0 21.3 4.8 4.0	中央部でやや窪む底部を持つ。頸部は緩かに外反し口縁部に至る。口縁端部で外側にやや肥厚する。	内外面に粗い刷毛調整のち口唇部に撫で調整を施す。体部中位以上の外面に煤が付着する。	
◇-29	L.25-10	◇	16.0 23.5 — 5.0	平坦な底部を持つ。頸部でやや外反し口縁部に至る。	内外面に刷毛調整を施す。体部上位と口縁部の外面に煤が付着する。	
◇-30	L.25-9	◇	16.6 20.8 15.3 —	底部は狭小な平坦面をなす。頸部は緩かに外反し口縁部に至る。口縁端部はやや下方に肥厚し、外傾する面をなす。	外面と口縁部内面に刷毛調整、口唇部には撫で調整を施す。体部内面に指頭圧痕を残す。体部中位以上の外面に赤変部と煤の付着をみる。	
7-31	L.26-17	◇	17.6 — 16.0 6.0	平坦な底部を持つ。頸部からやや外反して口縁部に至る。口縁端部は外傾する面をなす。	外面に粗い刷毛調整を施す。	
◇-32	◇	◇	19.4 (22.1) 17.1 —	頸部はやや外反し口縁部に至る。口縁端部は下方にやや肥厚し外傾する面をなす。	内外面に刷毛調整のち撫で調整を施す。体部上位以上の外面に煤が付着する。	
◇-33	L.26-18	◇	14.8 (18.0) 15.9 —	頸部は緩かに外反し口縁部に至る。口縁端部で下方に肥厚し外傾する面をなす。	粗い原体による刷毛調整を内外面に施す。体部中位外面に煤が付着する。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
7 - 34		甕	15.0 (19.5) 19.0 —	頸部は直線的に真上に立ち上がり口縁部でやや外反する。	外面は口縁部で撫で調整を施し、体部に指頭圧痕が残る。口縁部と体部上位の外面に煤が付着する。	
ク - 35	L.26-18	ク	— (20.2) 16.6 6.2	平坦な底部を持つ。	内外面に刷毛調整を施し、内面には指頭圧痕が残る。体部外面に煤が付着する。	
ク - 36	L.26-19	甕	16.0 21.2 16.4 4.5	頸部から緩かに外反して口縁部に至る。口縁端部は外傾する面をなす。平坦な底部に直径5mmの穴を穿つ。	内外面に刷毛調整を施す。体部下位に煤が吸着する。	
ク - 37	ク	底部	— (7.4) — 5.8	平坦な底部を持つ。体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	内外面に刷毛調整を施し、内面に指頭圧痕を残す。外面は煤を吸着する。	
ク - 38	L.26-18	ク	— (11.5) — 6.0	平坦な底部を持つ。	内外面に刷毛調整のち撫で調整を施す。底部内面に指頭圧痕が残る。	
ク - 39	L.25-10	ク	— (12.7) — —	底部は狭小な半直面をなす。体部は底部端から内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	内外面に刷毛調整を施し、内面には指頭圧痕が残る。体部中位外面に赤変部や煤の付着がみられる。	
ク - 40	L.25-9	壺	— (6.7) — —	「く」の字状に曲る頸部。頸部外面に粘土帯を貼付する。	外面は体部で細い刷毛調整、口縁部で粗い刷毛調整を施す。粘土帯に斜格子の刻み目を施す。外傾接合の粘土帯(長さ17mm)を有し擬口縁を形成する。	
ク - 41	L.26-12	甕	15.4 (9.2) — —	頸部から緩かに外反し口縁部に至る。口縁端部は下方にやや肥厚しほぼ直立する面をなす。	粗い原体による刷毛調整を内外面に施す。体部内面に剝削り痕を残す。	
ク - 42	L.25-16	鉢	14.4 8.6 — 2.8	不明瞭な平底を持つ。底部端から内湾ぎみに外上方に立ち上がり、体部から直線的に口縁部に向う。口縁端部は丸くおさめる。	外面に叩き調整を施す。	
ク - 43	L.25-13	底部	— (13.7) — 8.0	平坦な底部を持つ。体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	内外面に刷毛調整を施す。体部下位外面に赤変部や煤の付着がみられる。	

第3節 古墳時代

1) 出土状況

古墳時代の祭祀に関わる遺物が集中して出土したのはⅧ層（青灰色粘質土）の上部であり、標高4.50 m付近である。古墳時代の土師器を中心としたものと、須恵器を中心としたものとに分けることができる。前者にはSF 20とSF 21が属し、後者にはSF 19が属する。

SF 19（第8図）

拡張調査区で検出した遺物群をSF 19とし、E33-17, 23グリッドを中心に出土した。須恵器の壺、坏、甗を中心とした祭祀と考えられる。遺物の出土状況は、個体として纏まっているものの、明確な祭祀跡を呈してはいない。南側で検出された祭祀の縁辺に当るものと考えられる。標高は概ね4.60 mであり、焼土や炭の集中部分は認められなかった。

SF 20（付図）

調査区の西部で出土した遺物で構成される。祭祀としての明確な土器の集中や焼土及び炭化物の集積はなかったが、L25-3・8グリッドで手捏ね土器、白玉、土製勾玉等の出土が見られ、一つの主体部がここに存在したものと考えられる。標高は4.00 mであり、出土遺物としては、土師器の甗・壺・甗・高坏・鉢、手捏ね土器の碗・鉢、土製勾玉、土玉、土製模造鏡、滑石裂白玉である。

SF 20の南側では8基の焼土跡が検出されており、円形又は不整形円形を呈する。規模は、直径30~80 cmであり、焼土の厚さは中央部分でも10 cmに達しない。検出面の標高は4.00 mであり、土師器の破片を含有するものがある。

SF 21（第9図）

調査区の東部で出土した土師器を中心とする祭祀跡である。出土遺物の多くは細片であり、出土の形態はL26-2・7グリッドを中心とし北東方向軸に顕著である。主体部と考えられるL26-2・7グリッド周辺からは、炭化した木の実が多量に出土している。標高は3.70 m前後であり、出土遺物は土師器の甗・壺・鉢・高坏、須恵器の坏・甗・甗、手捏ね土器の碗、滑石裂の白玉等である。

SF 21の西側L26-6グリッドの標高4.00 mからは、3 cm大の小石を直径50 cmの円形に敷き詰めた祭祀遺構や直径約50 cmの円形を呈する焼土跡を、須恵器の甗等の遺物と共に検出する。（藤方）

2) 出土遺物

SF 19 (第 10 図 1~22)

祭祀遺物 (1~4)

1~4 は滑石製白玉で径 5 mm, 厚 3 mm, 孔径 2 mm 程のものである。

須恵器 (5~12)

5, 6 は坏蓋で 5 の口径が 14.0 cm, 6 は 12.4 cm を各々測る。共に天井部は欠損する。6 は口縁がやや長く内湾気味である。7, 8 は坏身である。共にやや深いもので、8 のたちあがり高はやや高く、受け部は水平にのび、口唇部が内傾して段を有する。9 は高坏の脚部である。裾部は余り開かず、円孔の透しを有する。10 は甗で円孔部分は欠損する。体部にやや張りを持ち、口頸部は開く、11 は甗の口縁部破片である。口縁は外反気味で、端部が受口状を呈する。12 は壺である。口径 17.8 cm, 胴径 30.2 cm, 器高 29.0 cm の大型のものである。底部は丸底で体部が強く張り球胴型を呈する。口頸部には凸帯を 2 条巡らし、その間に波状文を施す。胴部外面には格子状の叩き、内面はナデである。

土師器 (13~22)

13~16 は土師器の高坏である。13 は坏部で底部には段を有する。14~16 は脚部で 14 は裾がやや立ち上がり、15, 16 は平坦である。16 の脚は短い柱状を呈する。17~21 は甗である。17, 20 は小型のもの、21 は口径 33.4 cm を測る大型のものである。17 は余り胴部に張りが見られず、20 は頸部がくびれないものの胴部は丸味を持つ。22 は甗である。単孔式のもので、底部は丸味を持ち、体部は直線的に開く。口縁は欠損する。

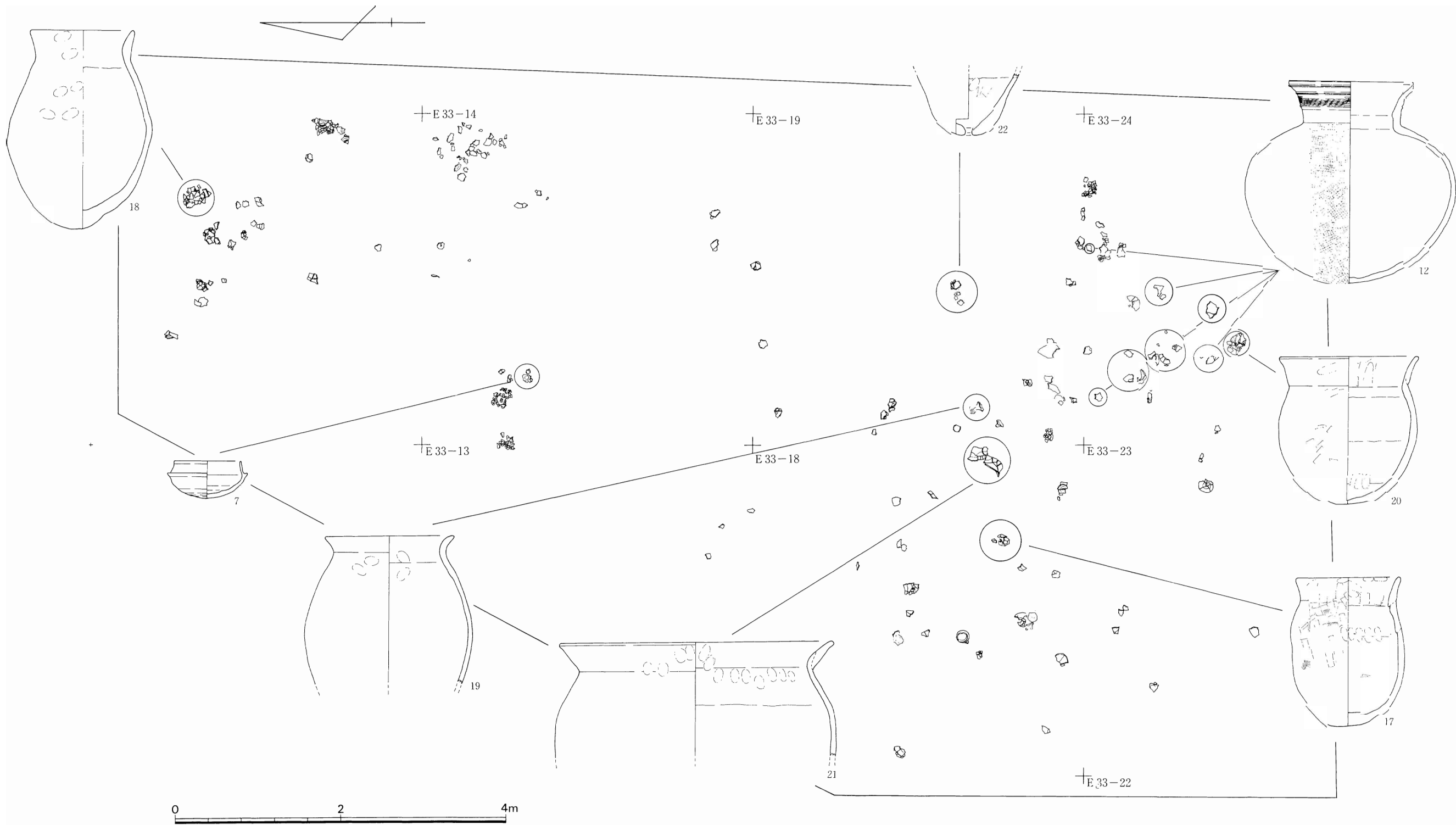
SF 20 (第 11, 12 図 1~72)

祭祀遺物 (1~44)

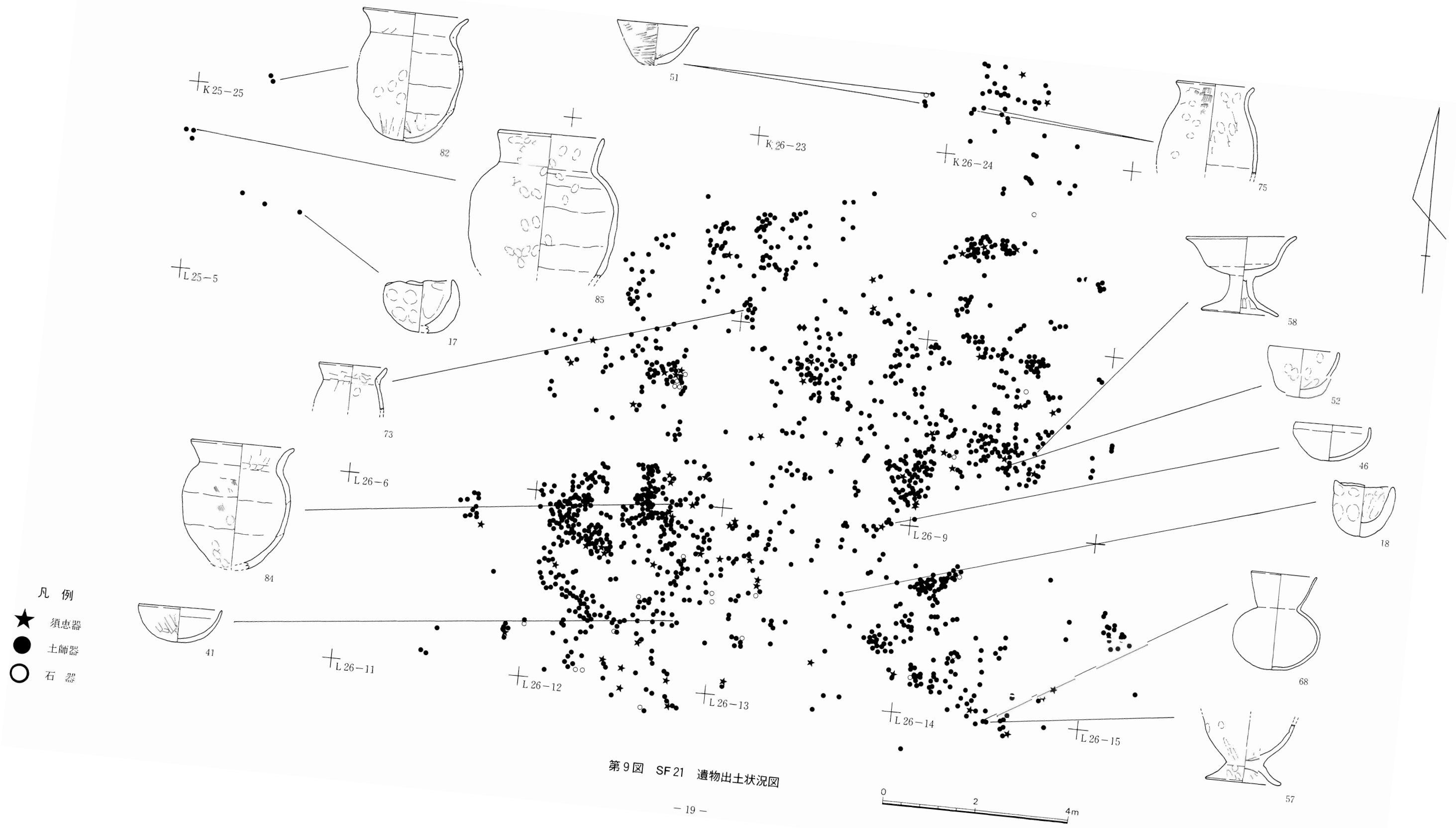
1~26 は滑石製白玉である。27~29 は土製勾玉で 28 はやや大型の分類に入り、尾は欠損する。29 は頭部が欠損するものの部分的に孔が残存している。30, 31 は土製模造鏡である。共にやや楕円形を呈し、鈕部分はやや高く孔を有する。32~37 は土製玉である。その中で 32 は小型のものである。38~44 は手捏ね土器である。38~40 はやや小型のもので、38 は I B 類、39, 40 は I C 類に含まれる。41~44 はやや大型のもので、41~43 は平底である。41 は II B 類、42 は II C 類、43 は IV B 類に含まれる。44 は壺型を呈する。

須恵器 (45~52)

45~48 は坏蓋である。45 は他のものに較べ天井部はやや低く、口縁は垂直に下りる。47, 48 は稜線が短かく凹線を有する。49~51 は坏身である。共に底部は丸味を持ち、49 は受部が水平にのび端部を丸く納め、たちあがりは内傾して外反気味に立ち上がっている。50, 51 のたちあがりは欠損する。52 は高坏で脚部は欠損する。体部に凹線を巡らせ、その上に 5 条 1 単



第8図 SF 19 遺物出土状況図



第9図 SF 21 遺物出土状況図

位の波状文を施す。

土師器 (53~70)

53~56は碗である。53, 54は丸底気味のもので、55, 56は平底気味のものだが、55は深く、56は浅くやや小型のものである。57~59は脚付碗である。57の脚は短かく、58, 59は脚部が長くのびる。60, 61は高坏の脚部である。60の裾部は立ち上がり、61は平坦で脚はやや柱状を呈している。62~65は壺である。62は小型の胴部が強く張るもので、頸部がくびれ、口縁が直立する。65は口径14.8cmを測る大型のもので胴部が強く張り、口縁が内湾気味に直立する。66~69は甕である。69は胴部が張るもので、他はⅡ類に含まれる。70は甌のつば部分と考えられる。

石器 (71, 72)

71, 72は叩き石と擦石で共に赤色顔料が付着する。

SF 21 (第13~16図1~90)

祭祀遺物 (1~22)

1~11は滑石製白玉である。12は長さ2.1cm、最大径0.6cmの小型の土製品であるが、使用用途等は不明である。形状はやや土製錘に似るものの、孔は有しない。13, 14は土製玉でややいびつである。15は管状の土製錘である。16~22は手捏ね土器である。16~19はやや小型のもので、20~22は体部に丸味を持ち、口縁部がややくびれる。22はやや大型のものである。

須恵器 (23~38)

23~26は坏蓋である。23, 24は天井部はやや低く、26は天井部に丸味を持ち、稜は凹線により作り出されている。27~33は坏身である。29の口径は12.0cm、30は11.6cmを測り、他のものは10cm強のものである。共に底部は丸底で回転ヘラケズリを行い、受け部を有し、たちあがりは外反気味に立ち上がる。34は高坏である。脚部は欠損する。坏体部に凹線を巡らし、6~7条1単位の波状文を施している。35, 36は甌である。35は体部及び口頸部にも波状文を施している。36は甌の口頸部と考えられ、頸部及び口縁に波状文を施している。37, 38は甕の口縁部破片である。37は口唇部外面に凹帯を巡らし、口頸部に凸帯1条を巡らせ、その下に波状文を施す。38は凸帯2条を巡らし、口縁はラッパ状に開く。

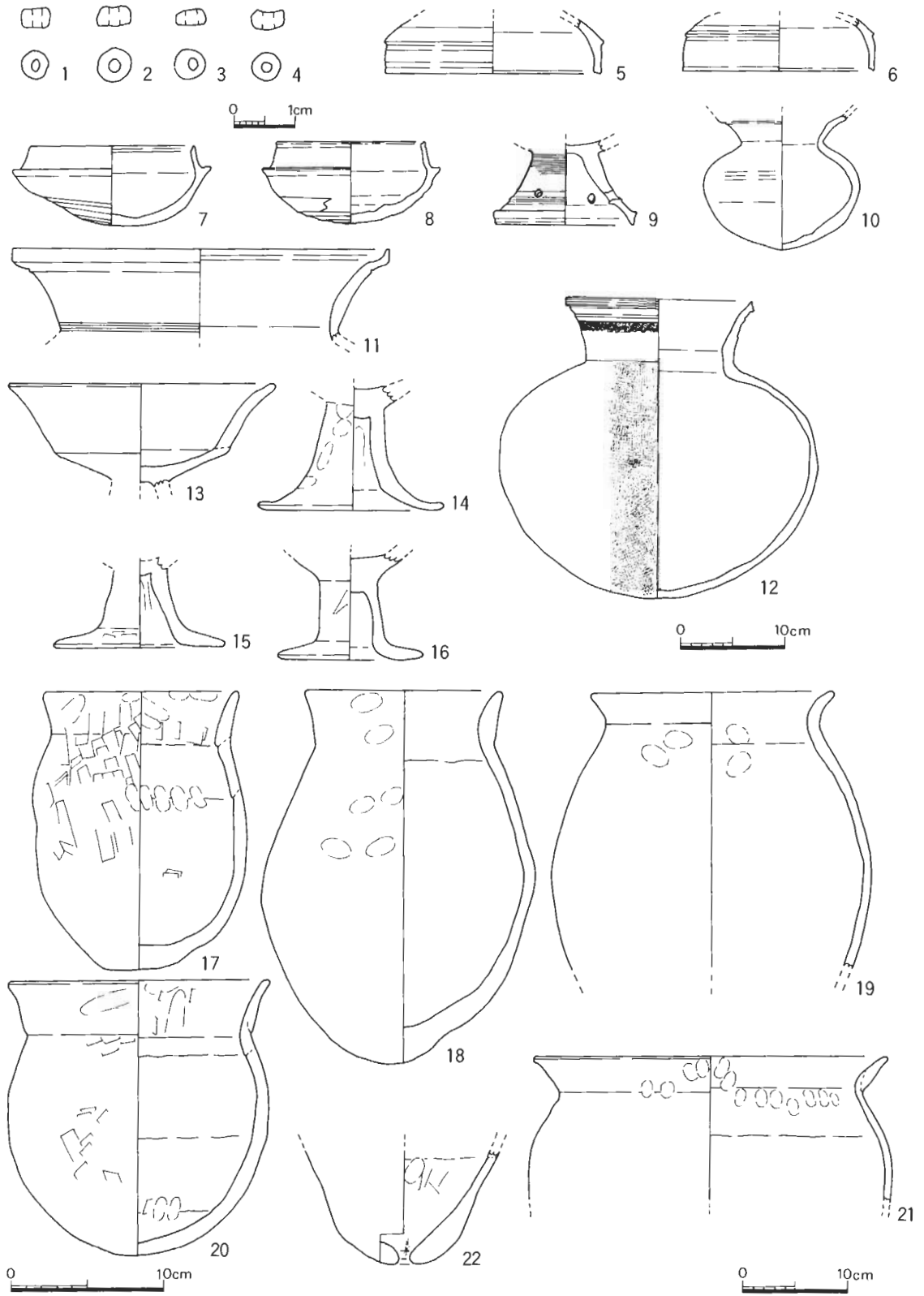
土師器 (39~88)

39~50は碗である。39~42はⅡA1類に含まれ、底部が丸底で体部は丸味を持ち、口縁が直立気味に立ち上がるものである。43~46はⅡA2類で口縁が僅かに内湾するものである。47は口縁端部が僅かに外反する。48, 49は底部がやや尖り気味である。50は口径16.0cmを測り、やや大型で底部は平底である。51~54は鉢である。51は外面にタタキ目がみられる。他のものは主に指頭による整形である。器形は51, 53は体部が開くもので、52, 54はやや開くものである。55~57は脚付碗である。55は脚部を欠損し、体部は直線的に開く。56, 57は

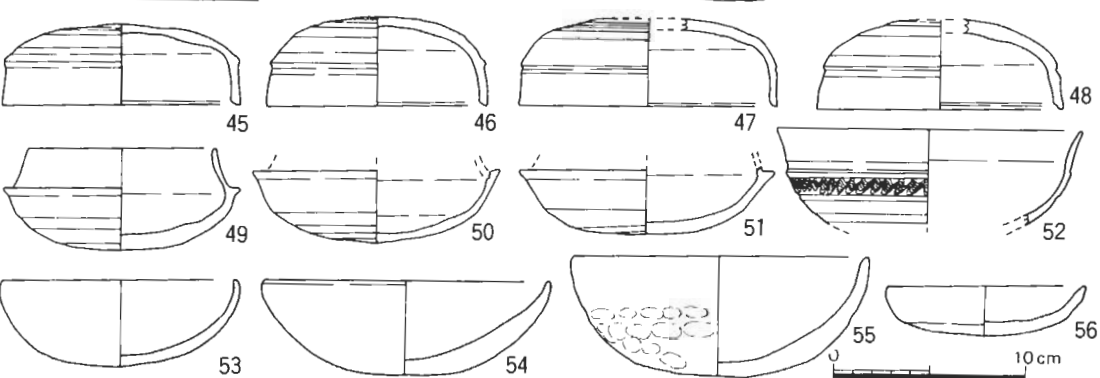
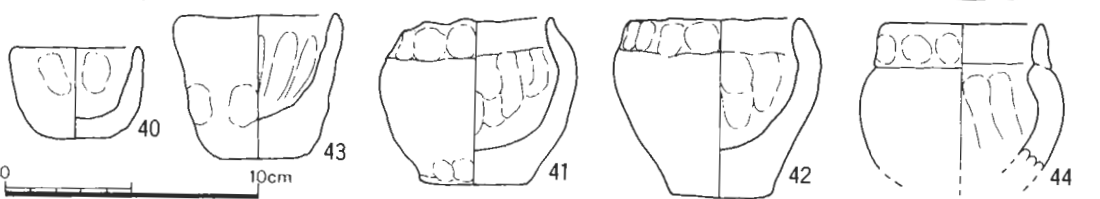
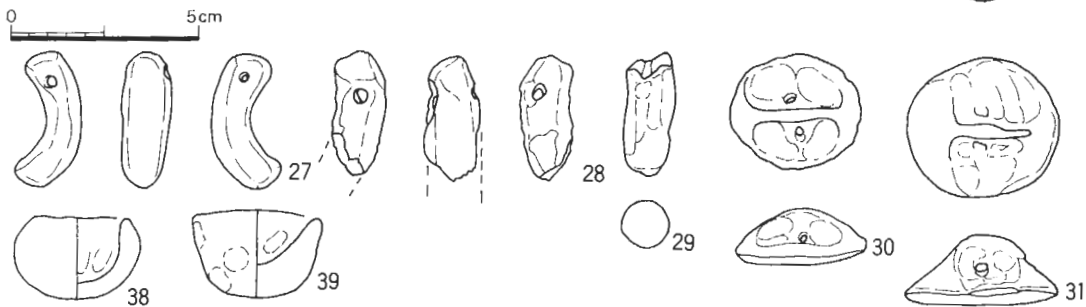
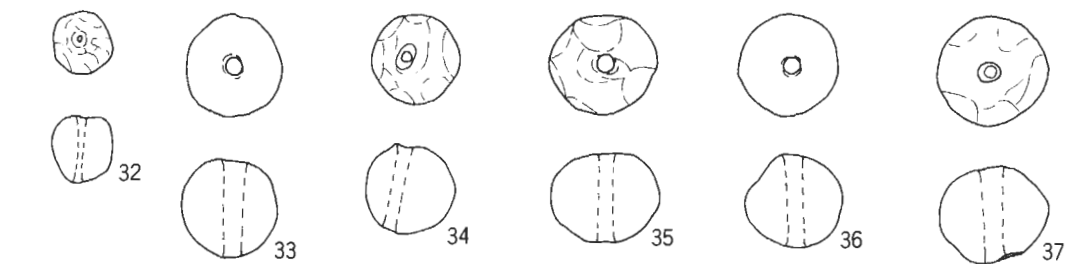
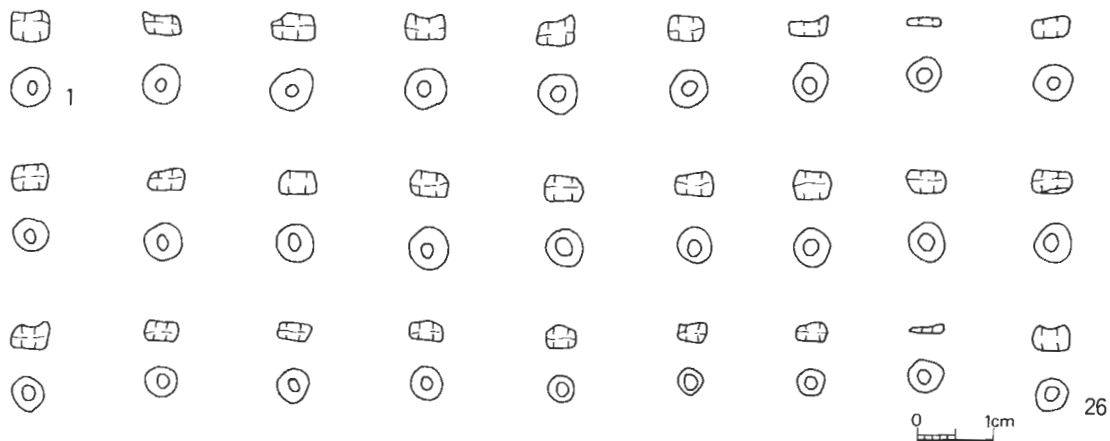
口縁部を欠損する。56の脚部は短かく、57は長く開くものである。58～66は高坏である。58は脚部裾は立ち上がり、坏底部に段を有し、坏部と脚部の接合は玉状の粘土塊による。59～63は坏部で脚部は欠損する。59、60は坏底部に段を有し、61～63は稜となるものである。65、66は脚部である。共に裾は立ち上がるものの、65の脚は短かい。67～71は壺である。67は器高9.6cmの小型のもので、体部が張り口縁がやや開き気味に立ち上がる。69は器高26.6cmを測るやや大型のもので、体部は張り、口縁が内湾気味に直立する。70は口縁が僅かに開いて直立する。71はやや大型のもので口縁はやや長く外傾する。72～87は甕である。72、73、80は小型のものである。72、73は体部に丸味を持たず、口縁が「く」字状に外傾する。74は小さな平底の底部より体部は余り丸味を持たず、頸部もくびれずに口縁はやや長く緩やかに外傾する。外面の整形は平行タタキ→ハケ、内面整形はハケ→ナデである。75は小型甕に含まれるものの、やや大きいもので、体部は丸味を持たず頸部もくびれずに口縁は僅かに外傾する。外面にハケ目がみられる。77～79は体部がやや張るもので整形は主に指頭とナデである。80は器高14.8cmの小型のもので体部はやや張る。82、83は共に体部が強く張るもので、83は頸部が強くくびれる。85は口縁がやや長く直立するものである。88は甗で口縁部が欠損する。丸底の単孔式のもので、体部はやや丸味を持ち、直線的に僅かに開く。

石器 (89, 90)

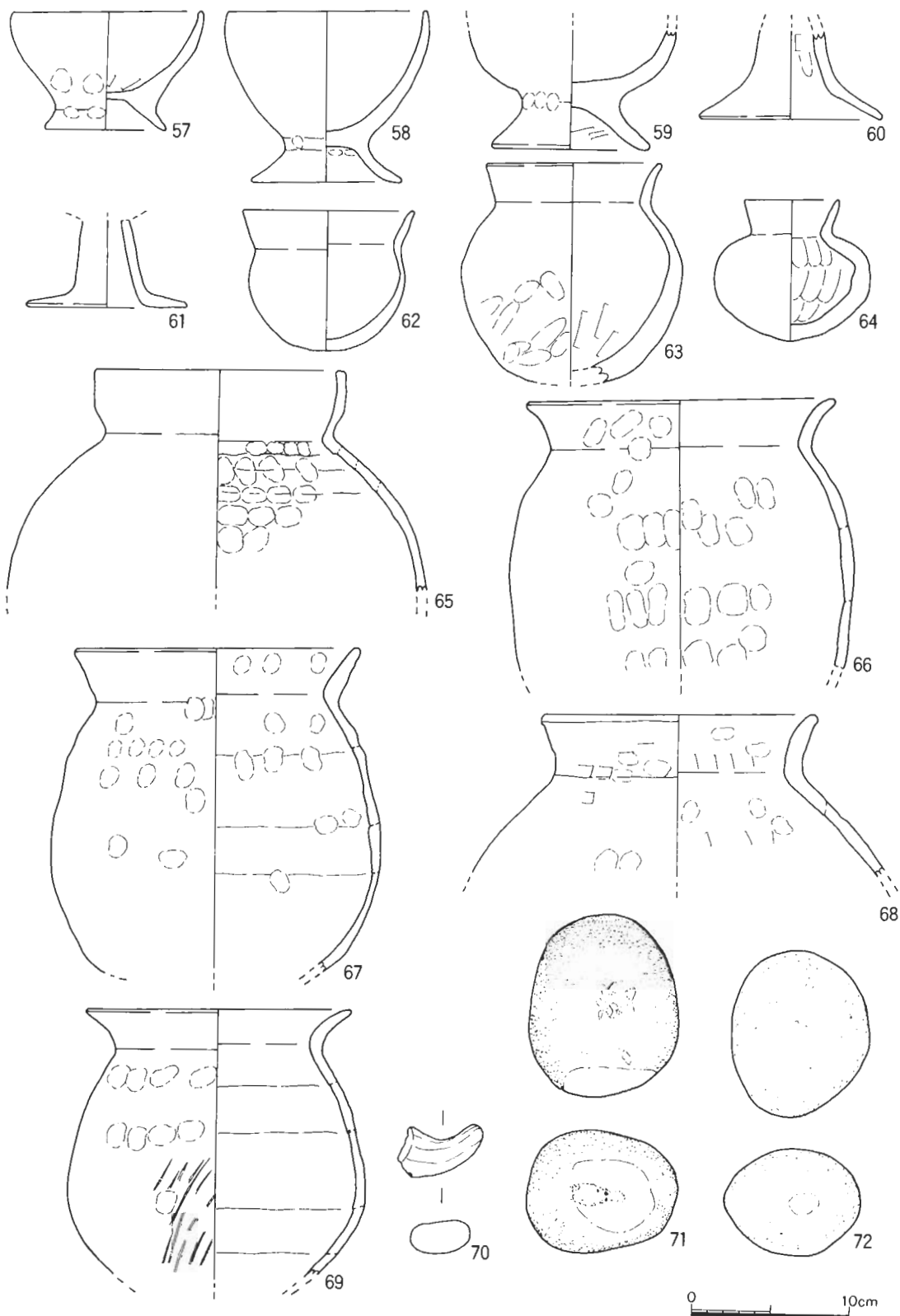
89は叩き石で表裏面共に中央部に敲打痕がみられ、端部に赤色顔料が付着する。90も赤色顔料が付着するものの、敲打痕は顕著に認められない。(前田)



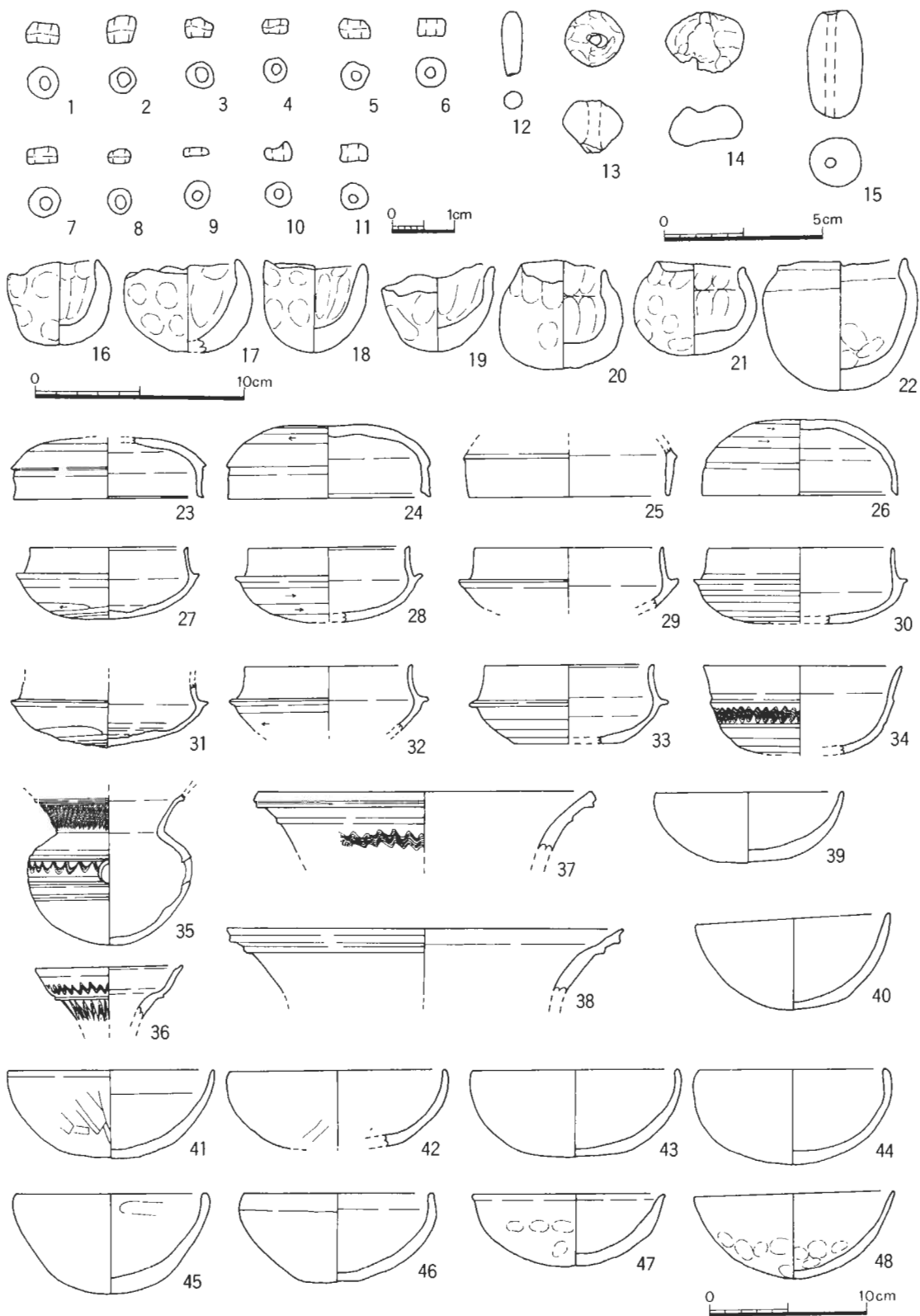
第10图 SF19 出土遺物実測図



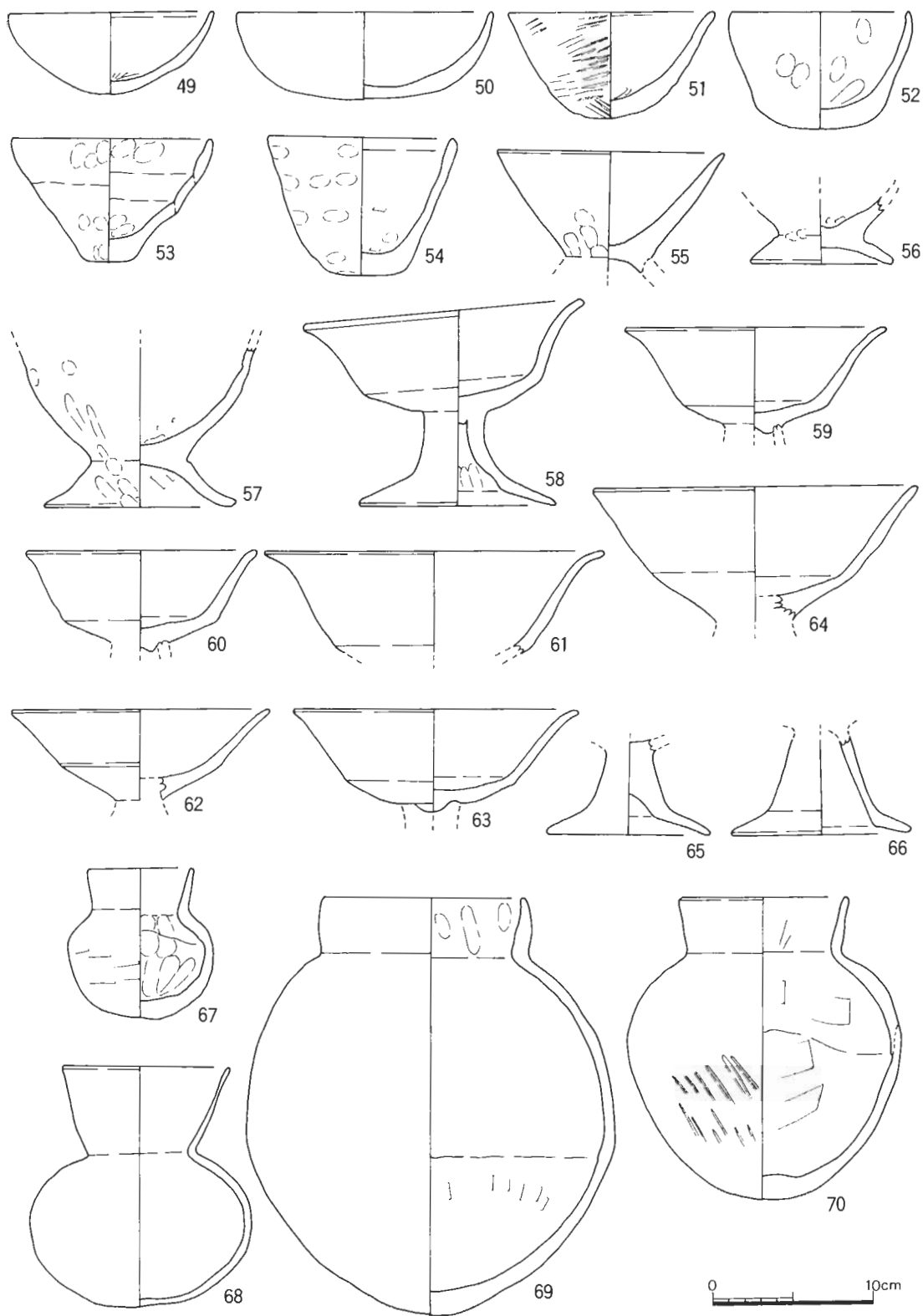
第11図 SF 20 出土遺物実測図(1)



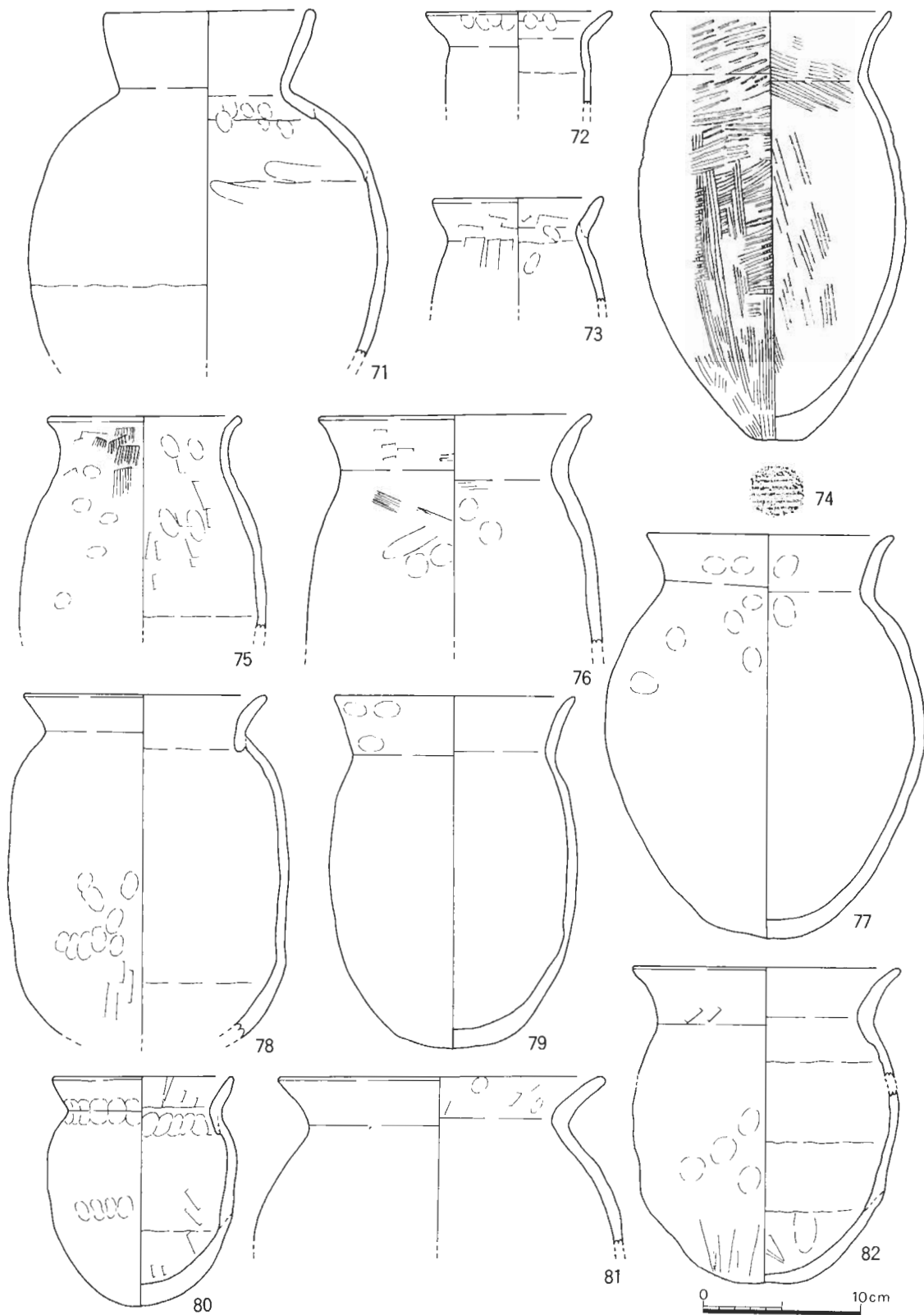
第 12 図 SF 20 出土遺物実測図(2)



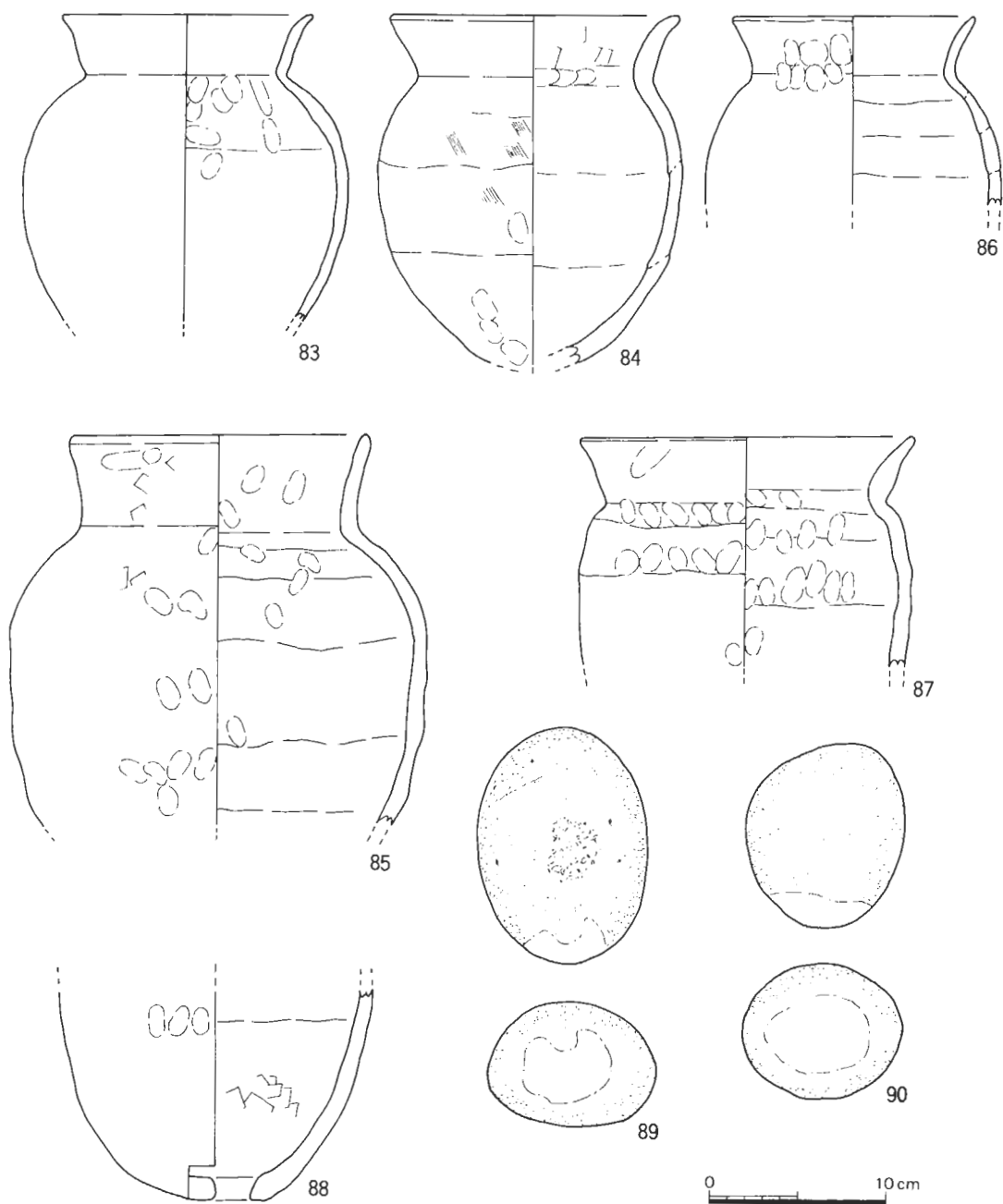
第13图 SF 21 出土遺物実測図(1)



第14図 SF21 出土遺物実測図(2)



第15图 SF21 出土遺物実測図(3)



第16図 SF 21 出土遺物実測図(4)

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
10-5	SF 19	須恵器 坏蓋	14.0 (3.5) 口径 14.2 — 径	天井部分は大部分が欠損するものの、残存部は丸味を持ち縁は断面三角形を呈し、口縁部は直線的に下り、口唇部は内傾し、平坦である。	天井 2/3 程は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は白色鉱物粒を微量含み緻密である。	
〃-6	〃	〃	12.4 (3.3) 口径 — 径	天井部は大部分が欠損する。残存部はやや丸味を持つ。口縁部は僅かに内湾し、端部が僅かに外反する。口唇部は段を有し、内傾する。	天井部は 3/4 程が回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は微白色鉱物粒を微量含み緻密である。	
〃-7	〃	須恵器 坏身	10.8 5.2 たちあがり高 1.5 受部径 13.0	やや深く丸味のある底部より、受部は水平にのび、たちあがりは内傾し、やや反る。端部は直線的に立ち上がり、口唇部は内傾して、段を有する。	底部は 1/2 程回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は 2-3mm の白色鉱物粒を微量含み、緻密である。	
〃-8	〃	〃	9.7 5.3 たちあがり高 — 受部径 11.6	深く丸味のある底部より、受部は水平にのび断面三角形を呈し、たちあがりは内傾し、やや反る。口唇部は内傾して、段を有する。	底部は 1/3 程回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は微白色鉱物粒を少量含み、緻密である。	
〃-9	〃	須恵器 高坏	— (5.3) — 9.0	脚部のみ残存する。裾部は余り開かず、脚部に円孔のスカンを有する。	脚部カキ目及び回転ナデ、坏部内面はナデである。胎土は微白色鉱物粒を多量に含む。	
〃-10	〃	須恵器 坏	— (8.7) 10.2 —	丸底の底部より、体部はやや張りを持ち、頸部がくびれ、口頸部は開く。体部の円孔部分は欠損する。	全体に厚い自然釉がかかり、整形等は判然としない。体部に僅かに円線がみられるが他は不明である。胎土は混入物はみられず緻密である。	
〃-11	〃	須恵器 甕	24.6 (5.9) — —	口縁部のみ残存する。口縁部は外反気味に開き、端部は直立し、受口状を呈する。	外面に回転カキ目、他は回転ナデである。胎土は微砂粒を微量含み、焼成は余り良くない。	
〃-12	〃	須恵器 壺	17.8 29.0 30.2 —	丸底の底部より、体部は球胴型を呈し、最大径は胴部中に有する。口頸部上位には 2 条凸帯を巡らせ、間に 1 条 10 本単位の波状文を施す。口唇部は外に拡張し、1 条の凹帯を巡す。	胴部全面に格子状叩きを施した後、上位は回転カキ目を施す。内面はナデである。胎土は砂粒を微量含む。	
〃-13	〃	土師器 高坏	17.2 (6.7) — —	脚部は欠損する。坏部は体部と底部の境に段を有し、口縁は外反気味に開く。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	I 類
〃-14	〃	〃	— (8.0) — 12.1	坏部は欠損する。裾部は開き立ち上がる。	整形は指頭、ナデである。胎土はやや精良で砂粒を少量含む。	A 類
〃-15	〃	〃	— (5.8) — 11.2	坏部は欠損する。裾部は平坦である。	整形はナデでヘラケズリが僅かにみられる。胎土はやや粗く砂粒を多量に含む。	C 類
〃-16	〃	〃	— (6.8) — 9.5	坏部は欠損する。脚部は柱状を呈し、裾は平坦である。	整形はナデで僅かにヘラケズリがみられる。胎土は粗く砂粒を少量含む。	〃
〃-17	〃	土師器 小型甕	12.6 18.0 — 3.8	小さな平底より、体部はやや丸味を持ち、頸部はくびれず、口縁は直立気味である。	整形は内外面共にヘラケズリ、指頭、ナデで僅かにハケがみられる。胎土はやや粗く砂粒を少量含む。	I C 1 類
〃-18	〃	土師器 甕	12.8 24.5 — —	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、頸部はくびれず、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面がナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	II A 1 類
〃-19	〃	〃	15.8 (18.0) — —	底部は欠損する。体部はやや丸味を持ち、頸部は余りくびれず、口縁は緩やかに内傾する。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
10-20	SF 19	土師器 小型壺	16.8 18.0 17.0 —	丸底の底部より、体部は強く丸味を持ち、頸部はくびれず、口縁は緩かに外傾する。	整形は内外面共にヘラケズリ、指頭、ナデである。胎土はやや粗く砂粒を少量含む。	ⅡA1類
〃-21	〃	土師器 大壺	33.4 (13.9) — —	胴部中位以下は欠損する。体部はやや丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	
〃-22	〃	土師器 甌	— (7.5) — —	底部のみ残存する。單孔式で、底部は丸味を持ち、体部は直線的に外傾する。	整形は外面がナデ、内面がヘラケズリ、指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
11-30	SF 20	土製模造鏡	全長 4.6 全幅 3.1 全厚 2.2	楕円形を呈し、鈕は小さな孔を有する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	ⅠB類
〃-31	〃	〃	全長 5.6 全幅 6.0 全厚 2.8	やや楕円形を呈し、やや高い鈕は孔を有する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	〃
〃-38	〃	手捏ね土器	3.7 3.2 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、内湾気味である。	整形は外面がナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	ⅠB類
〃-39	〃	〃	5.0 3.5 — —	平底気味の底部より、体部は丸味を持たず、外傾気味に立ち上がる。	整形はやや粗く、内外面共に指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	ⅠC類
〃-40	〃	〃	5.0 3.6 — —	平底気味の底部より、体部は僅かに丸味を持ち、外傾気味に開く。	整形はやや粗く、内外面共に指頭、ナデである。胎土はきめ細かいものの、砂粒を多量に含む。	〃
〃-41	〃	〃	5.8 6.7 — 4.4	平底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部がくびれる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土は粗く、砂粒を多く含む。	ⅡB類
〃-42	〃	〃	6.6 7.1 — 4.0	平底の底部より、体部は開き気味に丸味を持ち、口縁端部が僅かにくびれる。	整形は外面口縁が指頭、他がナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土は精良である。	ⅡC類
〃-43	〃	〃	6.2 5.8 — 3.0	平底の底部より、体部は丸味を持たず、外傾気味に直立する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	ⅣB類
〃-44	〃	〃	6.2 (5.8) — —	底部は欠損する。体部は丸味を持ち、頸部がくびれ、口縁は直立する。壺型を呈する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	
〃-45	〃	須恵器 坏器	12.6 4.3 12.4 —	天井部はやや丸味を持ち、縁は短かい。口縁はほぼ垂直に下り、口唇は内傾する。	天井部2/3程は回転ヘラケズリ、内面天井部はナデ、他は回転ナデである。胎土は微白色鈹物粒を微量含む。	
〃-46	〃	〃	11.6 4.7 11.4 —	天井部は丸味を持ち、縁は短かく、口縁部は垂直気味に下り、口唇部は僅かに段状をなし内傾する。	天井部は2/3程回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は白色鈹物粒を微量含む。	
〃-47	〃	〃	13.6 4.6 13.4 —	天井部は丸味を持ち、縁は短かく、稜線下は凹線を有する。口縁部は僅かに外反気味に下り、口唇部は段状に内傾する。	天井部1/2程は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は白色鈹物粒を微量含む。	
〃-48	〃	〃	12.8 4.7 12.2 —	天井部はやや丸味を持ち、縁は短かく、下に凹線が巡る。口縁部は僅かに外反気味に下り、口唇部は段状に内傾する。	天井部3/4程は回転ヘラケズリ、天井部は内面にはカキ目が僅かに残り、他は回転ナデである。胎土は砂粒を微量含む。	

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
11-49	SF 20	須忠器 坏身	10.0 3.4 受部径 12.6 たちあがり高 2.1	底部は丸味を持ち、受部は水平で端部は丸い。たちあがりは内傾し外反気味に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	底部は2/3程は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は白色鉱物粒を微量含む。	
〃-50	〃	〃	— (4.2) 受部径 13.0 たちあがり高 —	底部は丸底で、受部はやや上方向にのび端部は丸い。たちあがりは欠損する。	底部は1/2程回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は白色鉱物粒を微量含む。	
〃-51	〃	〃	— (3.6) 受部径 13.4 たちあがり高 —	底部は余り丸味を持たず、受部は水平にのび、端部は丸味を持つ。たちあがりは欠損する。	底部は1/2程が回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は砂粒を少量含む、造成は悪い。	
〃-52	〃	須忠器 高坏	16.0 (5.0) — —	脚部は欠損する。坏底部は丸味を持ち、体部に凹線を巡らし、その上に5条1単位の波状文を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり口唇部は尖る。	坏底部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は精良で砂粒を微量含む。	
〃-53	〃	上師器 碗	12.2 4.6 — 2.0	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	ⅡA1類
〃-54	〃	〃	15.0 5.0 — 4.0	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は緩やかに開いて立ち上がる。	整形は内外面共にナデで、僅かに指頭がみられる。胎土は精良である。	ⅡB1類
〃-55	〃	〃	15.2 6.4 — —	平底気味の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は緩やかに立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面がナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	〃
〃-56	〃	〃	10.4 2.8 — —	平底気味の底部で、体部は短かく、口縁は外傾気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、白色鉱物粒、破碎砂粒を多量に含む。	V類
12-57	〃	上師器 脚付碗	12.2 7.4 — 7.7	脚部は短かく「八」字状に開き、碗部体部は余り丸味を持たず、口縁がやや内湾気味である。	整形は内外面共にナデで、外面脚部接合部が指頭、碗部内面に僅かにヘラケズリがみられる。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	I A類
〃-58	〃	〃	12.8 11.0 — —	脚部は短かく「八」字状に開き、碗部は丸味を持ち、口縁はやや内湾気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデで、僅かに指頭がみられる。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	〃
〃-59	〃	〃	— (7.6) — 9.8	脚部は長く「八」字状に開き、碗部は丸味を持つ。口縁部は欠損する。	整形は脚部接合部が指頭で他はナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	A類
〃-60	〃	上師器 高坏	— (5.7) — 11.4	坏部は欠損する。脚部裾は立ち上がる。	整形は外面はナデ、脚部内面はヘラケズリ、ナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-61	〃	〃	— (5.5) — 10.4	坏部は欠損する。脚部裾は平坦に開き、脚部は柱状を呈する。	整形はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	C類
〃-62	〃	上師器 密	10.8 8.9 10.1 —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、頸部は余りくびれず、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	I類
〃-63	〃	〃	11.0 (13.9) 14.0 —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、頸部はややくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面がヘラケズリである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
12-64	SF 20	土師器 壺	6.0 9.0 — —	小型の壺で、丸底の底部より、体部が強く丸味を持ち、頸部がくびれ、口縁は直立気味に外傾する。	整形は外面がナデ、内面が強く指ナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	V類
〃-65	〃	〃	14.8 (14.0) — —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は内湾する。	整形は内面に指頭が多くみられ、他はナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	VI類
〃-66	〃	土師器 甕	19.4 (17.2) 21.8 —	胴部下位は欠損する。胴部は余り丸味を持たず、頸部は僅かにくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II B 1類
〃-67	〃	〃	18.0 (20.7) — —	胴部下位は欠損する。胴部はやや丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外傾する。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II B 2類
〃-68	〃	〃	17.0 (10.5) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部はやや丸味を持ち、頸部は余りくびれず、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共にヘラケズリ、指頭、ナデである。胎土はやや精良で、砂粒を少量含む。	II 1類
〃-69	〃	〃	16.8 (17.4) — —	胴部下位は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外反する。	整形は外面胴部にヘラナデか粗いハケ状の整形痕がみられ、他は指頭、ナデである。胎土は粗く、白色鉱物粒、砂粒を多量に含む。	III B 3類
〃-70	〃	土師器 甗	— — — —	つばの部分のみ残存する。上方に歪曲する。	胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	
〃-71	〃	叩石	全長 11.8 全幅 9.5 全厚 7.2 重量 1250g	自然の円礫で表裏面共中央部及び両端部に敲打痕を有する。側面には部分的に敲打及び擦痕が認められる。また一端部には赤色顔料の付着がみられる。		
〃-72	〃	擦石	全長 10.7 全幅 8.8 全厚 6.9 重量 885g	一端には赤色顔料が僅かに付着する。		
13-12	SF 21	土製不明品	全長 2.1 全幅 0.6 重量 7g	長さ2.1 cm、径6 mmの小さな土鏃状を呈するが、孔は穿たれていない。	胎土は精良である。	
〃-14	〃	土製玉	全長 2.0 全幅 2.5 重量 4.7g	いびつな形を呈し、孔は穿れていない。	胎土は精良である。	
〃-16	〃	手握ね土器	4.2 4.0 — —	やや丸底で体部は僅かに丸味を持ち、口縁は直立気味である。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	I B類
〃-17	〃	〃	5.5 4.1 — —	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は僅かに内湾気味である。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	I C類
〃-18	〃	〃	4.8 4.1 — —	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は直立する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-19	〃	〃	5.2 5.1 — —	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は開き気味に立つ。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	備 考
13 - 20	SF 21	手捏ね土器		4.0 5.1 —	丸底気味の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部がややくびれる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅵ類
〃 - 21	〃	〃		4.0 4.4 —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部が僅かにくびれる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土は精良で砂粒を微量含む。	〃
〃 - 22	〃	〃		6.0 6.2 7.4 —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁がくびれ短かく立ち上がる。短頸壺型を呈する。	整形は内外面共にナデ、内面に指頭が僅かにみられる。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	ⅥA類
〃 - 23	〃	須忠器 坏蓋		12.2 (3.9) 12.4 —	天井部は低く、稜はすどく外方向にのび、口縁は内湾気味に下り、端部は外反する。口唇部は段状に内傾する。	天井部は1/2程回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は白色鉱物粒を微量含む。	
〃 - 24	〃	〃		12.8 (4.6) 13.0 —	天井部はやや低く、やや丸味を持ち、稜はややすどく、口縁部は垂直して下り、口唇部は凹線を巡らし、内傾する。	天井部は1/2程回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は白色鉱物粒を微量含む。	
〃 - 25	〃	〃		12.8 (3.1) 13.6 —	天井部は欠損する。稜は余り尖らず短かく外方向にのび、口縁部は垂直に下る。口唇部は平坦である。	全面回転ナデである。胎土は白色鉱物粒を微量含む、焼成は悪い。	
〃 - 26	〃	〃		12.2 4.8 — —	天井部は高く丸味を持ち、稜は凹線により作出し、口縁部は僅かに内湾気味に下り、口唇部は内傾する。	天井部2/3程は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は白色鉱物粒を微量含む。	
〃 - 27	〃	須忠器 坏身		10.2 4.6 (3.1) 11.8	底部は丸味を持ち、やや深く、受部は僅かに上方にのび、端部は丸味を持つ。たちあがりは外反気味に内傾する。口唇部は段状に内傾する。	底部1/3程が回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は大粒の白色鉱物粒を少量含む。	
〃 - 28	〃	〃		10.4 4.7 1.9 12.0	底部は丸味を持ち深く、受部は上方にのび、端部は丸味を持つ。たちあがりは外反気味に内傾する。口唇部は内傾する。	底部5/4程は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は白色鉱物粒を少量含む。	
〃 - 29	〃	〃		12.0 (3.8) 2.1 14.0	底部は欠損する。受部はやや上方に立ち、端部は丸味を持ち、立ちあがりはやや内傾し、口唇部は丸くおさめる。	全面回転ナデである。胎土は微白色鉱物粒を微量含む。	
〃 - 30	〃	〃		11.6 4.8 2.0 13.6	底部は丸味を持ち、受部は水平に外方向にのび、端部は僅かに丸味を持つ。たちあがりは僅かに内傾気味に立ち上がり、口唇部は丸味を持つ。	底部2/3程は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は微白色鉱物粒を多量に含む。	
〃 - 31	〃	〃		— (4.3) 11.2 12.7	底部は丸底でやや浅い。受部は外方向にのび、やや端部は尖る。たちあがりは大部分が欠損する。	底部1/2程は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は微白色鉱物粒を多量に含む。	
〃 - 32	〃	〃		10.8 (4.2) 2.1 12.8	底部は欠損する。受部は長く外に水平にのび、端部は丸味を持つ。たちあがりは外反気味にやや内傾する。	底部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は白色鉱物粒を微量含む。	
〃 - 33	〃	〃		10.8 5.0 2.3 12.6	底部は平底で上部も丸味を持たない。受部はやや長く外にのび、端部は丸味を持つ、口縁部は外反気味にやや内傾する。口唇部は僅かに丸味を持ち、内傾する。	底部3/5程は回転ヘラケズリ、底部内面はナデ、他は回転ナデである。胎土は白色鉱物粒を少量含む。	
〃 - 34	〃	須忠器 高坏			脚部は欠損する。坏底部にやや丸味を持ち、体部に凹線を巡し、6～7条1単位の波状文を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、口唇部はやや丸く納める。	坏底部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。胎土は精良である。	法量

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 口径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
13-35	SF 21	須恵器 甕	— (9.6) 10.6 —	底部は丸底で体部上位に2条の微凸帯をもうけ、間に1条4本単位の波状文及び径1.5cmの孔を穿つ。口頸にも1条13-14単位の波状文を施し、その上に凸帯をもうける。口唇部等は欠損する。	底部外面は手持ちヘラケズリ、底部内面は指ナデ、他は回転ナデである。胎土は白色鉱物粒を少量含む、また自然釉が僅かにかかる。	
〃-36	〃	〃	9.2 (3.4) — —	口縁部のみ残存する。口頸部には波状文を施し、断面三角形の凸帯が巡り、口縁部にも1条5本単位の波状文を施す。口縁は外傾し、口唇部は受け口状を呈する。	整形は回転ナデである。胎土は白色鉱物粒を微量含む、内面には自然釉がかかる。	
〃-37	〃	須恵器 甕	21.0 (3.9) — —	口縁部のみ破片である。口唇部外面はやや引き出し凹帯を巡らす。口頸部上位には短い内帯を巡らし、その下に1条9本単位の波状文を施す。口縁はラップ状に開く。	整形は回転ナデである。胎土は砂粒を微量含む焼成は悪い。	
〃-38	〃	〃	25.2 (4.1) — —	口縁部のみ残存する。口縁部外面上位に内帯2条を巡らす。口縁はラップ状に開く。	整形は回転ナデである。胎土は微白色鉱物粒を少量含む。	
〃-39	〃	土師器 碗	11.8 4.5 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は緩やかに立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量含む。	Ⅱ A 1 類
〃-40	〃	〃	12.2 6.2 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁はやや開き気味に立ち、やや深めの碗である。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、大粒の砂粒、破砕礫を多量に含む。	
〃-41	〃	〃	13.2 5.6 — —	丸底の底部より、体部はやや深く丸味を持ち、口縁は直立気味である。	整形は外面に僅かにヘラケズリがみられ、他はナデである。胎土はやや精良で砂粒を少量含む。	Ⅱ A 1 類
〃-42	〃	〃	13.8 5.0 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共に落剥が著しく不明である。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-43	〃	〃	13.0 6.6 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁はやや内湾気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅱ A 2 類
〃-44	〃	〃	12.0 6.1 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は僅かに内湾する。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、破砕礫、砂粒を多量に含む。	〃
〃-45	〃	〃	12.2 6.5 — —	丸底の底部より、体部はやや深めで丸味を持ち、口縁は僅かに内湾する。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-46	〃	〃	11.8 5.8 — —	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は僅かに内湾気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅱ A 2 類
〃-47	〃	〃	12.2 4.6 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部が僅かに外反する。	整形は外面に指頭が僅かにみられ、他はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	Ⅱ A 3 類
〃-48	〃	〃	12.8 5.5 — —	底部がやや尖り気味で鉢型に近く体部はやや丸味を持ち、口縁は開く。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土は精良で、砂粒を少量含む。内面は赤色塗彩、外面は黒色塗彩を施す。共に2/3程残存する。	
14-49	〃	〃	12.8 5.1 — —	やや尖り気味の底部より、底部はやや丸味を持ち、口縁はやや開き気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや精良で砂粒を微量含む。	Ⅲ A 1 類

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
14 - 50	SF 21	土師器 碗	16.4 5.4 — —	平底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は緩やかに立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	IV C 1 類
〃 - 51	〃	土師器 鉢	12.6 6.6 — —	丸底の底部より、体部は外傾して開く。	整形は外面が平行タタキ、ナデ、内面がナデで僅かにヘラケズリがみられる。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	
〃 - 52	〃	〃	11.0 7.4 — —	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち開き、口縁は直立気味である。ややいびつな形である。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
〃 - 53	〃	〃	12.4 7.7 — 3.4	尖底気味の平底より、体部は直線的に外傾し、口縁はやや直立する。	整形は粗く、内外面共に指頭、ナデで輪積み痕を残す。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	
〃 - 54	〃	〃	11.6 8.6 — 4.8	平底の底部より、体部は直線的に外傾する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面がナデで僅かに指頭、ヘラケズリがみられる。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
〃 - 55	〃	土師器 脚付碗	14.2 (7.6) — —	脚部は欠損する。体部は丸味を持たず、直線的に開く。	整形は外面に僅かに指頭がみられ、他はナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	II 類
〃 - 56	〃	〃	8.7 (4.2) — —	碗部は欠損する。脚部裾は短かく「八」字状に開く。	整形は碗部にヘラケズリが僅かにみられ、脚部は指頭、ナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を少量含む。	A 類
〃 - 57	〃	〃	— (10.0) — 11.6	脚部裾は「八」字状に長く開き、碗部はやや丸味を持つ。口縁は欠損する。	整形は全体的に粗く、指ナデ、指頭、ヘラナデ、脚部裏面にヘラケズリを施す。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	B 類
〃 - 58	〃	土師器 高坏	17.9 12.3 — 12.2	脚部裾は立ち上がり大きく開く。坏部底部に段を有し、体部から口縁にかけて外反する。	整形は脚部内が強く指ナデする。他は丁寧なナデである。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を少量含む。	I A 類
〃 - 59	〃	〃	16.2 (6.6) — —	脚部は欠損する。坏底部に段を有し、体部から口縁は外反する。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	I 類
〃 - 60	〃	〃	14.4 (6.4) — —	脚部は欠損する。底部に段を有し、体部は直線的に外傾し、口縁が僅かに外反する。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃 - 61	〃	〃	21.1 (6.4) — —	脚部・坏部の底部は欠損する。坏部には稜を残し、体部から口縁は外反する。大型の高坏である。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや精良で、大粒の砂粒を少量含む。	II 類
〃 - 62	〃	〃	16.4 (5.7) — —	脚部は欠損する。底部に稜を有する。体部から口縁は緩やかに外反する。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや精良で、砂粒を少量含む。	〃
〃 - 63	〃	〃	17.7 (6.5) — —	脚部は欠損する。底部にやや稜を残し、体部から口縁は緩やかに外反する。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃 - 64	〃	〃	20.2 (8.4) — —	脚部は欠損する。体部は余り丸味を持たず、直線気味に開く。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を少量含む。	III 類
〃 - 65	〃	〃	— (6.0) — 10.2	坏部は欠損する。裾部は開き立ち上がる。	整形はナデである。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	A 類

棟号番号	遺構番号	器種	口径 器高 胸径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
14-66	SF 21	土師器 高坏	— (6.1) — 11.0	坏部は欠損する。胴部はやや平坦で僅かに立ち上がる。	整形はナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	B類
〃-67	〃	土師器 小型壺	6.8 9.6 9.2 —	丸底の底部より、胴部は膨みを持ち、口縁は直立する。	整形は外面がヘラケズリ、ナデ、内面が指頭、指ナデである。胎土はやや精良だが、大粒の砂粒を少量含む。	V類
〃-68	〃	土師器 壺	10.4 15.4 14.0 —	丸底の底部より、体部は強く丸味を持ち、口縁は長く開き気味に立ち上がる。	整形は内外面共に丁寧なナデである。胎土は精良で砂粒を微量含む。	III類
〃-69	〃	〃	12.5 26.6 23.0 —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部がくびれ、口縁は直立気味に立ち上がり、口縁端部がやや内湾する。	整形は外面がナデ、内面もナデで僅かにヘラケズリ、指頭がみられる。胎土はやや精良で砂粒を少量含む。	VI類
〃-70	〃	〃	10.2 19.2 17.1 —	丸底の底部より、胴部は丸味を持ち、肩部がやや張り、頸部がくびれ、口縁が直立する。	整形は外面下位がヘラナデ、他は粗いナデ、内面がヘラケズリ、ナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	IX類
15-71	〃	〃	13.3 (22.0) 23.1 —	胴部下位は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部がくびれ、口縁がやや外傾して立ち上がる。	整形は外面がやや粗いナデ、内面が指頭、指ナデ、ナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	〃
〃-72	〃	土師器 小型甕	11.8 (5.9) 9.3 —	胴部中位以下は欠損する。胴部は丸味を持たず、頸部はくびれずに口縁は外傾する。	整形は口縁内外面を指頭、他はナデである。胎土はやや粗く、白色鉱物粒、砂粒を少量含む。	
〃-73	〃	〃	10.8 (6.8) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部は丸味を持たず、頸部はくびれず、口縁は外傾する。	整形は外面はヘラケズリ、ナデ、内面が指頭、ヘラケズリ、ナデである。胎土はやや精良で砂粒を微量含む。	
〃-74	〃	土師器 甕	15.0 27.6 17.0 3.4	小さな平底から胴部は僅かに丸味を持ち、頸部は余りくびれず、口縁は緩やかに外傾する。	整形は外面が平行タタキの後にハケで、口縁はタタキのみである。内面はハケ及びナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
〃-75	〃	土師器 小型甕	12.2 (13.6) 16.0 —	胴部下位以下は欠損する。胴部は丸味を持たず、頸部はくびれず、口縁は僅かに外傾する。	整形は外面がハケ、ヘラケズリ、指頭、ナデである。内面はヘラケズリ、指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	I A 1類
〃-76	〃	土師器 甕	17.4 (14.2) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部は丸味を持たず、頸部はくびれず、口縁は僅かに外傾する。	整形は主としてナデで、ヘラケズリ、ハケ、指頭が僅かにみられる。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を少量含む。	I C 1類
〃-77	〃	〃	15.4 26.1 20.4 —	丸底の底部より、胴部は丸味を持ち、頸部は余りくびれず、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II A 1類
〃-78	〃	〃	15.5 (22.1) 18.0 —	底部は欠損する。胴部は丸味を持たず頸部はややくびれ、口縁は外傾する。	整形は外面がナデ、指頭で僅かにヘラケズリがみられる。内面はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	II B 2類
〃-79	〃	〃	15.0 22.8 15.8 —	丸底の底部より、胴部は僅かに丸味を持ち、頸部はくびれず口縁は直立気味に僅かに外傾する。	整形はナデで僅かに指頭がみられる。胎土は粗く、大粒の砂粒を少量含む。	II C 1類
〃-80	〃	土師器 小型甕	11.6 14.8 12.3 —	丸底の底部より、胴部は余り丸味を持たず、頸部は僅かにくびれ、口縁はやや外傾する。	整形は外面頸部、胴部に指頭がみられ、他はナデ、内面頸部が指頭、他はヘラケズリ、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	〃

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
14-81	SF 21	土師器 甕	20.6 (10.6) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	整形は内外面共にナデで、内面口縁に僅かに指頭、ヘラケズリがみられる。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	Ⅱ 2 類
〃-82	〃	〃	16.8 (10.4) 16.9 3.0	丸底の底部より、胴部は丸味を持ち、頸部はややくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共にナデで僅かにヘラケズリ、指頭がみられる。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅲ A 1 類
〃-83	〃	〃	14.3 (17.3) 18.6 —	胴部下位は欠損する。胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外傾する。	整形は外面がナデ、内面が指頭、ナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	Ⅲ A 2 類
〃-84	〃	〃	16.0 (19.8) 17.2 —	底部は欠損する。胴部は強く丸味を持ち、頸部は僅かにくびれ、口縁は外傾する。	整形は外面がナデでハケ、指頭が胴部に僅かにみられ、内面口縁がヘラケズリ、他はナデである。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を少量に含む。	
〃-85	〃	〃	16.8 (22.2) 23.8 —	胴部下位は欠損する。肩部が張り頸部はややくびれ、口縁が直立する。やや大型の甕である。	整形は粗く、内外面共にヘラケズリ、指頭、ナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を少量含む。	
〃-86	〃	〃	13.8 (10.7) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部はやや丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外傾する。	整形はナデで、外面口縁に僅かに指頭がみられる。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を少量含む。	
〃-87	〃	〃	18.8 (12.9) 19.0 —	胴部中位以下は欠損する。胴部は丸味を持たず、頸部はくびれ、口縁は外傾する。	整形は粗く、内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	
〃-88	〃	土師器 甌	— (12.0) — —	胴部中位から上は欠損する。単孔の甌で、底部は丸底で体部はやや丸味を持ち直線的に開いて立ち上がる。	整形は外面に指頭、内面にヘラケズリが僅かにみられ、他はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
〃-89	〃	叩石	全長 13.5 全幅 9.7 全厚 7.3 重量 1345g	表裏面中央部に敲打痕が僅かにみられ、一端部に赤色顔料が付着する。		
〃-90	〃	擦石	全長 10.5 全幅 9.2 全厚 7.9 重量 1030g	一端部に赤色顔料が付着する。		

第4節 中・近世

1) 検出遺構

中世の遺構検出面は第V層の上部である。遺構は調査区の北西部分で集中が顕著で、柱穴の多くに切り合いが見られる。確認された掘立柱建物は8棟であった。その他に屋敷墓とみられるSK2や掘立柱建物に伴う溝状遺構SD1が調査区中央部において、耕地灌漑用と考えられる溝状遺構SD2が調査区東部で北東から南西方向に検出された。遺構の残存状況は調査区の北部では比較的良好であったが、南部及び東部では遺構や包含層が中世以降の耕作等により削平を受けていた(第17図)。

SB1 (第18図)

調査区北西部に位置する。K24-25・L24-5グリッドを中心に検出された。規模は桁行4間7.20m、梁間2間3.60mであり、棟方向はN-46°-Eであった。SB1を構成する柱穴は直径25~50cmのほぼ円形であり、その多くは40cm程度の深さを持つ。埋土は黒褐色土である。それぞれの柱穴の傍に柱穴が存在する事から、1回以上の建て替えがあったものと考えられる。出土遺物は、土師器・瓦質土器の破片や砥石である。

SB2 (第18図)

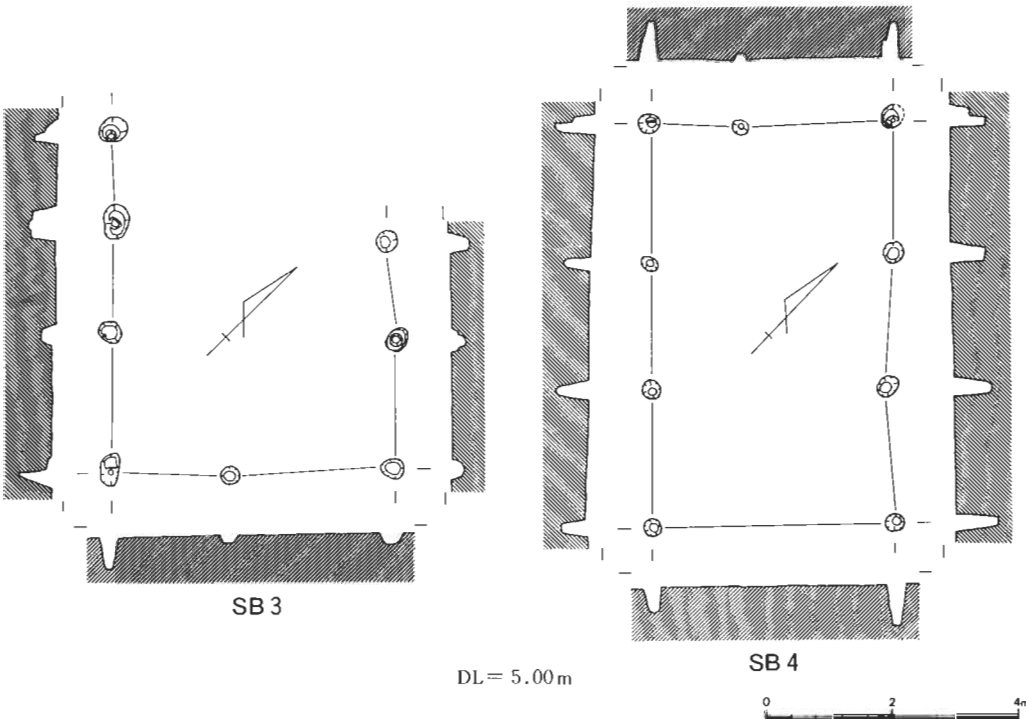
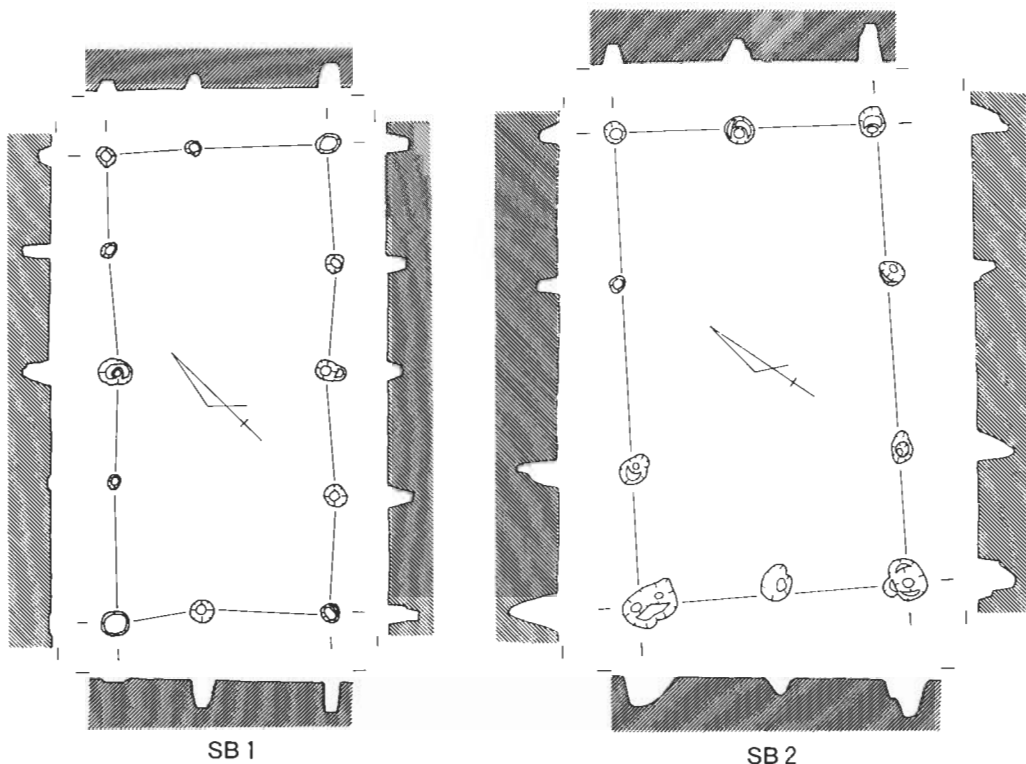
調査区北西部に位置する。K24-25・L24-5グリッドを中心に検出された。規模は桁行3間7.20m、梁間2間4.00mであり、棟方向はN-52°-Eであった。SB2を構成する柱穴は直径40cmのほぼ円形であり、30~60cmの深さを持つ。埋土は黒褐色土である。それぞれの柱穴に隣接して柱穴が存在する、特にP8、P10では各々3個、4個の柱穴が相接して切り合いが見られ、数回の建て替えが行われたものと考えられる。出土遺物は、土師器、瓦質土器の鍋等の破片がみられた。

SB3 (第18図)

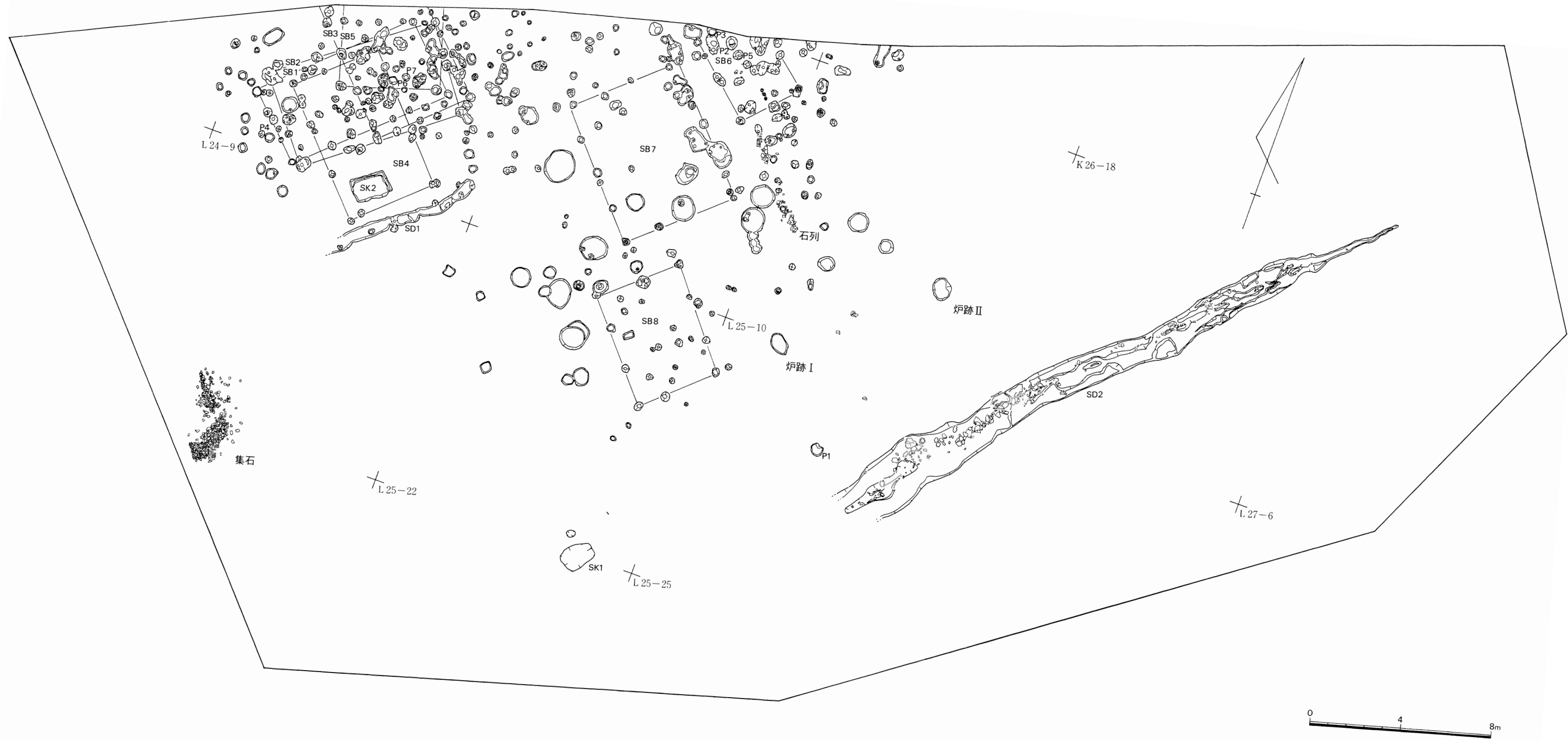
調査区北西部に位置する。K24-25・K25-21グリッドを中心に検出された。規模は調査区北壁によって遮られて全体を確認するには至らなかったが、桁行3間5.20m、梁間2間4.40mであり、棟方向はN-43°-Wであった。SB3を構成する柱穴は直径30cmのほぼ円形であり、その多くは40cm程度の深さを持つ。埋土は黒褐色土である。建て替え等の痕跡は認められなかった。出土遺物は土師器杯や瓦質土器の破片である。

SB4 (第18図)

調査区北西部に位置する。L24-5・L25-1グリッドを中心に検出された。規模は桁行3間6.40m、梁間2間4.00mであり、棟方向はN-42°-Wであった。SB4を構成する柱穴は直径30cmのほぼ円形であり、40~60cmの深さを持つ。埋土は暗褐色土である。P1、P2、P3、P4、P7のそれぞれで隣接する柱穴を持ち、1回以上の建て替えがあったものと考えら



第18図 SB1～4 実測図



第17図 中・近世遺構全体配置図

れる。出土遺物は、鎬蓮弁紋を持つ青磁碗、土師器の皿や鍋、瓦質土器の破片、土錘などである。

SB 5 (第 19 図)

調査区北西部に位置する。K 24-25 グリッドを中心に検出された。SB 5 の規模は棟方向を N-16°-W とすると、桁行 2 間 3.20 m、梁間 3 間 4.00 m である。SB 5 を構成する柱穴は直径 25~40 cm のほぼ円形であり、その多くは 40 cm 程度の深さを持つ。埋土は黒褐色土である。P 2、P 3、P 5、P 6 において隣接する柱穴の存在を確認する。出土遺物は鎬蓮弁紋を持つ青磁碗、土師器の杯、瓦質土器の破片である。

SB 6 (第 19 図)

調査区東側の北壁際に位置する。K 25-19 グリッドを中心に検出された。SB 6 の規模は棟方向を N-47°-W とすると、桁間 2 間 4.00 m、梁間 2 間 2.80 m である。SB 6 を構成する柱穴は直径 30 cm のほぼ円形であり、深さ 30~50 cm である。埋土は黒褐色土である。明らかな建て替えの痕跡は認められないが、P 5 には隣接する柱穴が存在する。出土遺物は青磁、土師器の鍋、瓦質土器の鍋の破片や砥石がある。

SB 7 (第 19 図)

調査区中央の北部に位置する。K 25-23 グリッドを中心に検出された。規模は桁行 4 間 6.40 m、梁間 3 間 5.20 m であり、棟方向は N-42°-W である。SB 7 を構成する柱穴は直径 25~40 cm であり、深さは 15~40 cm である。埋土は暗褐色土である。出土遺物は東幡系須恵器の片口、土師器の鍋や杯、瓦質土器である。

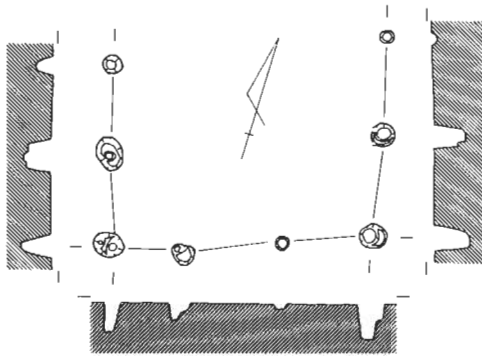
SB 8 (第 19 図)

調査区中央部に位置する。L 25-9 グリッドを中心に検出された。規模は桁行 3 間 5.00 m、梁間 2 間 3.60 m であり、棟方向は N-40°-W である。SB 8 を構成する柱穴は直径 30~50 cm であり、深さ 10~40 cm である。埋土は黒褐色土である。SB 8 の北側に梁の柱穴に対応する様柱穴が存在する事から建て替えの可能性も考えられる。出土遺物は、土師器の鍋、瓦質土器の破片である。

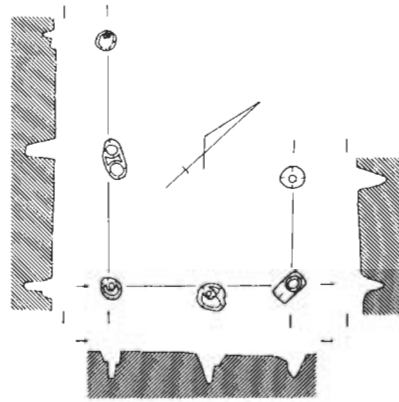
調査区の北西部には全柱穴の約 3 分の 2 が集中し、柱穴の切り合いが多くみられる。同時期に数棟の住居が存在したにせよ、比較的長期に亘ってこの位置を占めていたものと思われる。掘立柱建物の棟方向においては、N-50°-E と N-42°-W とに大きく分ける事ができる。柱穴の切り合いを観察すると前者の方がやや古いものと思われる。

SD 1 (第 17 図)

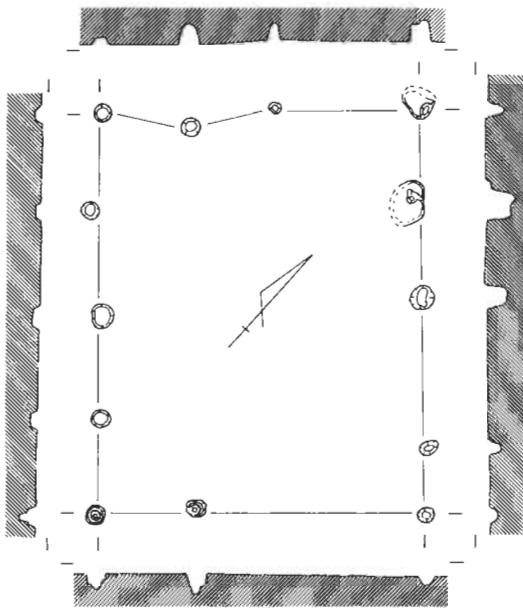
調査区の北西部、今回検出した柱穴群の南端に位置する。住居を区画する溝か、北側に隣接する土墳墓と関係あるものと考えられる。L 25-1、L 25-6 グリッドを中心に検出された。北東から南西に流れる溝である。規模は幅が約 40 cm であり、深さは中央部分で約 10 cm であ



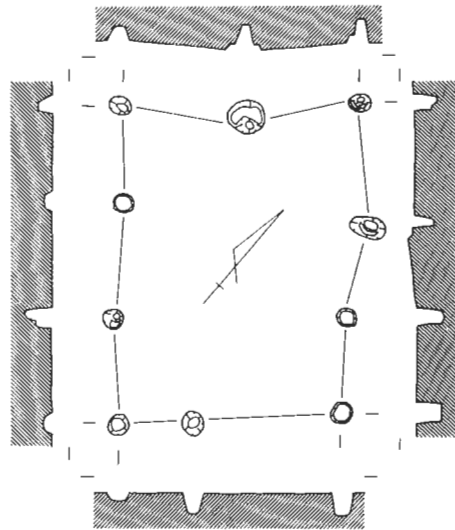
SB 5



SB 6



SB 7

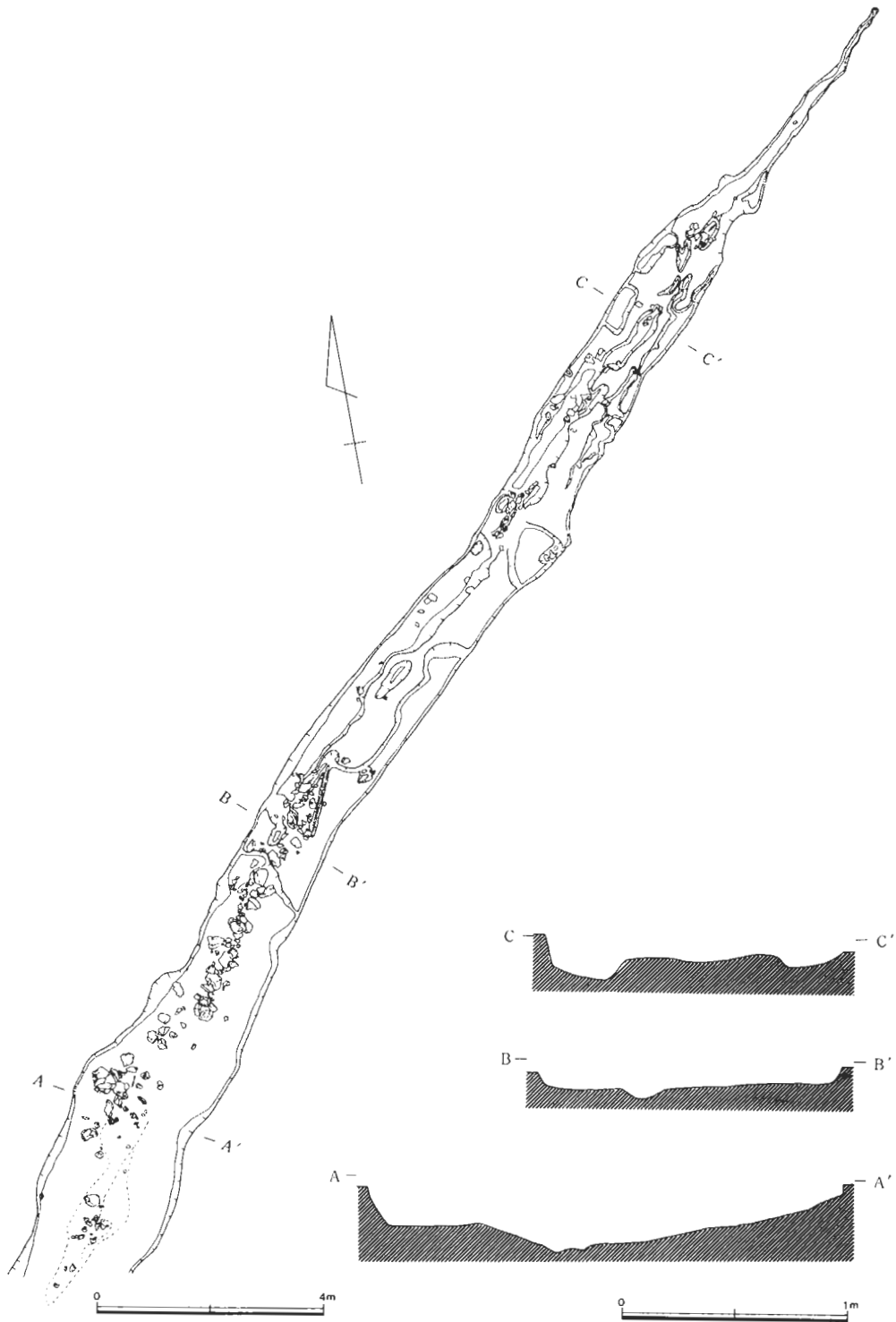


SB 8

0 2 4m

DL = 5.00 m

第 19 图 SB 5 ~ 8 实测图

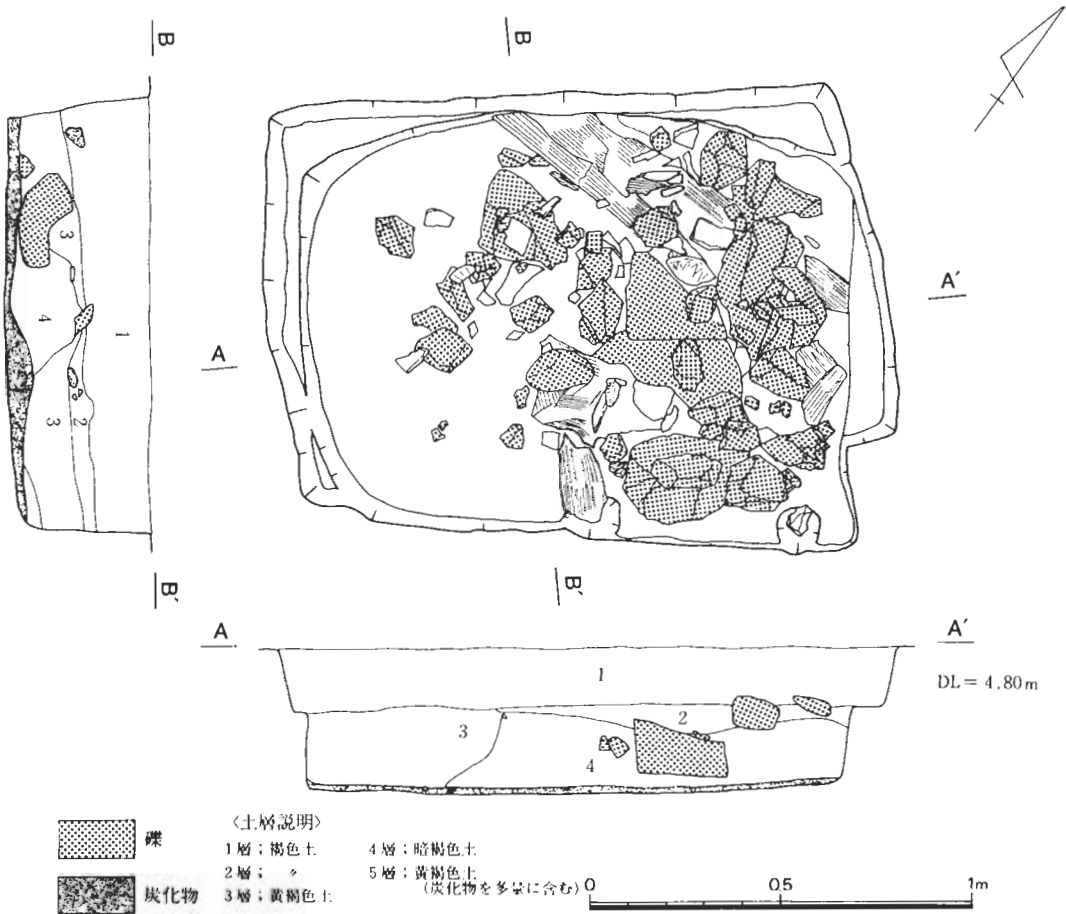


第 20 图 SD2 实测图

った。南西側は試掘調査時に攪乱を受けたため検出できなかった。北西側は溝の痕跡を確認することはできず、人為的に掘削されたSD1はここを端部とする。出土遺物は土師器の羽釜、瓦質土器のコネ鉢や碗、常滑焼の甕の体部破片が出土している。この常滑焼の甕はSK2からも同一個体のもと思われる破片が出土している。埋土は黒褐色土である。

SD2 (第20図)

調査区の東側で検出する。K27-11グリッドより南西に向いL26-12グリッドに達する溝である。北東側の端部は極く細く検出された。北東部における溝幅の減少はこの溝本来の状況とは考えられず、中世以降の削平によるものと思われる。幅は確認できた部分で最大2.40m、深さ約30cmを測る。溝内には30cm大の礫が多く存在する。埋土は灰褐色土であり、底部に鉄分の沈澱層が存在する。底面はやや複雑な様相を呈している。自然流路と言うよりは人工的



第21図 SK2 実測図

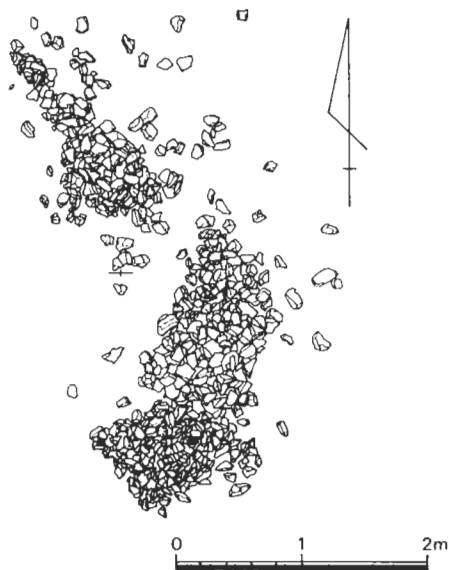
灌溉用水路もしくは、住居地を区割する目的の溝と考えられる。出土遺物は土師器の杯、須恵器の甕体部、常滑焼の甕体部破片等が出土している。

SK2 (第21図)

調査区北西部で柱穴群の南端にあり、同時期の埋土を有するSD1の北隣に位置する。L25-1, L25-6グリッドを中心に検出した。可成り鋭い角を持つ方形のプランを呈し、長軸約1.60m, 短軸1.20mであり、軸方向はN-48°-Eである。東壁と西壁の半ばに段部を有し二段掘りの様相を呈する。検出時の埋土は黒褐色土である。土壌内はやや東に片寄り遺物等を出土する。壙内より検出した石は5cm程度のものから最大で40cm程度あり、部分的に熱を受けた痕跡を有する。これらの石は3個程の大きな石を割ったものであり、断面に熱による変化がみられないことから、埋葬時に破砕され埋められたものと思われる。石と共に燃料として使用されたと思われる炭化した木片も多く出土している。土壌の底面では1~2cmの炭の堆積がみられた。出土遺物は、青磁の碗、白磁、土師器の鍋、瓦器の椀、常滑焼の甕等の破片が出土している。この内、青磁碗、土師器鍋は埋葬時に砕かれて埋められたものと思われる。

集石I (第22図)

調査区西端で検出された河原石の集中部分である。L24-18, 19から24グリッドに亘って半円の形態を呈していた。10~20cm大の石が多くを占めている。標高4.50mから5.00m内で約千個余りの石を検出する。西壁の外側にも続くものと思われるが、掘り込み等のプランは検出できない。遺物としては瓦の出土をみる。



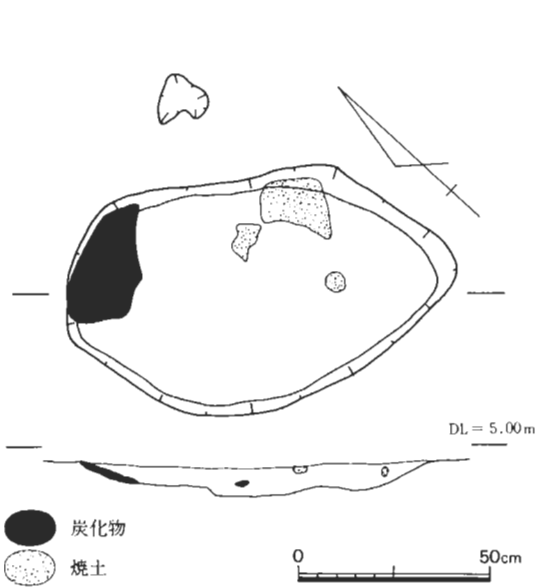
第22図 集石平面実測図

炉跡I (第23図)

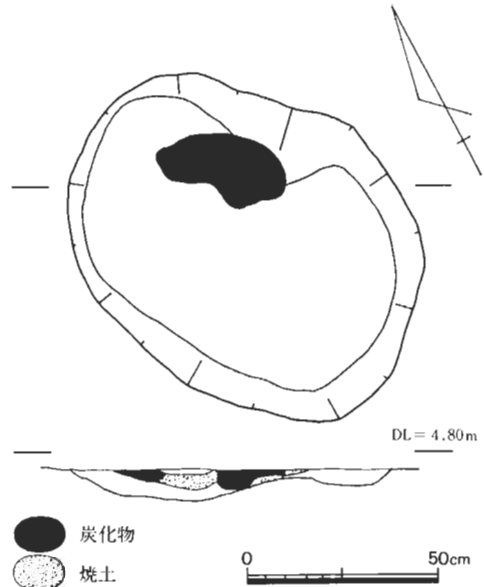
調査区中央部に位置する。L25-10グリッドを中心に検出する。規模は長径1.00m, 短径0.60mの楕円形を呈し、検出面より中央部で8cmの深さを測る。長軸方向はN-46°-Wである。主たる埋土は焼土、炭を含む褐色土であり、部分的に炭化物が底面に見られる。検出時の標高は4.85mである。

炉跡II (第24図)

調査区中央部やや東寄りに位置する。K26-22グリッドで検出された。長径1.00m, 短径



第 23 図 炉跡Ⅰ実測図



第 24 図 炉跡Ⅱ実測図

0.80 m の楕円形を呈し、深さ 8 cm を測る。長軸方向は $N-33^{\circ}-W$ である。主たる埋土は褐色土であり、焼土と炭化物を混入する。検出時の標高は 4.75 m である。(藤方)

石列Ⅰ (第 17 図)

調査区中央部に位置する。K 25-19, 24 グリッドを中心に検出された。標高 5.00 m において、最大で 30 cm 大の礫を有する。石列の方向は $N-40^{\circ}-W$ であり、幅は 1 m を越えない。水田の畦等に使用されたものか、中世の掘立柱建物 SB 7 に伴うものとも考えられる。同時に出土した遺物は、土師器の鍋、羽釜、常滑焼の甕体部破片が出土している。

2) 出土遺物

柱穴群からの出土遺物 (第 25 図 1~6, 9~11)

1 は常滑焼の大甕口縁部破片であり、P 1 からの出土である。口縁部が肥厚し端部に凹線状の窪みを持つ N 字状口縁を呈する。常滑編年の第 IV 期に相当する。

2, 3, 5, 6 は土師器の小皿であり、それぞれ P 2, P 3, P 4, P 5 からの出土である。2, 3 は底部外面に回転糸切り痕を持ち、体部は口縁端部に向って直線的に立ち上がる。5 は回転台成形であり、底部端から直線的に口縁端部に向って立ち上がる。6 は手づくね成形であり、底部から内湾気味に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部外面で撫でによる面を成す。

9, 10 は土師器の杯であり、P 6 からの出土である。9 は体部が底部端から内湾気味に立ち上

がり口縁部でやや外反する。内面にロクロ目を残す。10は回転台成形であり、体部は直線的に立ち上がる。

11は口禿の皿であり、P7からの出土である。平坦な底部から体部は直線的に立ち上がり口縁端部で外傾する狭い面を成す。空色を帯びた白色を呈す。

SB 7 (第 25 図 4)

4は土師器の小皿であり、SB7を構成する北東隅のP1からの出土である。底部外面に回転糸切り痕を持つ。体部は口縁部に向って直線的に立ち上がり、端部を丸く修める。

SD 1 (第 25 図 16, 17)

SD1からの出土遺物で実測できたものは以下の2点である。

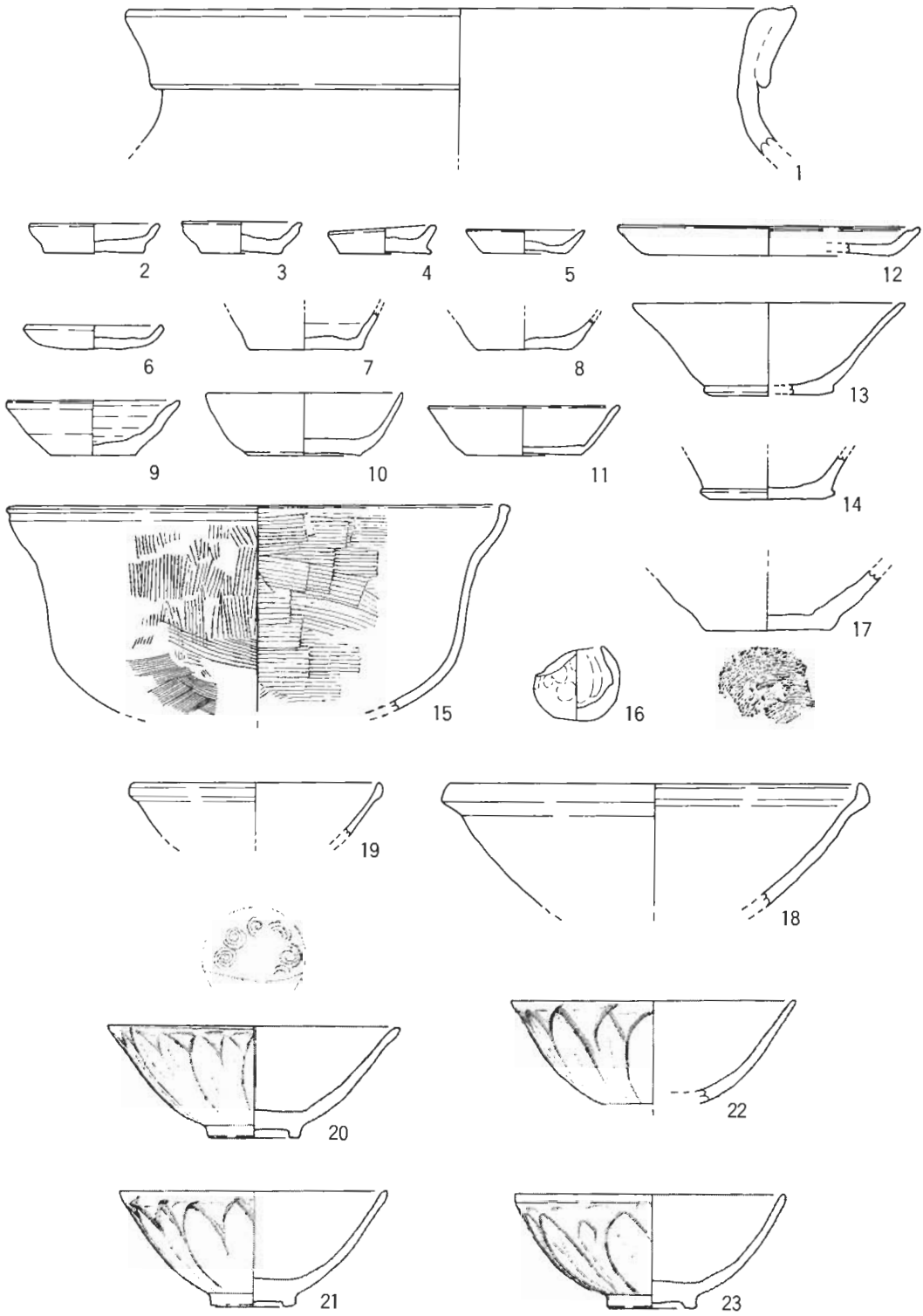
16は、土師器の手捏ね土器である。内面に指頭による縦方向の撫でがみられ、外面の一部に煤の付着が認められる。古墳時代祭祀跡から出土のものと同形態と思われる。17は東幡系のコネ鉢である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反し端部を摘み上げる。

SK 2 (第 25 図 15, 19~23)

15は土師器の鍋である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は外傾する面を成す。内面は横方向の刷毛、外面は縦方向の刷毛を施す。備前型の鍋である。19は白磁の碗であり、IV類に相当するものである。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で玉縁状を呈する。20~23は何れも龍泉窯系の青磁碗である。体部外面に鎬蓮弁紋を持つ。19は内面に孔雀を表すと思われる模様を見る。

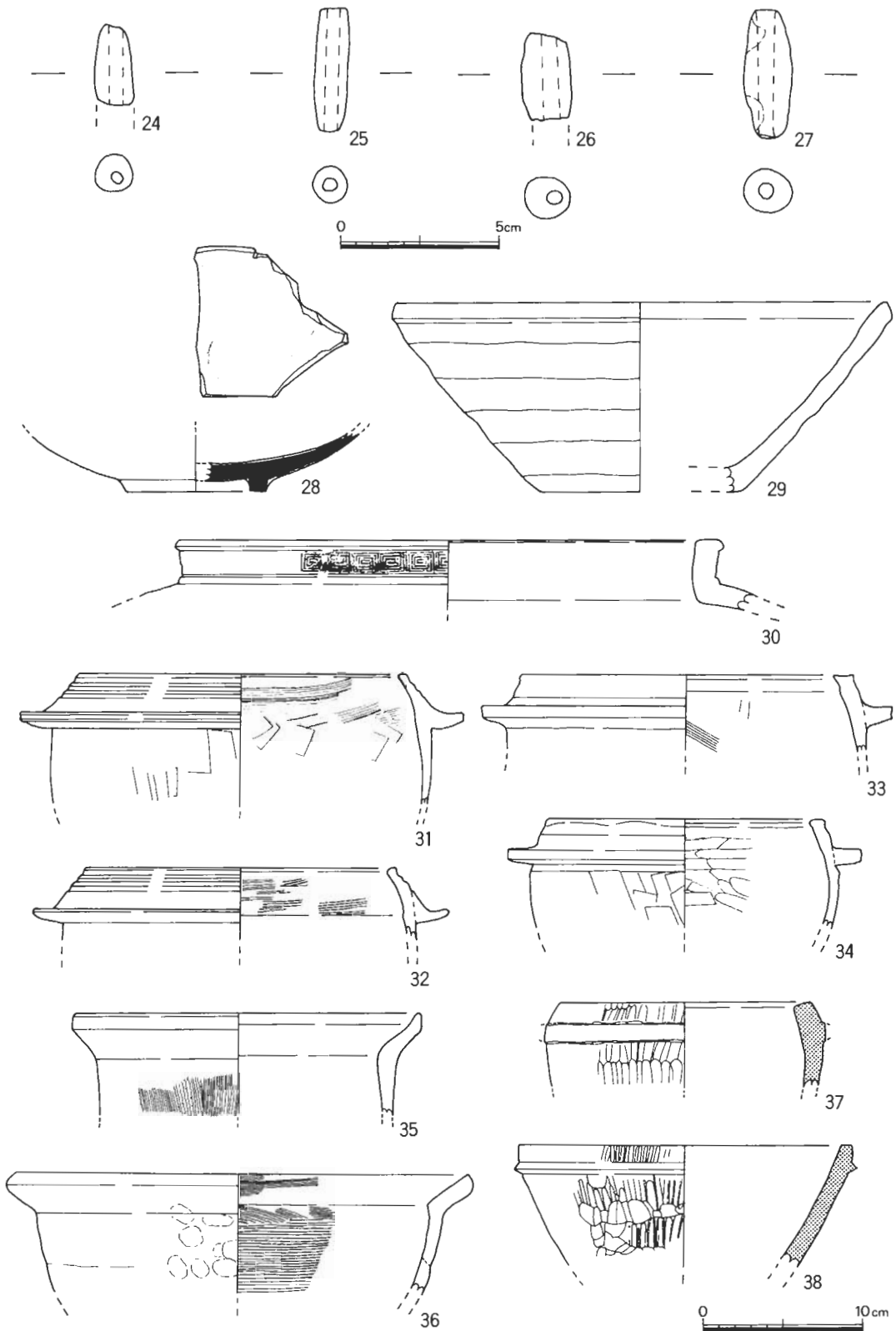
遺構外の出土遺物 (第 25~27 図 12~14, 18, 24~42)

7, 8は土師器の杯である。8は底部外面に回転糸切り痕を持つ。12は土師器の皿である。口縁部で外反する。13・14は土師器の碗と杯である。双方共底部外面に篋切り痕のある円盤高台を持つ。18は底部外面に回転糸切り痕のある東幡系鉢である。28は伊万里焼の盤である。内面に笹葉の模様を見る。29は瓦質土器のこね鉢である。30は瓦質の風炉である。法貴寺遺跡出土の風炉と同形態のもので、口縁部外面に雷紋を施す。31~34は羽釜である。31・32は土師器であり和泉・河内型のものである。33は土師器であり、34は須恵器の焼き上がり呈したものである。35は土師器の甕である。36は備前型の鍋である。37・38は滑石製の石鍋である。37は体部が内湾するものであり、38は直線的に外上方に立ち上がるものである。24~27は土錘である。39~42はIV層より出土の砥石である。39~41は泥質砂岩製、42は泥岩製である。(藤方)

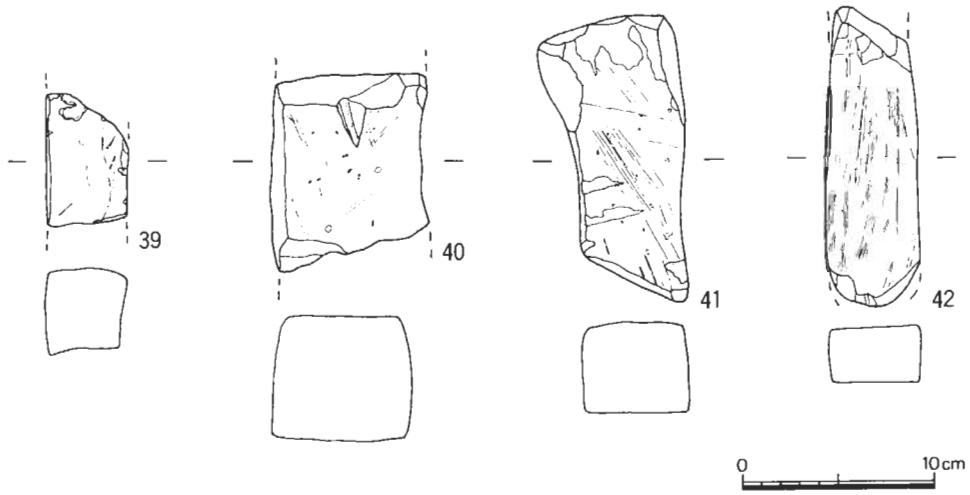


0 10cm

第25图 中・近世遺物実測図(1)



第 26 图 中・近世遺物実測図(2)



第 27 図 中・近世遺物実測図(3)

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 法量 (cm) 底径	形態・文様	手 法	備 考
25-1	P1	陶器 大甕	40.0 (8.8) — —	n字状口縁を持つ。	内外面共横方向のナデ調整。	常滑焼
◇-2	P2	土師器 小皿	8.0 1.8 — 6.0	底部外面に回転糸切り痕を持つ。 直線的に立ち上がり口縁端部に至る。		回転台成形
◇-3	P3	土師器 小皿	7.0 1.9 — 4.8	底部外面に回転糸切り痕を持つ。 底部端からやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部でやや外反する。	外面口クロナデ調整	回転台成形
◇-4	SB7 P1	土師器 小皿	6.4 1.5 — 5.6	底部外面に回転糸切り痕を持つ。 直線的に口縁端に向って立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。		回転台成形
◇-5	P4	土師器 小皿	7.2 1.4 — 5.0	底部端から直線的に口縁端に向って立ち上がる。口縁端部を丸くおさめる。		回転台成形
◇-6	P5	土師器 小皿	8.2 1.4 — —	底部から内湾気味に立ち上がる。	内面はナデ調整。	手づくね成形
◇-7	IV層	土師器 皿	8.8 2.4 — 6.6	平坦な底部から体部は直線的に立ち上がる。	内面は口クロ目を残す。	回転台成形
◇-8	V層	土師器 杯	— 1.8 — 5.8	底部外面に回転糸切り痕を持つ。		回転台成形
◇-9	P6	土師器 杯	10.4 3.3 — 5.2	底部外面に回転糸切り痕を持つ。 底部端から内湾ぎみに立ち上がる体部。口縁部でやや外反する。	内面口クロ目を残す。外面口縁部で横方向のナデ調整	回転台成形
◇-10	IV層	土師器 杯	11.8 3.8 — 6.8	平坦な底部を持ち、体部は直線的に立ち上がる。		回転台成形
◇-11	P7	白磁 皿	11.4 3.0 — 7.0	体部は直線的に立ち上がり口縁端部でやや外反する。口縁端部は外傾する狭い面を成す。	黄灰色を帯びた口縁の白磁	
◇-12	表探	土師器 皿	18.0 1.7 — 14.4	底部外面に浅切り痕を持つ。口縁部で外反する。	内外面口クロナデ調整	回転台成形
◇-13	V層	土師器 碗	16.4 5.5 — 7.8	底部外面に浅切り痕のある円盤状高台を持ち、体部は直線的に立ち上がり口縁部に向ってやや外反する。		回転台成形
◇-14	V層	土師器 杯	— 2.6 — 8.1	底部外面に浅切り痕のある円盤状高台を持ち、体部は直線的に外上方に立ち上がる。		
◇-15	SK2	土師器 鍋	29.6 (12.5) — —	体部は内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は外傾する面をなす。	外面上部で縦方向の刷毛、下部で横方向の刷毛、内面横方向の刷毛を施す。	
◇-16	SD1	土師器 碗	4.4 4.5 — —		内面は指頭によるナデ。外面指頭印痕を残す。外面において部分的に煤が付着。	手捏ね成形

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
25-17	SD 1	こね鉢	24.6 (7.4) — —	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部で外反し、口縁端部で立ち上がる。	内外面はヨコナデ調整。特に口縁部内外面は強いヨコナデ調整	東幡系
◇-18	IV層	鉢	24.6 (7.4) — —	底部外面に回転糸切り痕を持つ。平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる。	外面はヨコナデ調整。	東幡系
◇-19	SK 2	白磁碗	15.0 (3.2) — —	口縁端部で玉縁状を呈す。		白磁碗のV類
◇-20	SK 2	青磁碗	17.5 6.8 — 5.6	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。外面に鑄蓮弁紋、底部内面に孔雀の模様の施す。		龍泉窯
◇-21	SK 2	青磁碗	16.1 7.0 — 5.2	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部に至る。外面に鑄蓮弁紋を施す。		龍泉窯
◇-22	SK 2	青磁碗	17.1 (6.2) — —	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。外面に鑄蓮弁紋を施す。		龍泉窯
◇-23	SK 2	青磁碗	16.2 6.9 — 5.4	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部に至る。外面に鑄蓮弁紋を施す。		龍泉窯
26-28	表探	磁器盤	— (3.6) — 9.0	底部からやや内湾気味に立ち上がる。	内面は鏡の草花紋を施し、黄灰色、外面空色を呈す。	伊万里焼
◇-29	V層	瓦質土器 こね鉢	30.6 11.9 — 13.0	体部は底部端から外上方に直線的に立ち上がる。口縁端部は外傾する面を成す。	内外面とも未調整。	
◇-30	V層	瓦質土器 風が	31.2 (4.4) — —	肩部から垂直に立ち上がる口縁を持つ。口縁端部で平らな面を成す。	口縁部外面に雷紋を施す。	
◇-31	IV層	土師器 羽釜	20.6 (8.2) — —	胴部から口縁部にかけて内湾し、肩部に幅の狭い鐙が付く。	口縁部外面に凹線状の段が付く。胴部内外面艶削り、口縁部内面刷毛調整。	和泉・河内型
◇-32	IV層	土師器 羽釜	19.0 (4.6) — —	胴部から口縁部にかけて内湾し、口縁端部で狭い面を成す。肩部に先端がやや上反する幅の狭い鐙が付く。	口縁部外面はナデ調整を施し、凹線状の段が付く。内面は刷毛調整。	和泉・河内型
◇-33	V層	土師器 羽釜	20.8 (4.8) — —	胴部から口縁部にかけて内湾し、口縁端部は平らな面を成す。肩部に断面長方形の鐙が付く。	口縁部内外面強いヨコナデ調整	
◇-34	IV層	瓦質土器 羽釜	16.0 (6.9) — —	胴部から口縁部にかけて内湾し、口縁端部は平らな面を成す。肩部に断面長方形の鐙が付く。	内面は指頭によるナデ、外面は胴部で艶削り、口縁部でヨコナデ調整。	須恵器質を呈す。
◇-35	V層	土師器 甕	21.6 (6.5) — —	肩部から口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁端部で上方に立ち上がり、外面は平らな面を成す。	口縁部内面で横方向の刷毛後ナデ。外面でヨコナデ。体部外面縦方向の刷毛調整。	
◇-36	IV層	土師器 鍋	28.8 (7.6) — —	胴部は内湾気味に立ち上がり。口縁部で外上方に立ち上がる。	胴部内面は横方向の刷毛、外面は指頭汗痕が残る。口縁部内面は横方向の刷毛後ナデ、外面は横方向のナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
◇ - 37	V層	石製 鍋	15.8 (5.5) — —	胴部から口縁部にかけて内湾し、 口縁端部は内傾する平らな面を成 す。	外面に鑿状工具による削り痕。	滑石製
◇ - 38	V層	石製 鍋	21.0 (7.7) — —	胴部から口縁端にかけてやや内湾 気味に立ち上がる。口縁端部は平 らな面を成す。肩部において断面 三角形の鑿を削り出す。	外面に鑿状工具による削り痕。	滑石製

挿図番号	遺構	器種	全長 (cm)	直 径 (cm)	孔 径 (cm)	重 量 (g)
26 - 24	V層	土鍾	2.5	1.2	0.4	2.9
◇ - 25	IV層	◇	3.9	1.0	0.4	4.4
◇ - 26	IV層	◇	(2.7)	1.5	0.5	4.7
◇ - 27	V層	◇	4.0	1.5	0.5	6.8

第4章 総括

縄文時代については晩期中村Ⅱ式に含まれる刻み目突帯文土器が数点と、それに伴うと考えられる打製石斧が1点出土しているのみであり、遺構の検出には致らなかった。弥生時代は今回の調査では前期末と考えられる高坏、そして中期から後期にかけての甕類が出土している。これらは明確な遺構に伴って出土したのではなく、炭化物集中地点の周辺域から比較的纏まって出土したものである。青灰色粘土層中よりの出土であり、文化層の明確な分層は不可能ではあったものの、それぞれ時期的差異により、若干のレベル差があったことが看取される。高知県の西部地域に於いては、弥生時代の該期の資料は少なく、今後の検討にゆだねられる。

古墳時代については、前年度に続き祭祀跡を3ヶ所検出している。SF 19は前年度の祭祀集中地点の縁辺部にあたる。須恵器大甕を中心とし、須恵器坏・蓋、甗、高坏及び土師器甕、高坏、甗、そして祭祀遺物白玉で構成されている。SF 20・21は前年度調査区より上流域に新たに祭祀跡が展開していることが判明している。共に広範囲に遺物が散在する状況を呈しており、中心的な集中箇所は認められなかった。SF 20の構成遺物は白玉、土玉、土製勾玉、土製模造鏡、手捏ね土器等の祭祀遺物、須恵器坏・蓋、土師器碗、甕等である。SF 21についても同様の器種で構成されている。

中世の遺構は、調査区の北部を中心に検出された柱穴群が主なもので、その数は200個を超える。この柱穴群の中から確認された掘立柱建物は8棟であり、面積20㎡から30㎡をやや越える規模であり、その棟方向から、概ね二時期に大別することができる。一つは北東方向に主軸を持つものであり、もう一つは北西方向に主軸を持つものである。前者は調査区の北西部分で多く検出され、一棟の建物において数度の建て替えが行われ、尚且棟方向を若干違った建物が重複することから、一時期と称してもある期間を相当させねばならない。

この柱穴群の南側で検出されたのがSK 2とSD 1の遺構であった。共にその長軸方向を北東とするものである。火葬墓と考えられるSK 2から出土した遺物は、青磁碗（第25図20～23）、白磁碗（同19）、土師器の鍋（同15）、瓦器碗と常滑焼甕の破片等、であった。この青磁碗は鎬蓮弁紋を持つ龍泉窯系のものであり、白磁は第Ⅳ類に属するものである。又、土師器の鍋はその形態から備前型の鍋に分類される。以上の出土遺物から、この被葬者は生前にある程度経済的に安定した生活を送っていた人物であったと考えられ、13世紀後半にこの土壌に葬られたものである。

SK 2の床面には一様な炭の堆積が見られるものの、土壌内から出土した遺物は全て破片であり、燃料として使用されたと考えられる炭化した木片や礫と共に、無秩序に土壌に放り込まれたものである。

土壙内から出土した土師器の鍋も破片であるが、蔵骨器としての使用を目的としたものか、被葬者の遺体の一部を覆うためのものと考えられる。

土壙の壁及び床面に熱を受けた痕跡のないこと、明確に人骨と認められるものの出土がなかったことを加味すると、遺体はSK2以外の場所で茶毘に付された後、骨のみを選び出し他に葬り、その他を副葬品と共に土壙内に埋めたものと考えられる。(藤方・前田)

参考文献

屋敷墓について

- 橘田 正徳 「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』1991年
岡本 健児他 「中～近世小結」『田村遺跡群』第10分冊 1986年

火葬墓・墓地について

- 瀬川 芳則 「中世庶民共同墓地における火葬普及の様相」『日本考古学論集6』(吉川弘文館)1987年
久保 常晴 「火葬墓の類型と展開」『新版 仏教考古学講座 第7集 墳墓』(雄山閣)1984年
柳田 國男 「葬制の沿革について」『柳田國男全集12』(筑摩書房)
宮田 登 「墓制と魂の行方」『中世の都市と墳墓』(日本エディタースクール出版部)1988年

写真図版



調査前全景（北より）



調査風景

写真2 弥生時代



L 26-18・19 グリッド内 出土土器 (北より)



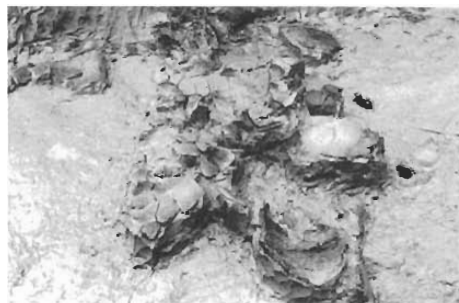
第5図5 出土状況



第7図36 出土状況



L 25-14 グリッド内 出土土器



L 25-24 グリッド内 出土土器

写真3 古墳時代祭祀跡



SF 19 出土須恵器 (第10図6)



SF 19 出土土師器 (第10図15)



SF 19 出土須恵器 (第10図8)



SF 19 遺物出土状況



SF 19 遺物出土状況 (西より)

写真4 古墳時代祭祀跡



SF 20 遺物出土状況（北より）



SF 20 出土遺物（第11図31, 51）



SF 20 出土遺物（第11図30, 41, 44, 53）



SF 20 出土遺物（第11図42）



SF 20 出土須恵器（第11図45）



SF 21 遺物出土状況（東より）



SF 21 遺物出土状況（東より）

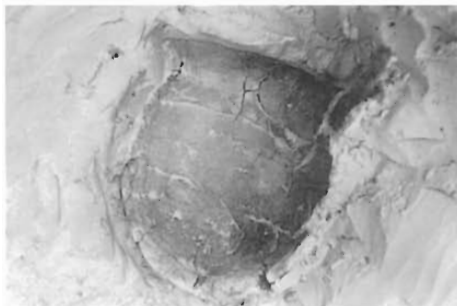


SF 21 遺物出土状況（北より）

写真6 古墳時代祭祀跡



SF 21 出土遺物 (第14図70)



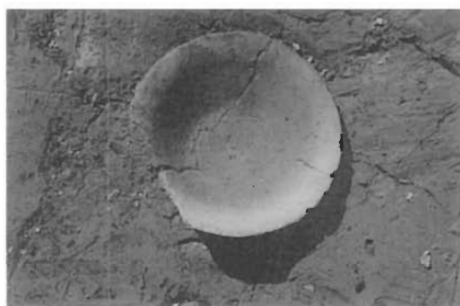
SF 21 出土遺物 (第15図82)



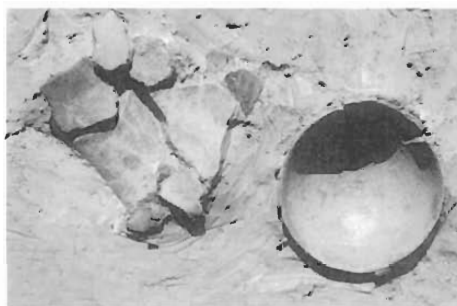
SF 21 出土遺物 (第14図67)



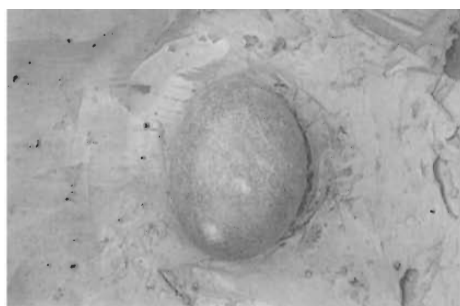
SF 21 出土遺物 (第13図18)



SF 21 出土遺物 (第14図59)



SF 21 出土遺物 (第13図48)



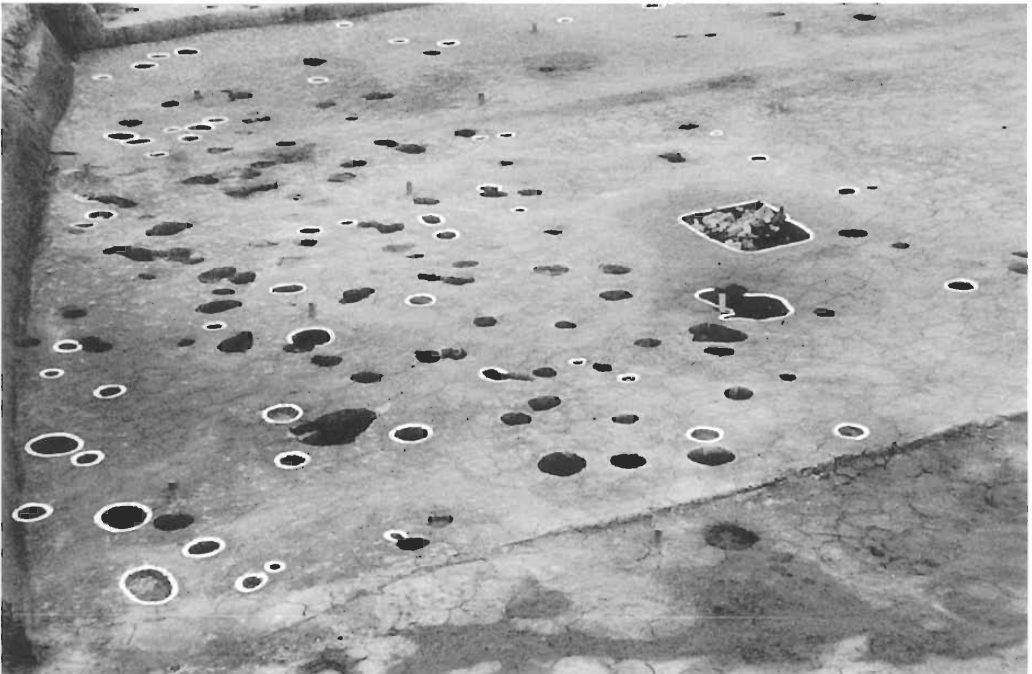
SF 21 出土遺物 (第16図90)



SF 21 出土遺物 (第14図57, 68)



1区 中世全景 (西より)

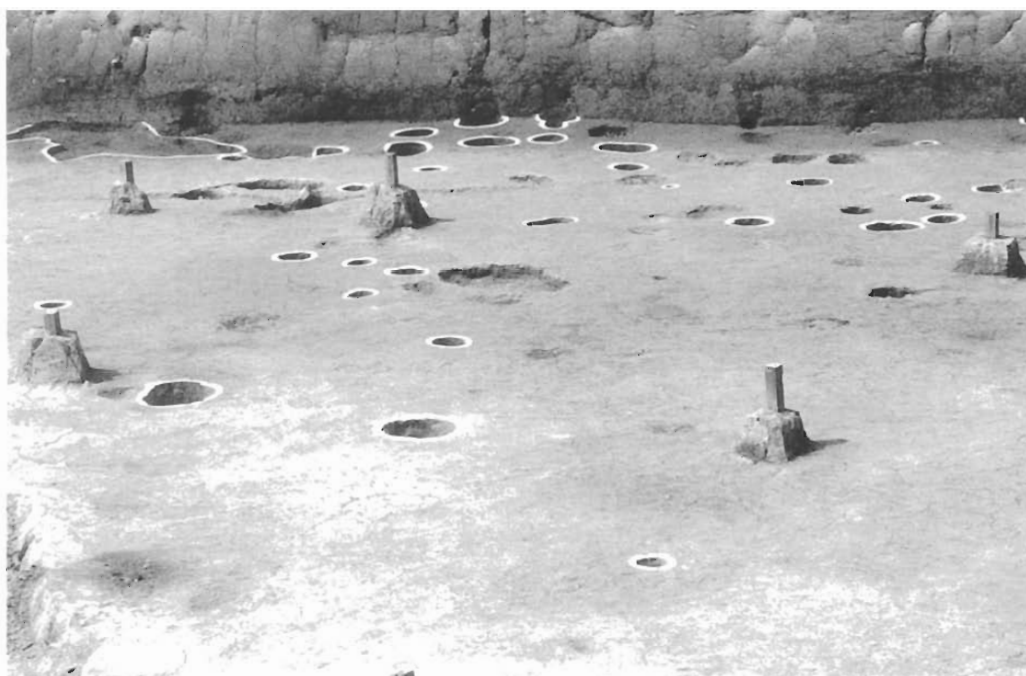


1区 中世全景 (西より)

写真8 中世



2区 中世全景（西より）



2区 中世全景（南より）



SK 2 遺物出土状況（南より）



SK 2 出土遺物（青磁）



SK 2 出土遺物（青磁・白磁）



SK 2 出土遺物（白磁）

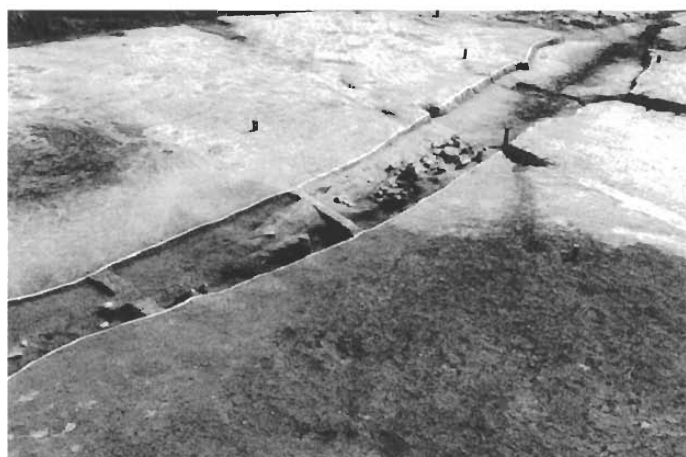


SK 2 完掘状況（西より）

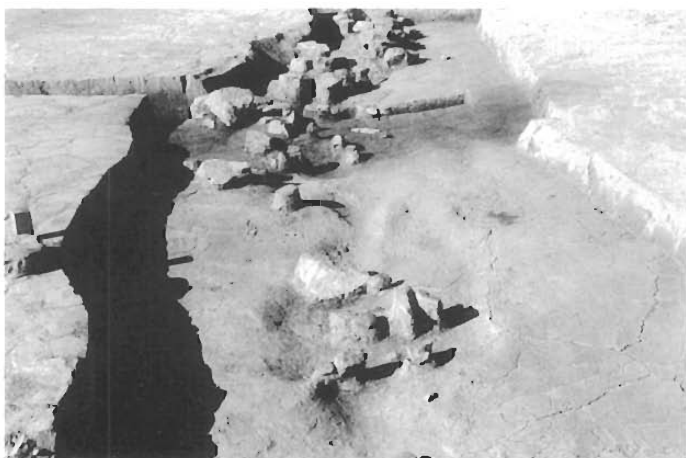
写真10 中世



SD2 全景（東より）



SD2 全景（北より）

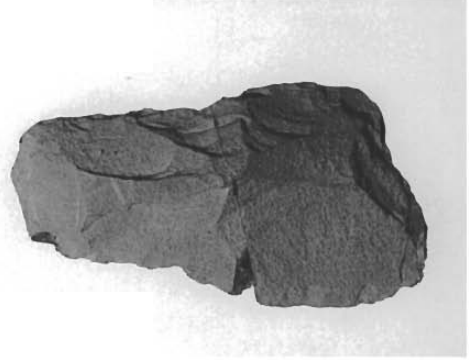


SD2 遺物出土状況（西より）

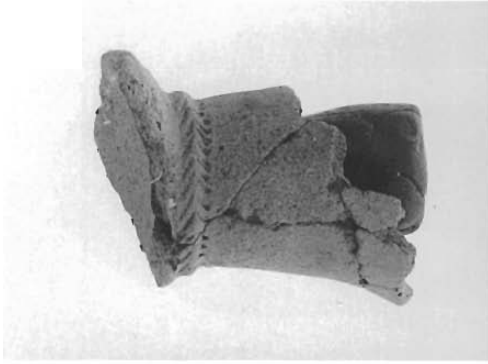
写真11 縄文・弥生時代遺物



第4図1



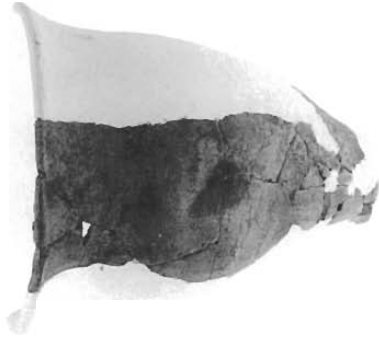
第4図2



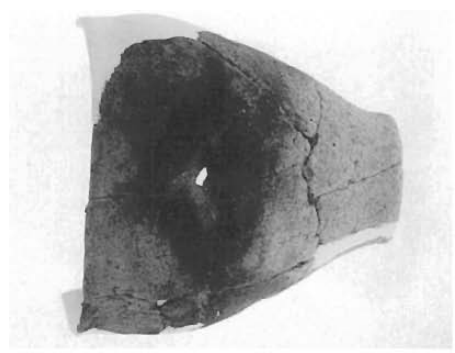
第5図3



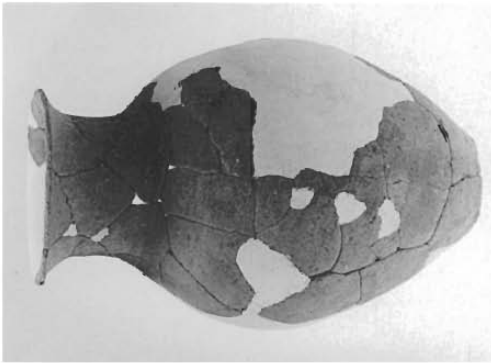
第5図4



第5図12



第6図20



第6図18



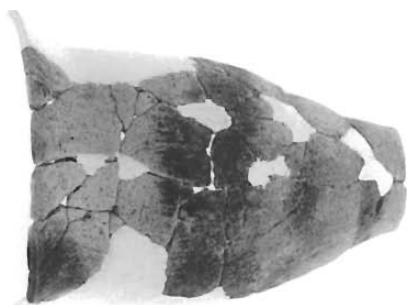
第6図28



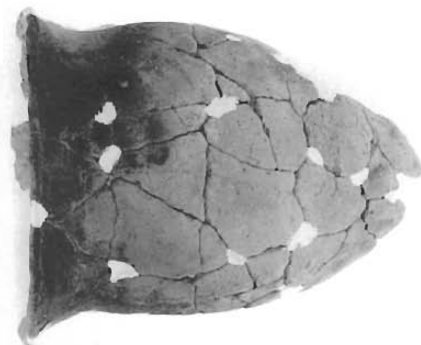
第 6 图 29



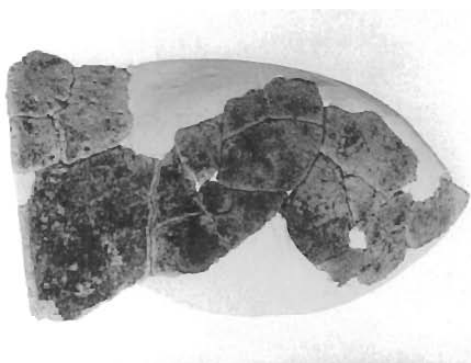
第 6 图 30



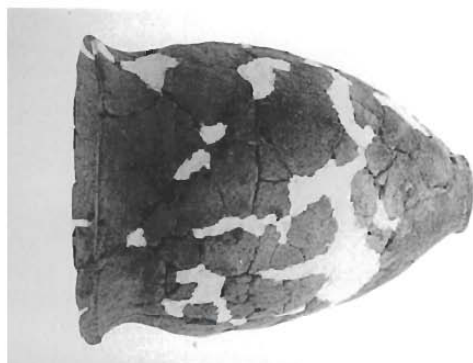
第 7 图 31



第 7 图 32



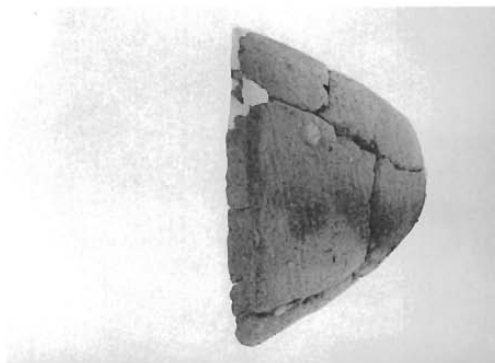
第 7 图 34



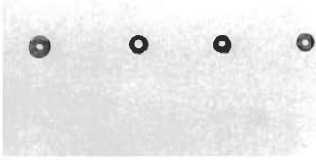
第 7 图 36



第 7 图 40



第 7 图 42



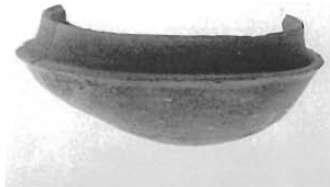
第10図1~4



第10図5



第10図6



第10図7



第10図8



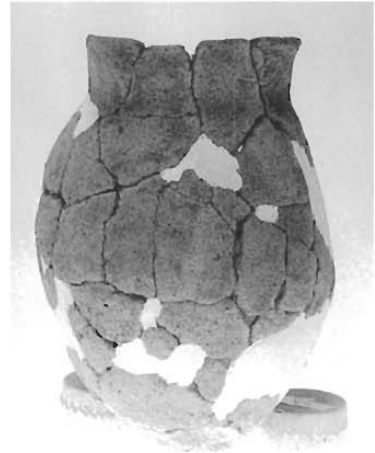
第10図9



第10図10



第10図17



第10図18



第10図13

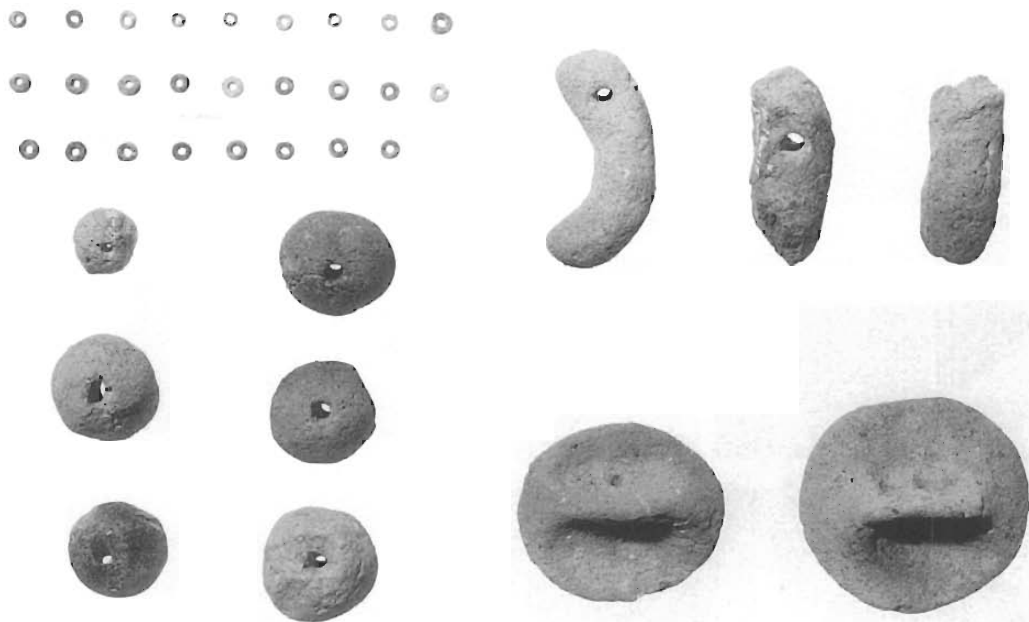


第10図12



第10図20

写真 14 SF 20

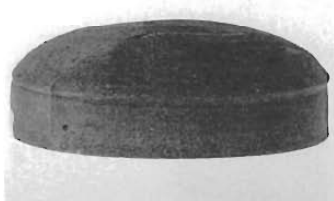


第 11 図 1~31



第 11 図 38~40

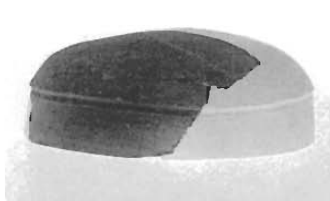
第 11 図 41, 42



第 11 図 45



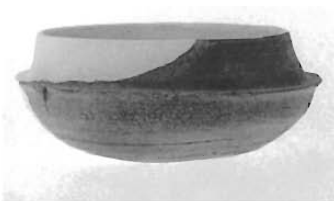
第 11 図 46



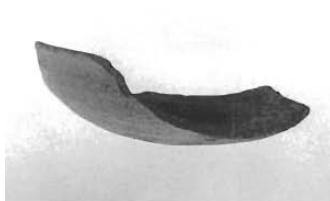
第 11 図 47



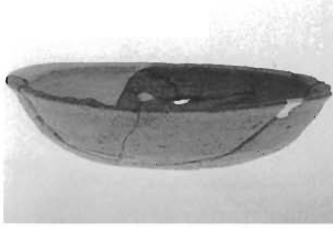
第 11 図 48



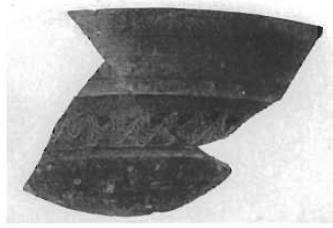
第 11 図 49



第 11 図 50



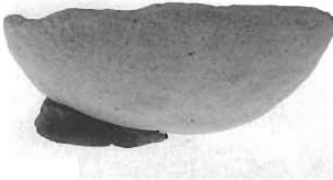
第 11 图 51



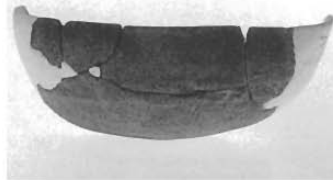
第 11 图 52



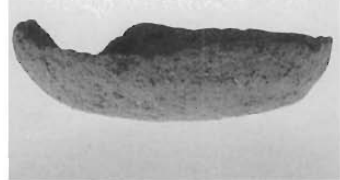
第 11 图 53



第 11 图 54



第 11 图 55



第 11 图 56



第 12 图 57



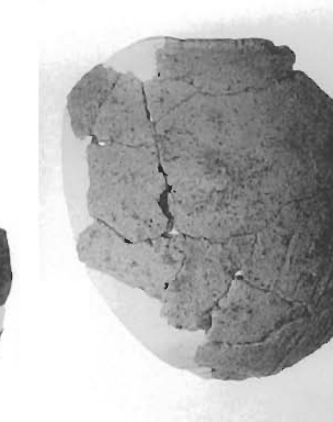
第 12 图 58



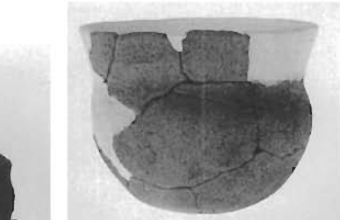
第 12 图 61



第 12 图 67



第 12 图 69



第 12 图 62



第 12 图 64



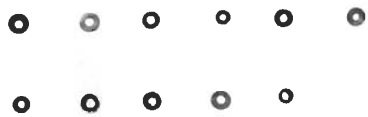
第 12 图 70



第 12 图 71



第 12 图 72

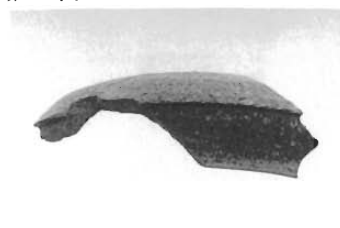


第 13 图 16~19



第 13 图 1~15

第 13 图 20~22



第 13 图 23



第 13 图 24



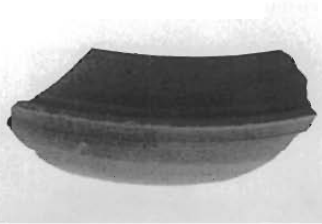
第 13 图 26



第 13 图 27



第 13 图 28



第 13 图 30



第 13 图 34



第 13 图 35



第 13 图 36



第 13 图 37



第 13 图 40



第 13 图 48



第 14 图 51



第 14 图 52



第 14 图 53



第 14 图 54



第 14 图 57



第 14 图 67



第 14 图 68



第 14 图 69



第 14 图 58



第 14 图 70



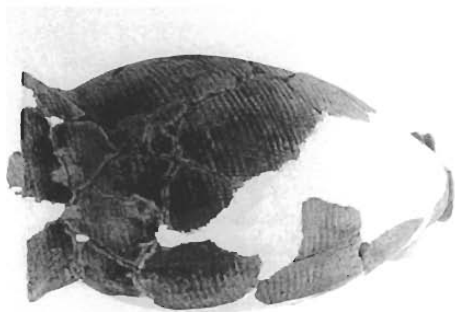
第 15 图 71



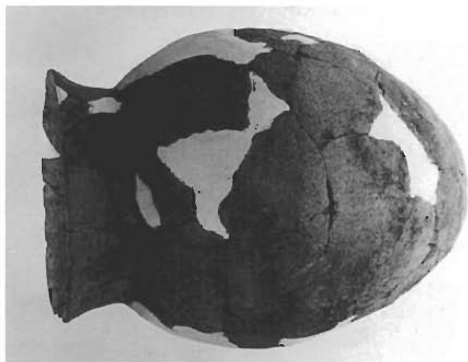
第 16 图 89



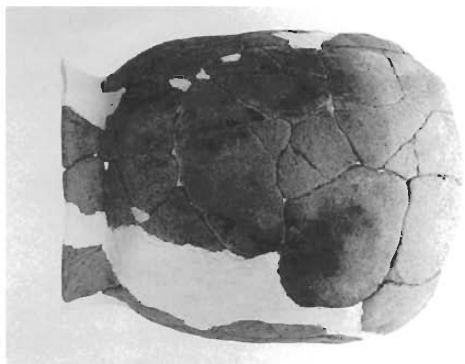
第 16 图 90



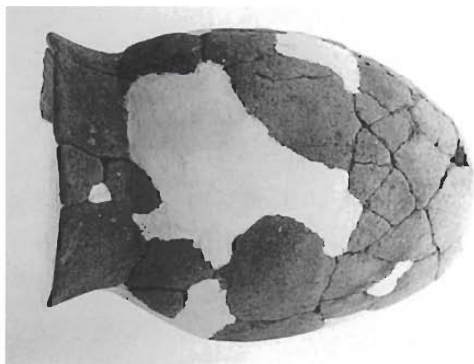
第 15 图 74



第 15 图 77



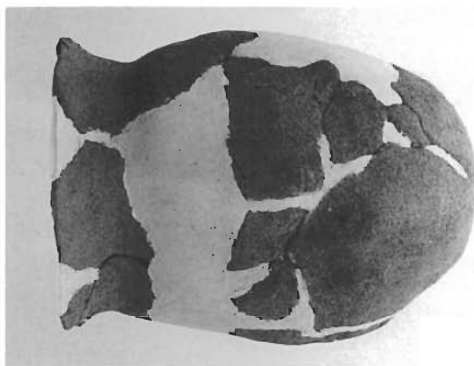
第 15 图 78



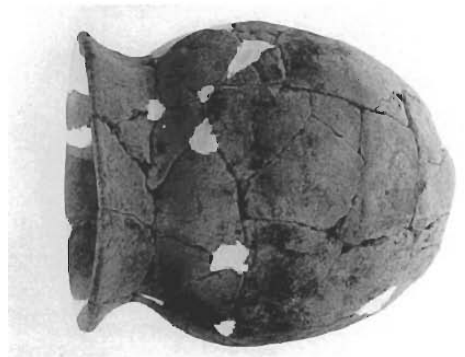
第 15 图 79



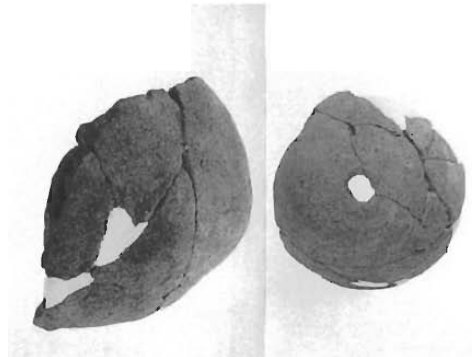
第 15 图 80



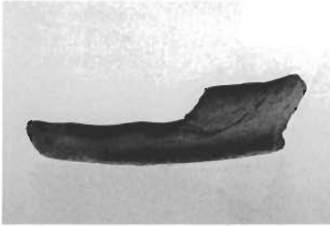
第 15 图 82



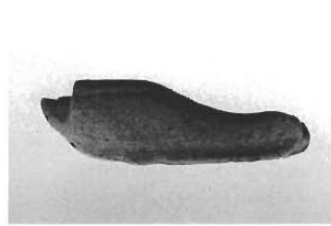
第 16 图 84



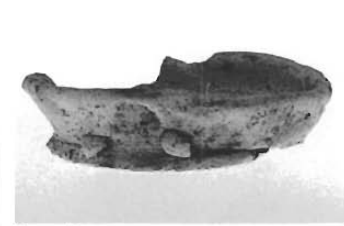
第 16 图 88



第 25 図 2



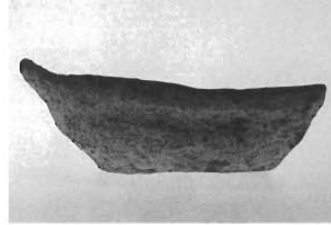
第 25 図 3



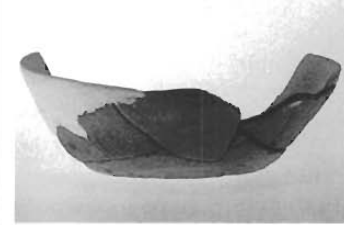
第 25 図 4



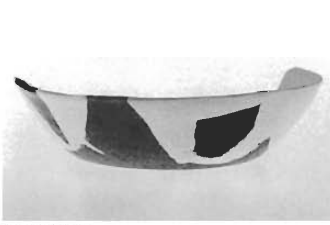
第 25 図 5



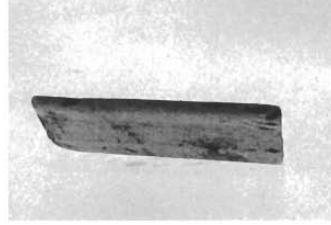
第 25 図 9



第 25 図 10



第 25 図 11



第 25 図 12



第 25 図 13



第 25 図 18



第 25 図 19



第 25 図 20



第 25 図 21



第 25 図 22



第 25 図 23



第 26 図 24~27

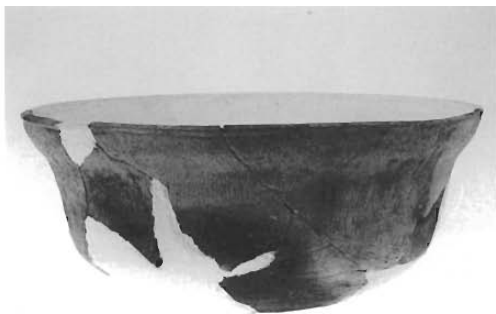


第 27 図 40

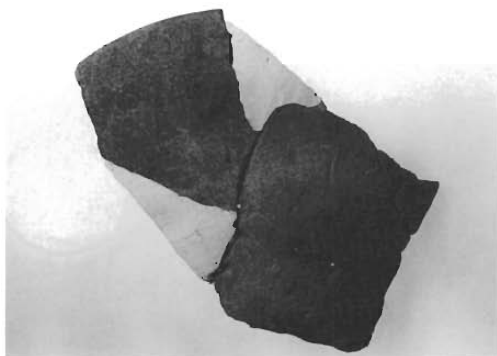


第 27 図 41

写真 20 中・近世



第 25 图 15



第 26 图 29



第 26 图 30



第 26 图 34



第 26 图 35



第 26 图 36



第 26 图 37



第 26 图 38

後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

具同中山遺跡群

第2分冊

発行日 1992年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

印刷 (有)西村謄写堂